

うつせみのあなたに

第1巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	4
第1部 08.12.19～09.01.03	
第1部	10
08.12.19 今日は誕生日	10
08.12.20 地図は現地ではない	12
08.12.21 消えてしまいたい指数	14
08.12.22 言葉に振りまわされる毎日	16
08.12.23 狂ったサル	19
08.12.24 あえて、その名は挙げない	22
08.12.25 遠い所、遠い国	26
08.12.26 横たわる漱石	30
08.12.27 信じてはいけない言葉	33
08.12.28 そして、話はお金に行き着く	38
08.12.29 匿名性の恐ろしさ	43
08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について	51
08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった	55
09.01.01 私家版『存在と無』一序文一	59
09.01.02 論理の鬼	65
09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について	72
第2部 09.01.04～09.01.19	
第2部	82
09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球	82
09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性	90
09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にはならない	99
09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考	106
09.01.08 見えないものを見る	116
09.01.09 読めないけど分かる言葉	122
09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉	127

09.01.11	目は差別する	134
09.01.12	投資って何だろう？ お金って何だろう？	143
09.01.13	架空書評：狂った砂時計	154
09.01.14	ん？	161
09.01.15	「ん」の不思議	171
09.01.16	あなたなら、どうしますか？	183
09.01.17	やっぱり、ハンコは偉い	195
09.01.18	架空書評：何もかもが輝いて見える日	207
09.01.19	こんなことを書きました（その1）	213

あとがき

あとがき	222
----------------	-----

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル	223
--	-----

奥付

奥付	242
--------------	-----

はじめに

はじめに

本書を第1巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書「第1巻」では、その後の数々のブログ記事でテーマになる、いくつものトピックスがぞろぞろと出てきています。その意味では、「助走」と言えます。本格的に真正面から大きなテーマに取り組んでいく前の準備運動とはいえ、かなり突っ込んだ論考もあります。全体に共通するのは、表象の仕組み、つまり「何かの代わりに何かではないものを用いる」という観点です。

本書の読み方として、本編最後の「09.01.19 こんなことを書きました(その1)」に目をお通しになった後に、該当する各記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

第2部

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

あとがき

『うつせみのあなたに第1巻～第11巻』の記事タイトル

第 1 部 08.12.19～09.01.03

第1部

ブログタイトル：ネガティブに生きる（2008年12月19日～2009年1月3日）

08.12.19 今日は誕生日

◆今日は誕生日

2008-12-19 19:52:24 | Weblog

万歳！朝起きたら、肩凝りと頭痛が治っていた。

昨日は最悪だった。家の中の問題が原因でストレスが生じたせいか、昼過ぎあたりから猛烈な肩の凝りを感じ始めた。そのうち頭痛がしてきたため横になってじっとしていたが、ひどくなる一方で処置なし。悪寒がして風邪っぽくなるし、例の「死にたい」「消えてしまいたい」という気持ちが鈍く全身を貫く。そんなときは、寝ているのがいちばん。

そのうち、夜になる。何とか軽めの食事をとり、やっとの思いで風呂に入り、医者が処方してくれている薬をいつもより1錠多めに飲んで寝入った。

それが効いたのか、よく眠れた。目覚ましの音を聞いて、恐る恐る体にご機嫌伺いを

すると、肩凝りと頭痛が嘘のように去っていた。

まあ、そんなわけで、きょうは久しぶりにいい朝を迎える。朝食を終えてからはさっそくパソコンに向かい、検索エンジンで各社のブログを対象にした比較サイトをはしごする。

goo が初心者向け、とのコメントがいくつかあった。で、ここを選んだというわけ。

前からブログを始めたいと思っていたが、ようやく開けた。そう言えば、きのう、横になってうんうん唸りながらも、ブログを始めたいなあ、という考えが何度か頭の中をよぎった。

この苦しみを、誰かに伝えたい。というか、何でもいいから、とにかく発信したい！って感じかな。

さて、タイトルの「ネガティブに生きる」にあるとおり、このブログのテーマは「うつとの闘い」、いや、「うつとの付き合い」というべきか。

うつであるために、ポジティブに生きられない。頑張れない。だから、ネガティブに生きることで、うつと闘う、または共存する。そんな日々を送っている自分が考えていることを、このブログに書いてみたい。

ネガティブに生きると言っても、ネガティブとポジティブは反意語のようでありながら、実際にはかなり重なりあっている部分がある。「頑張らない」が実は「頑張る」という表現の言い換えである場合が、いい例だ。

言葉というものは、いい加減なものだから、こんなことは珍しくない。「嫌い」と「好き」、「温かい」と「冷たい」、さらには「善」と「悪」、「正しい」と「間違っている」に至るまで、その線引きが難しいのは日常的に誰もが経験していることではないか。

ああ、疲れた。

きょうはこの辺にしておこう。ネコを呼んで、えさをあげなくては。

08.12.20 地図は現地ではない

◆地図は現地ではない

2008-12-20 18:59:36 | Weblog

きのうも書いたことなただけど、言葉というやつ、言語といってもいいけど、これまで自分は言葉に振りまわされて生きてきたような気がする。

大学でも、文学と哲学との間みたいところでウロウロしていた。そのころ、身近にいた誰かが「地図は現地ではない」(＝「言葉は物ではない」)とか何とか力説していて、「あっそうだ。そのとおりだ。こりゃ、ひょっとして大問題じゃないか」と密かに納得してしまった。

それ以来かな。自分が言葉に妙にこだわる人間だと思ふようになったのは。

別に、言葉遣いや「美しい日本語」とやらに、うるさいっていうのとは違う。どちらかという、方言や、いわゆる「若者コトバ」や、または不正確と「言われている」言葉遣いが存在することを積極的に肯定するほうだ。

言葉にこだわるというのは、太古にヒトが言語を使うようになってしまったことが、とてつもないポジティブとネガティブの「ごったませ」状況を生み出してしまったのではないか——という思いというか、感慨というか、憤りというか、とにかくガツーンときてしまったわけで、それが今も自分の中で尾を引いている。

卒論に「世界には男根はない」(※前後関係を詳しく書かないと誤解される表現なのだけど)という意味のことを書いて、それっきり言葉と真剣に向きあうのは止めようと決意した(※あのころは今に比べれば元気もあったし「純粹」だった)。

で、一時は活字のデザイナーになろうとか、書道の師範にでもなって小学生相手に書道塾でもやろう、などと考えていた。今振り返ってみると、当時は必死になって「言葉の意味と文字とを切り離そう」としていたのではないかという気がする。

文字から意味を消し去るとも言えることなただけれども、具体的には「書道」のイメージだ。緊張しながら筆で文字を書いている時には、その文字の意味が頭から消えてしまう。文字の形だけに神経が集中する。そんな感じ。

「言語を去勢しよう」と必死になっていた。そう言っても、いいかもしれない。

*

きょうの記事をここまで読み直してみると、かなり支離滅裂な文章を書いたものだと思う。

ミシェル・フーコーとか、赤塚不二夫とか、ロラン・バルトとか、ジル・ドゥルーズとか、ジャック・デリダとか、サルトルとか、ヴィトゲンシュタインとか、ゲーデルとか、道元とか、の書物から引用しないと、ちょっと言葉が足りなさすぎると思うけど、今はもう、そんな本は手元にない。

でも、理解してほしい。こうやってブログに書いているわけだから、他人に自分の思いを伝えたいと願っているのは確かだ。

どうして、うつと言語とが自分の中でつながっているのかを、このブログにつづってみたい。少しずつ整理しながら、気長に構えて、徐々に書いていこうと思う。

ネコが邪魔をし始めたし、自分も疲れたので、この辺でネコに遊んでもらうことにします。

08.12.21 消えてしまいたい指数

◆消えてしまいたい指数

2008-12-21 13:17:40 | Weblog

きのうは、朝から体調も良く、「消えてしまいたい指数」がかなり低かったので、久しぶりに職業訓練のための通信教育の教材に取り組んだ。

何かをし始めたらぶっ通しでやってしまうのが、自分の悪い癖。休まずに続けているとそのうち、ダウンするのは分かっているのだけど、ついやってしまう。案の定、8時間目でイヤな気分になった。肩もパンパンに凝っている（※これって、自分にとってはヤバイっていう予兆なんです）。

こんなことをやっていて何になる。どうせ社会復帰は無理に決まっている。この程度の技能を身に付けたところで、仕事になるのか？

ついこの間、ひどい抑うつ状態の時に、自分の好きなことだけやって生きていこう。親が亡くなり（※いい年をして親の年金で食べている身です）、預金を取り崩したら（※すでに急速に減り始めています）、野垂れ死にするだけ——と腹をくくったばかりではないか。

そう思い始めて、「消えてしまいたい指数」がどんどん高くなりそうな気配を感じたので、エイヤツとばかりに思いきって勉強をやめて立ち上がった。無理をすると本当にヤバイことになる。

デスクを離れ自室を出ようとして、ふと振り返ったとき、デスクにしがみついている自分の姿を見たような気がしたが、もちろん幻だろう。

相当、疲れていたんだ――。

で、少し横になって休んでから、ブログを書いて、ネコに遊んでもらって、ご飯を食べて、薬を飲んで、寝た。

*

以上がきのうの話。

きょうは、まあまあの調子。「消えてしまいたい指数」は 50 前後かな。

ところで、きのうここで引用した「地図は現地ではない」というのが、一般意味論という分野から、いつの間にか他の領域にまで越境して使われているのを最近知って、いささか意外な感じがした。

いつも敬遠しながら怖いもの見たさに、ときどき本屋で立ち読みして、そのうちにイヤな気分になっていつも後悔する、自己啓発書のコーナーに並んでいる、おびただし数の本たちの中にも、「地図は現地ではない」が引用されていることがあるらしい。

グーグルで「地図は現地ではない」をキーワードに検索すると、コーチングやセラピー関連のサイトの紹介文がどさどさと出てくる。そういうのを目にすると、頭の中で赤信号が点滅するので、数行の紹介文だけを読み、サイト自体にはクリックして入らないようにしている。だから、あの言葉がどういうコンテキストで使われているのかは知らない。

*

自分の中では、「地図は現地ではない」とは、「言葉は物（＝森羅万象くらい広い意味）ではない」「お金は物ではない」「王冠は王様ではない（＝総理の椅子は総理ではない）」「テレビの画像は被写体そのものではない」「エッチ画像に映っている〇〇〇は〇〇〇そのものではない」……というのと同じで、ないないづくしの代名詞みたいなものとして理解しているのだけどー。

そこからどうして癒やしや元気の素（もと）が出てくるのかなあ？ どうつながるんだろう？

いつか、心の余裕のあるときに、調べてみよう。

このブログも三日目。文章を書くのは疲れる。

これから昼食をとって、ネコを探しに、勇気を奮って家から外に出てみよう。ネガティブに、大き目のマスクをして、ニット帽を眉のあたりまで下げてかぶって、なるべく視線を下に向けながら。

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

◆言葉に振りまわされる毎日

2008-12-22 11:43:39 | Weblog

きょうの「消えてしまいたい指数」は70～80くらい。肩が凝る。さっき、何かに書いてあった呼吸法を試してみたが、気分がぜんぜん改善しない。でも、ブログを書こうという気力はある。ブログを始めた効用は確かにあるみたいだ。

数ある、うつ症状判断のひとつに、「新聞が読めるかどうか」という項目を挙げているものがある。今朝も新聞を読む気にはなれなかった。朝食をとりながら、背後にあるテレビから流れてくるニュース番組の音声で世の中の動きを少しだけ知った。

景気が悪い。お金がない。お金を刷る。どんどん刷る。

うちもお金がどんどん減っていく。でも、お金は刷れない。

*

さて、きょうの本題。

遠い遠い昔、ヒトは言葉を持ってしまった。以来、言葉に振りまわされる日々を送っている。そんなネガティブな言い方をせず、言葉を活用しながらの日々を送っている、とポジティブにも言えるだろう。何とでも言えるのが、これまた言葉の特性だ。

【突然ですが、文体を変えます。「だ・た・である調」で書くのが、しんどくなってきましたので。】

さっきの話の続きですが、人間をやっていると、言葉に振りまわされる、つまり言葉が原因の行き違いやコミュニケーション上のトラブルには事欠かないようですね？ 困ったもんです。ニュースを聞いていても、とどのつまりは言葉が原因みたいです。

失言といったそのものズバリの問題から、ケータイがらみのさまざまな事件（※ケータイは言葉のやり取りが基本というか、それしかないです、画像を除けば）、嘘や情報操作が引き起こした犯罪、「言った」「言わない」の争い、「売り言葉に買い言葉」……。そうした言葉と密接なかかわりを持ったニュースが、メディアを通して「言葉として」伝わってきます。

『そんなん、あたり前じゃん。あんた、暇だね』（そんな、言葉が聞こえてきます。幻聴かな？ いちおう返事をしておこう）

そ、そうですよね。そう言われるのは承知のうえで、こんなことをくたくたと書いています。は、はい、確かに暇です。ただ、言葉と無縁になろうとすれば、それは人間をやめることになるくらいの大問題なんで、言葉というものが気になって仕方ないんです。

*

すべては言葉。同時に、すべては無。

行き着くところまで来ちゃいました。それを言っちゃあ、おしまいだ、というわけです。はい。

「言語つつうのは、なんだね。〇〇君、頭のいい人間が取り組むべき問題だな。さもないと、行き詰まってしまう。言語に深入りすると、出口がないからよー」

と、かつて諭してくれたある大学教授の言葉を思い出しました。卒論のテーマを選ぼうとしていた時のことでした。『お前みたいな、頭の悪いやつは、間違っても言語に体当たりするような論文を書くなよ』っていう忠告だったと理解しています。

あれから長い年月がたちました。

センセイ、ごめんなさい。〇〇めは、自分の頭の悪さを省（かえり）みず、親のすねをかじりながら、相変わらず言葉にこだわっております。はい。

言葉に振りまわされる生活——これは人間である限り、誰もが受け入れなければならない定めです。

とはいっても、言葉自体には責任はなくて、言葉を使っている人間の側に責任があるんですけど、言葉が一人歩きするというのが始末に終えないので困ります。非常に困った問題です。要するに、たちが悪いんです、言葉というものは。使い勝手も悪いし、と

てつもなく恐ろしいものです。

【ネコの鳴き声ができるので中座し様子を見て来たあと、今まで書いたところを読み返してみました。】

顎（あご）を人さし指でさすりながら（※これ、癖なんです）読んでいるうちに、「表象」という便利な言葉があったことを思い出しました。そうそう、自分がこだわり続けているものをひっくるめて言う「表象」なんです。

この「表象」というやつですが、きのうもちょっと触れましたように、言葉だけでなく、記号とか、お金とか、映像とか、行動とか——とにかく何でもありなんです。何でも、「表象」になり得るのです。

「表象文化論」とかいう言葉で教育課程を運営している大学がありますが、あれは名案ですね。何でもくくって束ねてしまえるんですもん。「あつたま、いいー」って感じで、つくづく感心します。

言語の問題は、ああいう頭のいい人たちが、ちゃんと考えてくれているんですね。

頭痛が激しくなってきました。

そばにいるネコがあまりにも気持ち良さそうに眠っているので、ちょっと添い寝をさせてもらおうかと思います。

08.12.23 狂ったサル

◆狂ったサル

2008-12-23 13:56:37 | Weblog

朝食の最中に起こったささいな家族内のもめごとが引き金になり、「消えてしまいたい指数」が90くらいになってしまった。肩がパンパンに凝り、胃が重い。やるせない。それに、イヤな雰囲気の家が漂っている。体が家の空気に染まっていくというか、家と合体してしまったようなゴチゴチした異物感。

今、このまま消えてしまってもいい。

家族なしには生きていけないくせに、「ひとりで生きるのが一番」などという、身分不相応な考えにとらわれてしまう。自己嫌悪。やりきれない。力が出ない。でも、ブログは書きたい。このところ、このブログに記事を書くことが心の支えになっている。

というわけで、頭がぼーっとした状態でものを書くのは嫌だから、処方された薬を飲むのはやめ、パソコンを起動した。

*

話を変えます。

中学生、そして高校生だったころ、哲学者になりたいと漠然と思っていた。当時の自分の中では、哲学とは人類の迷妄を正す行為を意味していた。核の脅威、冷戦、軍拡競争、公害、汚職……。現在も状況は変わっていないのに、こう並べてみると何か懐かしい響きのある言葉たちばかりだ。

たとえば、「公害」より「環境破壊」や、もっと具体的に「〇〇汚染」というほうが普通になった。「汚職」だって未だにはびこっているのに、もっと個別化した表現を使うようになった。そんな感じ。いずれにせよ、上に挙げた言葉たちが盛んに口にされていた時代に、自分は「思春期」と呼ばれている時期を過ごした。

だから、

地球上で最も邪悪で有害な生物——

それが人類だと思っていた。そんなある日、『狂ったサル』というタイトルの本を図書館で見つけて、中身は読まかったが、

そうか、ヒトは狂ったサルだ——

と、納得し確信した。

自分たちが「霊長類」などという偉そうな存在ではないことを、狂ったサルの一匹として、世の中に訴えよう。

人類の迷妄を正すのだ！

真剣に、そう決意した。で、今思うと短絡的だが、

哲学を勉強しよう！

と志を新たにし、親に希望を伝えた。ところが、

哲学なんか勉強している人間は、いずれ自殺するか路頭に迷うのがオチだ——

と固く信じている親の猛反対にあい、哲学科への入学は許されず、結局は文学を専攻することになった。

で、晴れて大学生になった。当時は……

駄目だ。もう、書けそうもない。疲れた。消えてしまいたい。

この記事を書いているうちに、少年時代の自分を思い出し、気力が上向きになるかに思えたが、逆に息が切れてきた。頭痛も激しい。

きょうは、きのうの続きで「表象」について書きたかったのに……。無理です。やっぱり、お薬を飲んで、消えてしまいたい状態が過ぎ去るのを待ちます。

08.12.24 あえて、その名は挙げない

◆あえて、その名は挙げない

2008-12-24 09:49:55 | Weblog

きょうの「消えてしまいたい指数」は40前後。これくらいだと、新聞は相変わらず読む気になれないが、ネット・ニュースをスキムしたり、コンビニまで自転車を走らせたりできる。また、やりきれなさや寂しさに負けて、猫撫で声でネコにゴマをすって遊んでもらわなくても済む。

うん、きょうは大丈夫だ。

*

さて、きのうの話の続き。

大学生になって文学を勉強していて、文芸批評というものを読むようになった。どれも退屈だった。その中で自分と波長の合う文章があって、その作者の本をよく読むようになったが、自分の周りの学生たちのその人（※その文章というべきか）に対する評価は割れていた。

なにしろ、センテンスが長い。「、」ばかりの文が数行にわたって続く。また、修飾語と名詞、主部と述部とのつながりが奇抜。そのため、何度か読み返さないと意味がとれない。表面的な意味がとれたとしても、その内容の理解に苦しむ。

「簡単なことを、わざと難しく言っているだけ」「難解なのではなく、混乱しているのだ」「只者じゃないよ。だって、ミシェル・フーコーと吉本隆明の対談を通訳したんだぜ」「読者をおちょくっているだけだよ、あいつは」「精神年齢 100 歳だよ、どう考えても」

おおざっぱに言うと、三人のうち二人は否定的な意見を持ち、残る一人が熱烈な信奉者という感じだった。そんな文章の書き手の名前をここで挙げることは簡単である。忘れたわけではない。だが、あえてその名は挙げない。理由は、この記事を読んでいるうちに分かってくると思う。

読むことの快樂（※官能性と言ってもいい）を教えてくれた人だった。同時に、固有名詞という「仕掛け＝仕組み」の巧妙さを教えてくれた人でもある。

固有名詞の持つトリッキーなメカニズムについては、後日もっと詳しく書いてみたい。ここで述べておきたいのは、固有名詞を出すことによって、たとえばこの記事に書かれた言葉たちが演じる動きが「見えなくなる」、そして「感じとれなくなる」弊害があるということだ。だから、あえてその人の名は挙げない。ただ、この記事につづる匿名化された言葉たちの運動に思考と身体をゆだねていただきたい。

*

意味をとろうとしても、実際には決して意味にたどり着けないことを、読むという体験を通して実践するように促す文章、とでもいうべきか、あるいは「読む」「理解する」という当然な行為と思われていることが、人にとって「食べる」「排泄する」といった行動と同様の自然な営みなどと同じではなく、制度化された不自由さを自由と取り違える

ことでかろうじて成立する怪しげな虚構であり、読むことによって意味を取った、または理解したという確信が、実は「夢」もしくは「錯覚」であるかもしれないことを、常に喚起するよう仕組まれた文章とでもいうべきか。

たった今、上で書いたような、あの人の文章を真似た亜流の文章が、先に述べた「熱烈な信奉者」たちによって盛んに書かれる。文学や哲学や思想や映画に関心を抱く若者たちの間で、そんなささやかなブームが起こった時期もあった。

自分も、あの人の文章に酔いしれた。あれほど心地よい体験をしたのは生まれて初めてだったから、とことん酔った。

なぜこんな話を書いているのかというと、あの文章とその思想（※実際には、思想などというものはいっさい書かれていないのだが）に影響を受け、あの文章の書き手に親衛隊のようにつきまったり、またはその人から直接「指導」を受けた人たちが、今度は自分たちが「指導」する立場になったとき、2日前にこのブログの記事で書いた「表象文化論」という言葉で、とあるアカデミックな場を取り仕切るようになったことを祝福しているからだ。

よくぞ、やってくれたと思う。

人間は、言語（※話し言葉と書き言葉）、文字、身ぶり、表情、貨幣、記号、絵、視覚的イメージ、音声、音楽、触覚的言語（※点字）、手話、指点字——といった、多種多様な手段を用いて、自己の表現欲、他者とつながりたいという願望、快くなりたいという欲求、破壊したいという衝動、ものを得たいという欲望、支配欲、隷属欲などを手なずける方法を知り、覚え、体系化し、洗練させていった。

その大前提になるのが、

Aではないものによって、Aを「手にする」、

あるいは、

「Aであり同時にBでありCであり.....∞であるもの」の代わりに「aであり同時にbでありcであり.....∞であるもの」を「用いる」

という芸当だ。そして、その芸当の道具が、

「表象」

である。

いかにも、いかがわしい話ではないか。「表象」を「嘘」「ペテン」「欺瞞」とも、「錯覚」「誤認」「迷妄」とも、「発明」「芸術」「文明」とも、「覚醒」「悟り」「啓示」とも、「知」「美」「愛」とも、「神」「悪魔」とも、「情報」「遺産」「進歩」「墮落」とも、言い換えることができよう。

*

ここまでのところを読み返してみて、説明不足で独りよがりなことを書いているな、と反省しました。辛抱強く読んでくれた方々に、お礼を申し上げます。ただ、一部の方には、ぴんとくる個所もあったかもしれません。

自分が一時期に強い影響を受けていた、ある一連の文章に書かれた言葉たちの官能的な動きを思い出し、きょうは上のような記事を書きました。

書くことは疲れます。

強がりはやめて、やっぱり猫撫で声でネコを呼んで機嫌をとり、しばらく遊んでもらうことにします。

08.12.25 遠い所、遠い国

◆遠い所、遠い国

2008-12-25 10:10:42 | Weblog

きのうの記事に書いた「あの人」の文章について、ずっと考えていていました。頭から離れないのです。そのせいか、きょうの「消えてしまいたい指数」は不明です。

ひょっとして、0（ゼロ）？

まさか。0にしては元気がない。やるせないです。でも、「消えてしまいたい」というネガティブな気持ちがポジティブに（※つまり、強烈に）身を裂くのではなく、「消えてしまってもかまわない」という脱力感がネガティブに（※つまり、どうでもいいという感じで）体を包んでいます。

きょうはお薬を飲んでいるわけではないのですが、なんだか頭の中に霧が立ちこめたように、ぼんやりしています。考え続けていたために疲れたのかもしれませんが。きのうから、ずっと考えていたことの整理のために記事を書きます。

*

固有名詞には「仕掛け＝仕組み」があるという意味のことを、きのう書きましたよね。そういう考え方を教えてくれたのも、「あえて、その名は挙げない」あの人の文章でした。ジャンルでいうなら「文芸批評」に分類される文章の中で、夏目漱石の書いた小説群中、最も「自伝的」と言われているある作品に出てくる「遠い所」「遠い国」についての記述が、あの人のある文章の中にあり、それを読んで大きな衝撃を受けたことを覚えています。

残念ながら、「あの人の」その文章を含む本はもう手元にないため確かめることはできませんが、記憶によれば次のようなことが書かれていました。

漱石のその作品を漱石の「自伝」として読めば、当然「遠い所」とはロンドン、「遠い国」とは当時の大英帝国と読むのが「正解」でしょう。では、なぜ漱石は固有名詞を挙げずに、あえて「遠い所」「遠い国」と書いたのだろうか？

重要なのは、その「遠い」にこだわること。「ロンドン」「大英帝国」などという、書かれてもいない言葉を読んでしまうことの安易さを怠慢と恥じて、書かれている言葉そのものにとことん寄り添うこと。「表象」、つまりAをAでないものによって置き換える仕組みのひとつである言語から成る作品である、漱石の文章につづられた言葉たちを、別のものに置き換えそうになる瞬間を、かろうじて回避しながら読むこと。

「遠い」という言葉が読む者に対して促す魂の運動に、自分という存在を徹底的にゆだねること。それは何か深いもの、あるいは奥に隠されたものにたどり着くことではありません。ひたすら平坦な紙の表面を粘液の跡を残しながら舐めるようにして這う、ある種の生物の動きと同様に進み移動することは、「目的」や「目標」といった知的で意識的な行動ではなく、本能的かつ愚直で生理的な行為であるはずで。

それが「文学作品」を「読む」という作業なのではないでしょうか（※情報を得るために新聞や雑誌などの「実用文」を「読む」ことについては、いつか別の機会に触れたいと思います）。もし、「作品」に書かれた「言葉たち」を、作者の伝記的事実や、伝えた思想といった「別のもの」に置き換える作業を文学研究、あるいは批評というのなら、それは極めて官僚的で事務的な作業ではないでしょうか。

「そうも言えるね。で、何が悪い？」と居直らないまでも、無意識のうちにそうした作業を「読むこと」または「批評」だと考えていた、文学を対象とするアカデミックな場に身を置いていた人たちにとって、「遠い所」「遠い国」をあくまでも「遠い」にこだわりつつ読むというスタンスは、当時は十分に衝撃的であり得たのでした。

*

ところで、固有名詞は、名詞の中でも、それが指し示す対象を限定する作用が強い言葉です。たとえば、

「血液型 B 型、身長 180 センチ、1973 年 10 月 22 日生まれで、かの 9.11 事件の前日である 2001 年 9 月 10 日に、対アナハイム・エンジェルス戦で 5 打席ノーヒットの成績だった外野手」

と書かれた一節の代わりに、

「血液型 B 型、身長 180 センチ、1973 年 10 月 22 日生まれで、かの 9.11 事件の前日である 2001 年 9 月 10 日に、対アナハイム・エンジェルス戦で 5 打席ノーヒットの成績だったイチロー」

と書かれた一節を読んだとたんに、「イチロー」の前に並べられた言葉たちが、すーっと消えて、自分の抱いている「イチロー」に関するイメージの数々の断片が脳裏にぱっと立ち現れませんか？

固有名詞は、それと一緒に並べられた言葉たちの運動を「見えなくする」、つまり「読めなくする」ほど強い光を放つ名詞なのです。固有名詞の「仕掛け＝仕組み」というのは、そういう意味です。

*

以上のようなことを、きのうからずっと考えていたのでした。

あえて、その名を挙げなかった「あの人」が蓮實重彦という名の人だと、ここで白状します。「蓮實重彦」または「蓮実重彦」をキーワードにしてグーグルで検索するなり、ウィキペディアなりで調べ、その経歴や評価といった周辺の情報・知識を得たうえで、きのうの記事を再びお読みになれば、その固有名詞の放つ光のために、きのうは読めていた言葉たちの運動がすっかり影をひそめてしまうことでしょう。

逆に、そうした知識を得て読むことで書かれていたことの意味がよく分かったと、お感じになる方もいらっしゃるかと思います。でも、あえて言わせていただくなら、それは意味にたどり着いたのではなく、書かれていた言葉たちを読みそこない、別のもの（※イメージと言ってもいいでしょう）を夢想なさったのではないのでしょうか。確かに、それを「読解」、「理解」、「解釈」という誇らしげな言葉に置き換えることもできますが――。

ただ、きのう書いた文章は、「言葉（＝表象）」を読むことによって「文学作品」（※実際には「実用文」にも当てはまります）の「意味（＝意味されるもの）」にはたどり着けないことを、「言葉」の「身ぶり」によって感じ取っていただければ、と願いつつ書きつづったものでした。ですから、ひたすらその言葉たちの身ぶりに身をまかせていただくだけでよかったのです。

せっかくきょうは「あの人」の名を挙げるという種明かしをしてしまいましたので、蓮實重彦氏のできれば初期の著作を、図書館かウェブ上の古書店などで探して読んでいただけたら幸いです（※今の自分には図書館に行くだけの電車賃も、古書店で本を買い求めるだけの経済的余裕ありませんけど）。

*

繰り返しになりますが、固有名詞には強い力があります。もっとも、名詞を固有名詞、普通名詞、抽象名詞などと分けたところで、それもまた官僚的な作業でしかありません。

そこで、さらに話を進めて、名詞一般（※言葉を名詞、動詞、形容詞などと品詞に分類することも官僚的な作業であることを重々承知しつつ）に備わっている仕掛けについても性懲りもなく、また日を改めてこのブログに書いてみたいと思っております。

疲れました。なにか、いつもとは違う心の気配も感じます。消えてしまいたい、というのではなく、遠い所、遠い国に行きたいような心持ち。

ぼんやりしていた頭の中の霧が、よりいっそう濃くなったような気がします。「消えてしまいたい指数」は、依然として不明です。「ゼロ」どころではなく、ひょっとして「危うい」のかもしれない。

錯覚でなければ、さきほどからネコがドアを外からガリガリと引っ掻く音がしています。このへんで失礼いたします。

08.12.26 横たわる漱石

◆横たわる漱石

2008-12-26 09:18:54 | Weblog

何かを読んでいるとその文章に同化しやすいという癖が、以前からありました。一度何かについて考えると頭の切り換えがなかなかできず、そのことに染まってしまう傾向もあります。頭の中だけでなく体にも変調をきたすという形で、さまざまな兆候が表れてきます。きのうから続いている違和感の原因は、あの人（※その名は、きのうの記事で打ち明けました）の書いた文章についてずっと考えていることにあるのかもしれませんが。

きょうも「消えてしまいたい指数」は不明です。

昨晚から「横たわる漱石」というフレーズについて考え続けています。一昨日からこのブログで触れている、「あの人」の書いた文章の中にあった言葉です。というわけで、平日なのに朝から寝転がっているのはそのせいなのですなどと、ここで書けば、「ふざけんな」とお叱りを受けることでしょう。

でも、横たわることは心休まるし心地よい。今の自分のように風邪をひいて熱っぽい時などは、無理をせずに寝るに限ります。眠らなくてもいいから、ただ身を横たえて全身の力を抜き、時間の流れに身をまかせ、周りの出来事の推移を見守り耳を傾ける。

漱石の小説では、主人公または主要人物がやたら横たわります。横たわって初めて出来事や事件が起こり、物語が進行するのです。そして、その物語を伝達する役割をになった人物（※あるいは動物）が登場します。

このことに気づかされたのは、一昨日からこのブログに書いている「あの人」の文章を大学時代に読んだ時でした。そう気づかされた瞬間、それまでの自分がいかに鈍感だったか、少なくとも読むという行為を実践するにあたり、いかに愚鈍だったかを知り恥じ入ったものでした。

漱石が病弱だったという伝記的事実など、この際忘れましょう。今話題にしているのは、漱石の言葉なのですから。

漱石の言葉に身をゆだねましょう。

幸い、漱石の作品だけは文庫本でちょうど12冊持っています。残っているというほうが、正確かもしれません。本はだいぶ処分しましたので。消えようと決心するたびに、捨てたり売ったりしました。人生はそんなことの繰り返しでした。それにもかかわらず、12冊も残っているのだから自分でも感心します。漱石の本だけは、処分する気にならなかったのかもしれません。

心を病んでいる、あるいはそこまで行かなくても、精神的にダウンしている時に漱石を読む人が多い。漱石の作品は精神的な不調を訴える人たちと親和性がある。そんな言い方で、漱石の精神的な病理という、もっともらしい「伝説＝神話」と漱石の作品とを結びつけようとする向きがあります。精神的な病理とは、文芸批評家を始め、アカデミックな場で「研究」を行っている文学者や心理学者や精神医学者が好んでテーマにしそうな、官僚的かつ事務的であると同時に週刊誌的な言説ではないでしょうか。

それは作品を「読む」、または「批評する」とは、ほど遠い作業だと思います。漱石の作品、そのものに目を向けましょう。

さきに述べたことの繰り返しになりますが、漱石の書いた言葉たちは、「横たわる」となして物語を進行させることができなかつたと言うべきでしょう。「寝る」、あるいは「横たわる」という動作を、言葉の運動として作品の中で「出来事」として書きつづる行

為が、意識的、無意識といった退屈な区別を超えて、作家漱石にとって決定的な重要性を持っていたことは間違いないと思われます。

*

宮部みゆきという作家の本も、好きで処分せずに持っています。今、このブログの記事をお読みになっている方のパソコンの近くに、宮部さんの小説があっても不思議ではない、売れっ子の作家ですね。

宮部みゆきの小説の中では、実によく雨が降ります。水浸し、川の氾濫、暴風雨、台風――といった形で、頻繁に雨や水が出てきます。火や炎も、よく登場しますね。

どうでしょう？ 宮部さんの作品をもう一度読み返して、その雨にびっしょり濡れてみませんか？ いつもよりゆっくりと読みながら、ストーリーだけでなく書かれている言葉に身をゆだねながら読みましょう。結末を知りたいと急ぐことなく、かといって「文章を味わう」などという、国語の授業で教師が指示する欺瞞（ぎまん）を思い出すことなく。

そうですねえ、雨、水、液体（※もちろん血液も含まれます）、火、炎、そして少年と闇（※あるいは薄暗い所）が出てきたら、うんと読む速度を落としてください。

スティーヴン・キングの作品でも、いいです。やはり、雨、水、液体、火、炎、そして少年と闇がキーワードです。そう、そう、キングの作品でも、「横たわる」または「眠る」という言葉の身ぶりが、ストーリー・テリングを始動し、促す重要な触媒になっているものがあります。

さらに言うなら、キングの場合には、子ども、それも特に男の子に性的な虐待をする人間が重要な役割を果たしています。作家スティーヴン・キングの、興味深い「書く時の癖」です。

ところで、ネコはいいなあ。のんびり寝てばかりいる。漱石の小説によく出てくる猫たちを思い出します。「眠る」と「猫」――両者には深い関係がありますね。しょっちゅ

う横たわっている。いや、これは傲慢（ごうまん）な人間の無知と偏見でしょう。反省します。

ちなみに、うちの猫の名前は「ネコ」です。猫にしては水を怖がらないので、気をつけています。

08.12.27 信じてはいけない言葉

◆信じてはいけない言葉

2008-12-27 09:36:48 | Weblog

このブログを開設してから、1週間が経ちました。あっという間の出来事だったような気がします。毎日欠かさず書いているところなど、やはり、うつになりやすい気質が感じられて、ちょっとやばいなど自戒しています。

頑張らない。

きょうの「消えてしまいたい指数」は30前後です。

この数日間、書かれた言葉に身をゆだねながら読むことについて書いていますが、この場合の言葉とは、あくまでも文学作品に書かれた言葉を対象にして論じていました。

浮世離れた、このブログの記事にうんざりなさった方もいらっしゃるのではないかと反省しています。

*

きょうは、実用的な文章、つまり小説や詩歌ではなく、たとえば新聞の報道記事、会社や役所の業務連絡や報告書、人（※自然人や法人）の間で取り交わされる契約書・約款、知り合いとやりとりする手紙・電子メールといった、何らかの目的があったり、メッセージを伝達するために書かれ、そして読まれる言葉たちについて書いてみたいと思います。

とはいえ、実用的な文章はあまりにも多岐にわたるため、詳細に検討することは無理なので、一つ言いたいことだけに的を絞って書いてみます。

言葉は辞書を裏切る――

言い換えるなら、

言葉を信じてはいけない――

と言いたいのです。

そのために、きょうの記事を書いています。日常生活において、ついつい言葉を信じて裏切られ後悔するという繰り返しを経験している、自分を含めての人間の情けなさを思うと、自分に言い聞かせる意味でも、「信じてはいけない言葉」の危険性を訴える必要を強く感じます。

例を挙げましょう。差しつかえのないところで、政党名を並べてみます。自由民主党、公明党、民主党、日本共産党、社会民主党、国民新党、改革クラブ、新党大地、沖縄社会大衆党、新党日本……。今挙げた言葉たちの、辞書的な意味を考えてみてください。「自由」「民主」「公明」……。という具合にです。そして、国会議員たちの言動を思い浮かべてみてください。その言動や所属する政党のありようは、ことごとく辞書的な定義を裏切っていませんか？

極端な例を挙げます。〇〇民主主義人民共和国――。どこが、「民主主義」「人民」「共和」「国」なのでしょう？

言葉を信じてはいけないことを理解するためには、宗教団体の名前も、参考になります。オウム真理教はともかく、途方もないお金をかけた立派な施設と、脱会など容易にできない強い組織力を持つ宗教法人の名称をいくつか思い浮かべてください。その名称に使われている文字や言葉の意味を辞書で調べてみるだけで構いません。名は体を表しているのでしょうか？

そうした組織によって、メディア用に使用されているキャッチフレーズをチェックしてみるのも一案です。自分が何らかの宗教組織（※「宗教」ではありません、あくまでもその「組織」です）に関係しているのであれば、非信者向けのパンフレットに書かれた言葉たちについてもチェックしてみてください（※教義は、ここでは問題にしません、あくまでも勧誘のためのキャッチフレーズ＝宣伝文句です）。

ある国家の国民、ある政党の支持者、ある宗教団体の信者にとっては、その組織の名は体を表しているように思われるかもしれません。もちろん、不満分子、反体制派、非主流派もいるでしょう。しかし、建前として、あるいは信念として、組織の名（※さらに、その組織が説く理念）は体を表していると主張する人が多いでしょう。

どうしてでしょう。なぜなら、純粹に信じている場合を除けば、その組織と経済的に結びついている、洗脳されている、マインドコントロールされているからです。あるいは、組織を離れたらアイデンティティを失う、信条・愛国心・信仰以外の面で大きく依存している、または離脱すれば危害を加えられる恐れがあるといった、せっぱ詰まった事情があるからです。

上で述べた宗教は、心にかかわる微妙な話題です。お気を悪くされた方がいらっしゃいましたら、お詫び申し上げます。

*

話を変えます。

自分の嫌いな人や敵対する人に向かって、「こんにちは。きょうも、いい天気ですね」と作り笑いをしながら挨拶をする。これって、大切なことですよ。心と裏腹な挨拶や友好的な言葉のやりとりなくして、共存や平和はあり得ませませんもの。

言葉には文字通りの意味を伝える以外に、人間関係の円滑化をうながしたり、争いを回避する道具として用いるという極めて重要な役割がある。これは、誰もが毎日の生活の中で経験し実践している、生きる上での知恵というべきものです。

要するに、言葉は文字通りでは用いられない、言葉は人を裏切るということが、実用文の最大の特徴だということです。

憲法を始めとする法律や、契約書でも、事態は変わりません。なにしろ、やっては困ること、やってはいけないこと、こうでなければならないこと、こうしろという命令、こうであってほしいことが、ぎっしりと書かれているのです。でも、そのほとんどが建前です。

文書に記されていることと正反対の言動や状況が常態化していなければ、あえてそうした実用文が書かれる必要はありません。「……するな」は「……って、みんなが陰でよくやっているよね」と読めます。極論を言えば、「……する方法もあるけど」という具合に、「やってはいけない」行為について事実上知恵を付けている場合が案外多いのではないのでしょうか。

また、客観的でなければならない報道記事が、簡潔さを要請されるために、いかに粗雑でミスリーディングな記述とならざるを得ないか。たとえば、容疑者は「女、あるいは男」、被害者は「女性、あるいは男性」などという、ギャグとも思える滑稽な紋切り型の言葉を用いなければならない現実があります。「男は男性の右腕をバールのようなもので打った形跡があり」といった調子です。

男？ 男性？ バールのようなもの？ 形跡がある？

*

次のような例もあります。プレゼンテーションに関するビジネス書を必死で読んで準備を整え、顧客や上司を相手に熱弁をふるう。それも、「大切なのは話す内容ではなく、いかにして話すかだ」とか、「言葉として伝わるメッセージは、たったの10パーセントだけ」と頭の中で念仏のように唱えながら。

さらにまた、社命で行かされたセミナーで聞いた言葉、評判につられて買い求めた自己啓発書の一節、あるいはお金を払って契約したコーチやファシリテーターの言葉に従う。そうやって、自分を一瞬にして変えるおまじないや儀式を密かに実践して、へこみそうな自分を鞭打ち、必死でポジティブに生きようとする人たちがいます。

自分が変われば、世界は変わるんだ、うん——と自分に言い聞かせるのです。

疲れませんか？ 無理をなさっていませんか？

よく考えてみてください。自己啓発書は誰が書いていますか？ 以前は何かの職についていた人で、いつの間にか自己啓発書の書き手となり、売れっ子となった方ではないでしょうか。あの方たちは、もはや現役ではありません。書けば売れる本の作者として印税を手に入れ、その名声でテレビや講演会やトークショーで法外とも言えるお金をもらっているのです。

そんな人たちの言うことを真に受けてはなりません。あの人たちは、今では現場を離れて、言葉を量産しているだけです。あの人たちの紡ぎ出す言葉の数々は、自己啓発書というジャンルでこれまで流通してきた言葉の焼き直しです。オリジナリティも、新しさもありません。あるのは、変奏や変装ばかりです。

あの人たちに憧れるのなら、あの人たちの言うことを信じてはなりません。あの人たちのやっていることを観察し、真似てみてください。端的に言えば、自己啓発書の書き手になる努力をすればいいのです。

*

いずれにせよ。世の中には信じてはいけない言葉があるみたいです。それは、一人ひとりにとって異なるものだと思います。たとえば、この記事の冒頭に書いた、

頑張らない。

この言葉も信じるべき人と、絶対に信じてはいけない人がいることも確かです。

ここまで読んでいただいた方に、つつしんで申し上げます。

やばくなる前に、いや失礼しました、危うくなる前に、ちょっと考えてみてください。

あなたには、ひょっとして信じてはいけない言葉があるのではないですか？ 信じているはずの言葉を見聞きしているとき、「本当はそうじゃない」というつぶやきが心の底から聞こえてきませんか？ 自分は、この言葉に縛られ、つらい目に遭っているのではないか。そんな思いを無理に抑えてはいませんか？

生意気なことを書いてしまいました。ごめんなさい。

ところで、この部屋の窓から外をじっと見つめているネコは、何を信じて生きているのでしょうか？ 言葉ではないことは確かなようです。

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

◆そして、話はお金に行き着く

2008-12-28 09:49:11 | Weblog

朝から悲しくてたまりません。なぜだか分からないので、よけい悲しいです。「消えてしまいたい指数」は70くらいです。

新聞の一面の見出し（※まだ、中身を読む気にはなれません）をちらりと見ましたが、世の中が大変なことになっています。やるせなさが募ります。

きのうは「実用的な文章に書かれた言葉」の特性について書きました。言葉がその辞書的な意味を裏切るとは、数ある言葉の性質のうちの一つにすぎませんが、きょうもその特性をテーマに、もう少し掘り下げてみたいと思います。

なぜ、言葉は文字通りに使われないのか？ どうして、これほど誤解が起きるのか？ 言葉が思いを伝えてくれないのは、どういうわけか？ なんで、人は嘘をつくのか？ 約束や規則が守られない理由は何か？

原因は、二つに分けられるような気がします。

(1) 人間の意志による（※つまり、わざとやっている人間が悪い）

(2) 「言語＝言語活動」のメカニズムによる（※つまり、言葉自体に欠陥がある）

相変わらず、大雑把で、ずさんな論理展開をしていますが、学者ではない素人の駄文として大目に見てください。

*

まず、(1)の説明からします。

人が意図的に、辞書的な（※あるいは、最大公約数的に社会で了解されている）意味

を曲げて、言葉を使う。これが、いわゆる嘘、詐欺、欺瞞（ぎまん）であり、また宣伝やプロパガンダで用いられる常套（じょうとう）手段です。例を挙げるなら、

「愛してる」「E日までには絶対に返すから」「Oは地球を救う」「癒やしと快適さをお約束します」「任せてください。私たちは、やります。実行します！」が、(1)に該当します。

次に、(2)の説明をします。

以前の記事でも書きましたように、言語は「表象」の一つです。「表象を用いる」とは、「Aの代わりに、Aではないものを、あたかもAのごとくに用いる」ことですから、人が意識して、または意図しなくても、「ずれ」や「ノイズ」を必然的にはらんでいます。言葉を用いて人が伝えようとか、表そうとしているものを、以下に挙げてみます。

・本当は何だかわけの分からない「自分の気持ち・感情・考え」――

・さまざまな動機（※これも、実際にははっきりしない場合が多い）があって発せられる「他人に伝えたいメッセージ」――

・ある事や物（※見えている・聞こえている・知っているはずなのに、現実にはなかなか言い表せない）についての「保存すべき記録として、または他人に伝える目的を持った描写・説明・表現・報告」――

こうしたA（※上で見たように、そもそもこのA自体がいい加減なものなのです）を、Aではない「言葉」（※これもまた、くせものです）を用いて、「表現」（※これも、かなり不確かで怪しい行為です）、あるいは「伝達」（※電線や無線で信号を伝えるのとは話がまるで違う、いかがわしくて信用できない行為を指す言葉です）する、

というわけですから、

太古にヒトが獲得してしまったという言語（＝言語活動）のメカニズムが、いかにもいい

加減なものか、容易に想像できると思います。

たとえば言うなら、言語活動とはバグとエラーだらけで、なおかつノイズの混じりやすい「欠陥ソフト」なのです。絶えず監視し修正するのが当然なのに、その気配は一向に感じられません。これをヒトの責任にするというのは、ちょっと酷かなという気がします。ヒトは被害者、あるいは犠牲者という見方もできるからです。

*

突然ですが、

そして、話はお金に行き着くのです。

「ふざけんな」とお叱りを受けそうですが、本気です。正気です、とは申しませんが、本気です。

言葉が人を裏切る、または言葉が文字通りに使われないのは、上で挙げた(1)と(2)の理由に加えて、人がお金にとらわれている(※呪縛されている、とも言えるでしょう)、お金と無縁ではいられない、お金が欲しい、お金が必要だからなのです。言い換えると、

欲しい or もっと欲しい or ~したい or ~であったらいい

といった気持ち(=欲求)が、おそらく(1)や(2)よりも深く根源的な要因として存在するために、人は言葉がうまく使えないのです。人の欲求は、人の意思や、言語の欠陥とその使用上の不注意よりも、人の言動を大きく左右する、とも言えるでしょう。

生まれたばかりのヒトの赤ちゃんは、「おぎゃ〜」と泣きますよね。あれって、言語ですか？ 言葉ですか？ というより、「言葉」になる前の、「欲求」の「叫び」ではないのでしょうか？ 「カネをくれ〜」と同様の「せっぱ詰まった叫び」に聞こえてならないのですが――。

言語という、こざかしげな表情をまとった「仕組み」に比べて、「お金＝貨幣」はなんと素っ気なく無防備な、欲望丸出しのつらがまえをしているのでしょう。

言葉以前の、ぐちゃぐちゃ、どろどろした、欲求、叫び、唸り、うめき、

ここまで書いてきて、急にへこみました。自分の頭の中だけでなく、体までぐちゃぐちゃになりそうです。

「消えてしまいたい指数」が70ほどの時に、こういうややこしいことは書くものではありませんね。

*

言いたいのは、「お金＝貨幣」もまた、言葉と同様に、人とは切り離せないほど根源的な重要性をもつ「表象」だということなのです。ひょっとすると、貨幣（※価値や欲求の代理）は言語（※森羅万象の代理）よりも、人間存在において重要な位置を占める表象なのかもしれない。昨今の新聞の見出しを見るたびに、そうした思いを強くしています。事態は深刻です。

不景気――。大恐慌の兆しもみられます。

食えない、腹が減った――。このままでは飢え死にする。よし、持っているやつらから奪い取ってやる。そんなふうな、ぎりぎりまで追い込まれて、せっぱ詰まった思いをいっている人たちが、グローバルな規模で増えつつあるように感じられてなりません。

というわけで、「お金＝貨幣」について、あす、このブログに書かせていただきたいと思います。約束いたします（※誰に頼まれてもいないのに……）。

「約束？ 言葉は人を裏切る、なんて書いているやつの言うことが信じられるか」

と言われれば、返す言葉はありません。

へこみ方が激しいので、至急、ネコを探してきて慰めてもらいます。

「イイ気ナモンダ。うつ、サマサマダナ」という声が聞こえてきました。

<処方していただいた、頓服のお薬を飲んでもよろしいでしょうか？>

「勝手ニシナ」

<は、はい。>

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

◆匿名性の恐ろしさ

2008-12-29 10:53:22 | Weblog

けさは新聞を読みました。「新聞を読むに気になれない」という、うつの症状を判定するさいの項目がありますが、確かにふさいだ気分ときには新聞に目を通すのさえ、つらい状態に陥るものです。

きょうは、表象としての「お金＝貨幣」について書くつもりでいたので、いつもより早起きして久しぶりに新聞を、特に経済関連の記事にざっと目を通しました。

大変なことになっている！

ポキャブラリーが貧困なので、こんな言葉しか吐けませんが、事態の深刻さに嘔然としました。経緯をつかむために、過去1週間分の新聞を取り出してきて、読みふけりました。久しぶりの経験です。

今の「消えてしまいたい指数」は30前後です。きのうに比べれば、かなり楽です。朝、顔を洗う時の水の冷たさを心地よく感じました。

きのうは、表象としての「お金＝貨幣＝通貨」について書こうとしたところで、へこんで挫折してしまいました。そもそも、素人にとっては荷が重過ぎるテーマです。「貨幣＝通貨」と言えば、そうそうたる学者、思想家、実務家などの名や、何とか学派、何とか主義、何とか学、何とか論——と数々のいかめしい言葉たちが頭に浮かびますが、このさいはどうでもいいです。

頑張らない。

しょせん素人の浅知恵です。参考文献からのきちんとした引用の手続き、揺るぎない実証、破綻（はたん）のない論理展開といったものは、他の方々の仕事です。こちらとしては、誤解、曲解、混乱、事実誤認を恐れず、思うままに書いてみます。

*

言葉や叫び・唸（うな）りになる前の混沌（こんとん）としたトリトメもない、ヒトの「欲求・意識・意志」とでも、とりあえず名付けるほかはないもの——について、きのうの記事で少し触れました。始原的で、ヒトの行動の根本と深くかかわっている、そのモヤモヤ（※今後は、この言葉を使います）は、言語よりも貨幣という形で、ヒトをとらえます。とらえるだけでなく、ヒトをがんじがらめに呪縛し、行動と思考を規制し、その行く手をも大きく左右するほどの途方もない力を発揮する。

そんなふうには、思えてならないのです。で、けさ、久しぶりに新聞に目を通すと、そ

の思いは確信に近いものにまでなりました。

*

言葉は、ヒトにおいて、意味という夾雑物（きょうざつぶつ）やノイズを必然的にまとい、内包しています。単語の意味を図式化した、ある英和辞典が数年前に出版され、一時話題になりました。

単語とその意味を、

定義（１）a……、b……、c…… 定義（２）a……、b……、c……、d……

という具合に、従来の形式でだらだらと、ぎっしり並べるのではなく、定義（１）、定義（２）、定義（３）……が、ごちゃごちゃ、ぐちゃぐちゃ、モヤモヤと、からまり、重なりあう模様が、割とすっきりとした形で、図として示されている点が画期的な英和辞典でした。

名前は覚えていませんが、何とか言語学という比較的新しい考え方に基づいた成果だということでした。

一つの単語がどんなにモヤモヤしているかを知らせるという点では、スリリングでした。とはいうものの、モヤモヤの図式の仕方が不十分でしたが（※もっとも本気でモヤモヤを図式化したら、辞書は完成しないし、完成したとしても売れません）、その英和辞典の不十分ぶりは十分に「健康的」で「官僚的」なものである、つまり良識的で安全なものでした。

何を言いたいのかと申し上げますと、言葉のモヤモヤに真っ向から取り組むという無茶で自滅的な試みに走らず、誰にでも分かりやすい形で単語の意味が「図式化＝見える化」されていた、という意味です。

当然でしょう。本気でモヤモヤに取り組めば、一つ間違うと自分自身がモヤモヤになっ

てしまいます。精神的に「あやうく」なる恐れがあるという意味です。

*

さて、本題に入ります。

上で述べたように、言語がモヤモヤを基盤としていることは確かなようです。きょう、問題にしたいのはお金＝貨幣です。これは、言語に比べると、非常にすっきりしていません。夾雑物やノイズは皆無とっていいほど、涼しげな「つらがまえ」をしています。「言語対意味」という、とらえかたを真似るなら、「貨幣対価値」という感じです。さて、

「価値」って何でしょう？

これは極めて大きな問題なので、誤作動も多く低度の情報処理能力しか備わっていない脳味噌を持つ、このブログを書いている者としては、この辺でつまらぬゴタクを並べるのは止めて、さっさと猫を呼んで遊んでもらってあげたい。そう思われます。

でも、凝りもせず、パソコンにかじりついているのは、こうしたことがやたら気になって仕方がないからで、まあ、これもまた心の病の症候の一つなのでしょう。大目に見てくださいれば幸いです。

*

マネー・ローンダリングという言葉がありますね。日本語では、資金洗浄とか資金洗浄とか訳していますが、要するに「汚れた」お金をせっせと「洗う」ことです。手垢の付いた言葉という手垢の付いた言葉があり、また、さきほどみたように言葉はかなり薄汚いものであるだけでなく、モヤモヤぐちゃぐちゃした構造を備えているのですが、お金も相当「汚れる」みたいですね。

残念ながら、マネー・ローンダリングに関しては、どうやら「犯罪組織」のほうに分(ぶ)があるようで、監視当局は相当手を焼いているのが実情だと言われていますね。

ひょっとすると、お金についての「汚れ」など案外簡単に落とせるのかもしれませんが。

で、情報処理能力の低い脳味噌としては、

「価値」とは何か、

は一向に分からないものの、「お金＝貨幣」と聞くと、端正な顔立ちをしたイケメン、または美人を連想してしまうわけです。要するに、貨幣の「価値」は、言語の「意味」と違って、

きれいだ（＝濁りや汚れがない、清潔、きれい）、

ということです。

のっぺらぼう、

という言い方もできそうです。これといった特徴がなく、つかみどころがなく、すべすべして、どこか間の抜けたところがある、というイメージです。そうだ、いい言葉を思い出しました。

匿名性

を帯びているのです。

「ネット社会に潜む匿名性の恐怖」などと、紙や放送から離れようにも離れられない、嫉妬半分（※いや、嫉妬 100 パーセントかな？）のマスメディアが、おどろおどろしい言葉を用いて「一般大衆＝庶民」（※人を馬鹿にした嫌な言葉ですが、メディアは自分以外の人たちを馬鹿にすることで成り立っています）を「おどしてやろう」（※「啓蒙」ともいいますね）と企み、操作しようとするときに用いる便利な言葉である、例の「匿名性」です。しかし、

匿名性の恐ろしさについてうんぬんするなら、何を置いても、お金でしょうが、

と思います。

*

「お金＝貨幣＝通貨」という「表象」を根底から支えている「価値」という、のっぺらぼう（＝匿名性）を、素人なりに簡略化して説明してみます。金融工学とやらを駆使して一瞬に「得た」（※本当に「得た」のでしょうか？）とてつもない金額と、たとえば知的な障害を持つ人たちが作業所でごくわずかな時給で得た月収の額を並べてみます。

A円対B円。

圧倒的な差があります。しかし、その2つの金額をそれぞれAとBで割ると、

1円

になってしまいます。

これが「価値」の恐ろしさ、「匿名性」の恐ろしさではないでしょうか？

つまり、「価値」は、「数字」（※これもまた、「言語」と同様に「表象」です）という形で処理されます。「価値」は、「加・減・乗・除」ができます。1円はあくまでも1円です。誰が稼ごうと、誰が持とうと、誰が使おうと、1円は1円です。

実にシンプルで明快。1円玉、あるいは1万円札には、所有者の名前も記載されていないし、自分の手から離れたとたん、誰のものでもなくなってしまう。そして、またそれを手にした誰かのものとなる。

変幻自在、神出鬼没、顔のない（※いや、無数の顔を持つ）魔物、形のない（※いや、何にでも姿を変える）妖怪――。この恐ろしい仕組みを本気で恐れましょう。

革命が起こるわけです。恐慌が起きるわけです。戦争が勃発するわけです。国が傾くわけです。コロンブスがアジアを目指して女王から借金をして西へと向かうわけです。

*

ところで、自分が会社勤めをした経験が通算して1年半に満たないことを、最近知りました。「年金特別便」などという、誤解を招きかねない、ふざけた名前の文書が送られてきた時に知ったのです。恥ずかしながら、自分は、実務、特にビジネスに疎く、経済・金融・経営といった領域を理解するのに不可欠な、カネとモノとサービスとの関係についての知識がかなり乏しいのです。

そんなわけで、お金を含む数字がらみの話になると、つい「面倒だなあ」と避けてしまうところがあります。でも、自分の「年金」のことなので、一応目を通してみました。で、「年金特別便」を読み、上で述べたように会社勤めの短さだけをかろうじて知ったという次第です。

フリーランスで、ある仕事に携わっていたころ、どうしてもビジネス関連の分野について勉強しなければならない時期があり、その手の本をたくさん読みましたが、やはり雲をつかむような感じで手ごたえはありませんでした。

お金＝貨幣＝通貨について気にはなるのですが、やはり知識不足と頭の回転の遅さがボトルネックになっています。とはいえ、やっぱり問題はお金です。世の中が、とんでもないことになっている。

とりわけ、「経済」のひとり歩きがはなはだしくなり、ひとり歩きの権化だと思いこんでいた言語活動の比ではないほどに、グローバルな規模で「経済」が狂ったサル（※失礼、ヒト）に甚大な危害を及ぼしつつある。

そんなとんでもない事態に、現在ヒトが陥っているらしい、と遅まきながら実感し始めたのです。

おそらく、この「とんでもない事態」は、ヒトが「お金」という仕組みを獲得してしまった、ずっと昔から続いている。それが、現在かつてないほど大きな規模で起こっているために、この世界を動かしていると思われる人たち——企業家、実業家、政治家、金融関係の仕事に携わっている人、富裕層など——が慌てふためいている。

つまり、庶民にとっては、相も変わらず続いている日常的な「とんでもない事態」が、今ではお金持ちや権力者にまで波及している。そうなると、庶民の生活はさらに苦しくなる。そんな感じなのではないでしょうか。

怖いですね。悔しいですね。でも、事実なので直視しないわけにはいきません。

貨幣と価値については、いつか再び、性懲りもなく、じっくり考えてみたいと思っています。一番苦手とする、経済や金融といった専門分野を勉強するパワーなど、今はまったくありませんので、せいぜい新聞をせっせと読みます。そして、ネットでニッケイのサイトでも覗いてみます。

うちの場合、親の年金が唯一の収入源で、このブログを書いているアホはうつで無職ですから、2カ月ごとに銀行口座に振り込まれる年金を2カ月間で全額使いきり、多くもない預金を取り崩していくという、お先真っ暗な生活を送っています。いつか、新聞をとるのも止めなければならないでしょう。ネット回線も、切らなければならないでしょう。

大変だ。

やっぱり、他人事（ひとごと）ではありません。

ネコは室内猫ではないので、好きな時に外に出ます。えさをやっても、満ち足りた顔をして、一向に食べない日があるのは、きっとどこかで食べているからです。

複数の人が「飼っている」と思い込んでいる猫がよくいるみたいですが、ネコ（※前にも書きましたが、うちの猫の名はネコです）もそうに違いありません。たまに首輪が変わっているのが証拠です。

たくましいなあ、にこらしいなあ、うらやましいなあ、でも、かわいいなあ、だきしめたいなあ、かまってもらいたいなあ、たまには、ひっかいてもらいたいなあ——と一匹の「狂ったサル」は、そうしたモヤモヤをかかえながら、きょうも、ぶつぶつ、つぶやくしかない、というわけです。

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

◆再び「消えてしまいたい指数」について

2008-12-30 10:06:40 | Weblog

このブログでは、画面の左側に「メールを送る」という機能があります【注：この記事が掲載されていた goo ブログを指します】。それを利用すれば、自分のメールアドレスを記入してもしなくても、メールが送れます。きのう、ある方から丁寧な文面のメールをいただきました。「海のない県」にお住まいだという S さん、ありがとうございました。

その中で、このブログの冒頭に毎日書いてある「消えてしまいたい指数」に触れて、「あなたは躁うつではないでしょうか」とご指摘をいただきました。日々の文章の調子から、そんな気がする、おっしゃるのです。

毎日拙文をお読みいただいているとのことで、とてもうれしかったのですが、そのご指摘は意外でした。S さんにお礼の返信をしたあと、気になって「消えてしまいたい指数」について、あれこれと考えてみました。

うーん、確かに、そう受けとられても不思議はない。毎日「数値」が上がったり下がったりしているのだから。言葉は、いや数字はひとり歩きするというのは本当だ。というよりも、単に自分の表現の仕方がまずいだけか——などと反省しました。

「躁うつ」かどうかについては、ドクターにいつか尋ねてみる手もありますが、これ以上、自分の疾患についてのモヤモヤを増やしたくないので、迷っております。ただ、「指数」という統計上の言葉を用いたのは、あくまでも「比喩」だということを、この場を借りてSさんにお伝えしたいと思います。差し上げた返信では説明不足でした。お詫び申し上げます。

*

で、思ったのですが、「消えてしまいたい指数」というのは、平均株価の推移を示す折れ線グラフに似ています。似たようなものとして、たとえば内閣支持率の変化を表したグラフでは、縦軸のどん底、つまり横軸に接する部分はたいてい0ですが、株価の動きを示すグラフでは、どん底が、ある一定の数値になっています。「消えてしまいたい指数」は平均株価のグラフに近いものです。

さきほど書きましたように、「消えてしまいたい指数」は比喩です。多分に感覚的かつ相対的でアバウトなものですから、たとえ0であったとしても、恒常的な抑うつ状態に悩んでいない人と比較すれば、極度に気が滅入り、無力感を覚え、落ちこんでいることに変わりはないのです。

氷山の一角をグラフにしたもの、という言い方もできるかと思います。やたら、比喩を使って申し訳ありません。これって癖なんです。たとえを使ったりして言葉をこねまわすのが、好きなのです。というより、筋道を立てて理路整然とした説明ができないので、感覚的な（＝テキトーでアバウトな）比喩に逃げているとも言えます。

で、「氷山の一角」という言葉を使わせてもらいますが、「消えてしまいたい指数」は氷山のとっぺんあたりを、切りとったもので、海に隠れて見えない部分には、ふかーい、いやーな、うつうつとした巨大な黒いかたまりが、どかっと存在している。

ちょっと待てよ。そうなると、「消えてしまいたい指数」は抑うつ状態がひどいほど数値が低いという設定にしなければ、理屈に合わない。ということは、「逆ピラミッド」という比喻を使うのが妥当なのかもしれない。うかつでした。やっぱり比喻に頼ると、ろくなことはないですね。というか、頭、悪いですね。考え方が粗雑です。

ま、いいか。このまま、いきます。アバウトに「頑張らない」でいきます。「消えてしまいたい指数」とは、「不快指数」みたいなものです。

そんな感じのもので、**「躁うつ」**という指摘は意外でした。Sさん、ご理解いただけましたでしょうか？

メンタルヘルスに関心のある方や、何らかの精神疾患でお悩みの方には、そうした感じがお分かりになるのではないかと思います。どうでしょうか？ いずれにせよ、体感的には、きょうの「消えてしまいたい指数」は20前後です。

「消えてしまいたい指数」（※「不快指数」の類推で考えてください）が、仮に100だとすれば、あるいは100を上回るとすれば、きっとブログの記事を書くどころか、パソコンを起動する気力もないでしょう。確かに、そんな時期がありました。思い出したくもありませんけど。

でも、きょうは「消えてしまいたい」について書いてみたいので、ある程度の距離をおいて、思い出してみます。心理的な距離を置かずに、マジでもろに思い出してしまえば、その時の気分に戻るわけで、この記事は書けなくなりますから、もしそうなりそうになったら、中断します――。では、書き始めます。

うつと闘うというか、共生・共存するためには、ただ今書いたような「心の整理」というプロセスを踏んでおく必要があるかと思えます。

*

さて、本題。

「消えてしまいたい」とは「死んでしまいたい」の婉曲（えんきよく）な言い換えである、とも取れます。しかし、やはり「死ぬ」と「消える」とではニュアンスのうえで大きな違いがあります。「消えてしまいたい」というのは「死んでしまいたい」よりは、むしろ「無に帰したい」に近い気がします。

自分の場合、「死ぬ」という言葉を使うと「死後の世界」という連想から、「あの世に行く」、つまり「この世」を去り「どこか」へ行くことをイメージしてしまいます。その「どこか」で天使たちと遊ぶなり、悪魔とか、閻魔（えんま）様とその手下たちとかにいじめられまくるなり、あるいは、ご先祖様を含む亡き人たちと一緒にいる、という感じがしないでもありません。

その考え方に立てば、「死ぬ」とはポジティブな言葉です。それに対し、自分のイメージでは、「消える」とは「無」、つまり意識も記憶も「なにもない」状態になることです。まして「生まれ変わる」ことなど想定外の、ネガティブな「この世」からの「消滅」（※「移行」ではありません）をイメージしています。

百歩、いや千歩譲って、「転生」ないし「輪廻」の存在を肯定したとします。よく「生まれ変わったら、何々な人間になりたい」とか「誰々みたいになりたい」と言う人がいますが、厚かましいと思います。人間になることを前提にしている点が、実に厚かましい。ゴキブリに生まれ変わって、ヒトに踏み潰されるかもしれない、という発想がまるでないからです。

同じ、生きとし生けるものなのに。

で、ブドウ球菌か、ゾウリムシか、イリオモテヤマネコかなにかに、もし生まれ変われたら——という発想ですが、自分にはありません。「無に帰す」だけです。「帰する」という言葉を使うのには、深いわけがあります。きょうは、書けません。

いつか、神仏について考えていることを、このブログに書いてみたいと思っています。

ところで、英語には、

A cat has nine lives. (猫には9つの命がある)

という、ことわざがありますね。ナインライヴズってやつです。猫をかぶる、じゃなくて、猫を買いかぶっていませんか？ それとも、化け物扱いしてるのかなあ？

いずれにせよ、うちのネコには命は一つしかないと信じています。だから、大切にしています。

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

◆その点、ナンシー関は偉かった

2008-12-31 09:37:56 | Weblog

相変わらず、なぜか、せつないです。でも、新聞、読んでいます。テレビのニュース、見えています。世の中に関心を向けようとしています。ただし、頑張りすぎないように、気をつけて。

きょうの「消えてしまいたい指数」は90前後です。きついです。つらいです。かなり。体調も、よくありません。

哲学、好きです。言語、貨幣、表象.....気になります。すごく、気になります。自分の頭で考えてみたいです。固有名詞の羅列、嫌いです。引用、嫌いです。

誰々が、こう言っていた。何々に、こう書いてある。どうだ！

そういうの、自分は、苦手です。自分の頭で、そして体で、考えてみたいです。

「言の葉（※コトノハ）」、って言葉が、好きです。「断片的」って言葉、好きです。ふと、耳にした言葉、目にした言葉、思い出した言葉、ひらひらと空から降ってきた木の葉。そんなかけらを拾いあげ、手のひらにのせて、ながめる。考える。

いいなあ、と思います。

*

勉強、嫌いです。研究、嫌いです。議論、苦手です。喧嘩、弱いです。派閥、駄目です。権威、嫌いです。友達、いません。ゴマ、すれません。

自分は、素人です。でも、考えること、好きです。言語、気になります。なぜか、こだわり続けています。

言葉。言の葉。すぐに汚れてしまう葉っぱ。汚（よご）れた一枚の葉っぱの表面を指先でさすり、汚れをはらい、陽にかざす。目を細め、葉脈のこまかな線を目でたどる。その「葉＝言葉」について考える。飽きることが、ありません。

いいなあ、と思います。

でも、きょうは、できそうもないです。

頭、重いです。肩凝りが、半端じゃありません。やるせないです。

元気をあげる、と言う人。お金と引き換えに、元気の出し方を教える、と言う人。自分には、要りません。まだ、お薬のほうが、いいです。

スピリチュアル。前世。来世。罪。罰（※ばつ or ばち）。占い。宿命。苦手です。少なくとも、自分には、要りません。

輪廻とかいう回し車は、ノー・サンキュー。ケージの中の、ハムスターみたい。もしも車輪に乗って回っているのなら、どうか、おろしてください。回る、回される、どちらも嫌です。

体が、冷たくなる。次は、どこかへの、お引越し。来世。天国。地獄。これも、ノー・サンキュー。上へも、下へも、行きたくはありません。階段、エスカレーター、エレベーター、要りません。たぶん、そういうものも、そういうことって、ないです。たぶん。

自分の頭で考えてみたいです。哲学、したいです。批評、したいです。どうして、したいのか。なぜか、せつないのと同じで、理由は分かりません。ただ、哲学、したいです。消える寸前まで、批評、してみたいです。批判でも、評論でもなく、考える対象を持ち続けたい。それが、自分にとっての、批評という行為、哲学という行為。自分にとっては、大切な営み。

徒党を組む。仲間をつくる。師に仕える。苦手です。批評の対象と野合する。政治家みたいに野合する。嫌いです。

その点、ナンシー関は偉かった。

そう、思います。心から、思います。

一人のテレビ視聴者として、テレビを見て批評する姿勢を貫いた。テレビに出て、仲間をつくって、ヨイショしあう。そんなこと、しなかった。あの人の潔（いさぎよ）いスタンスが、好きだった。聡明な人だ、とも思った。あの人は、自分の頭で考えていた。

テレビに、出なかった。出られなかった。ヘビー・ウエイト。過食。過労。その意味では、ネガティブ。でも、自分が批評する対象との距離をわきまえている人だった。

ああいう人、今はあまり、いません。いるのかもしれないけど、知りません。最近、本とか、雑誌、読んでいません。買うお金、ありません。

あの人は、破裂した。そう、思います。燃え尽きた、のではない。枯れた、のでもない。破滅した、のでもない。破裂した。バーン・アウトでなくて、バースト。そして、無に帰した。

*

唐突ですが、

飯島愛――。

ももとは苦手な人だった。本を出して、大当たり。それから、あの人は、変わった。

テレビに出なくてもいいほどお金持ちになっても、悲しそうなところに、惹かれた。お金持ちになったら、よけいに悲しくなったみたいで、好きでした。その意味では、ネガティブ。

あの人は、消えた。たぶん、静かに。ひっそりと。フェイド・アウト。そして、無に帰した。

孤独死。

孤立死。

惨めだとは思わない。ぜんぜん、思わない。うらやましいって、ここでは、本当は書いてはいけない。逝くときくらい、ひとりにしてくれ、も本当は書いてはいけない。この

記事を読んで、気を悪くした人、ごめんなさい。落ちこんだ人、ごめんなさい。今は、このブログに書くことが、消える歯止めになっているのです。本当に、ごめんなさい。

部屋、寒いです。ネコは、どこかに出かけています。この後で、ちゃんと、お薬、飲みます。

ここまで、読んでくださった方、ありがとうございます。よい、お年を。

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

◆私家版『存在と無』一序文一

2009-01-01 09:20:07 | Weblog

これまでに、ずいぶんたくさんの本を買いました。図書館からも借りました。でも、本を読むのは好きではありません。購入、借り出し、積ん読、未読、返却、売却、廃棄、焼却。その繰り返しでした。今は、買うお金がありません。図書館へ行く気力もありません。

哲学は好きですが、哲学書は好きではありません。特に、体系化された論文。緻密な論理を積み重ねていく文章。駄目です。息が詰まります。頭がついていきません。脳の情報処理能力が低いからでしょう。でも、考えることは好きです。しょっちゅう考えています。

断章。断片。アフォリズム。そうした構成の文章が好きです。どこからでも読める。どのページでも、前後を気にしないで読める。辞書みたいに読める。そういう、作りの本があります。スリリングです。立ちどまって休み、考え、また同じページに戻る。疲れるけど愉（たの）しいです。

体系化された、緻密な論理を重ねて組み立てられた文章でも、あちこち拾い読みしながら、読むことができます。素人は、それでもいいと思います。

*

『存在と無』

かっこいいタイトルだなあ。中学三年生の時にそう思いました。哲学したい。そう考えるきっかけになった本のひとつです。高校生になってから買いました。大部で難解。拾い読みしました。積ん読しました。

いつ処分したかは覚えていません。今はないことは確かです。

本の題名を眺めながら、いろいろ考えることが好きです。中身に興味がないわけではありませんが、もともと本を読むことは苦手です。

題名を知っているだけで、自分にとっては十分。そんな本がたくさんあります。『存在と無』も、そのひとつです。わくわくするタイトルです。いろいろなイメージ、言葉が頭に浮かび、收拾がつかなくなります。それなのに、たのしい。うれしい。楽しい。

存在と無

上の文字をよーく見てください。少なくとも、10秒は見つめてください。時計の秒針を見ながら、10秒たつのを「待つ」と分かりますが、10秒って意外と「長い」ですよ。

さて、このブログで数日前に書いた「遠い所、遠い国」(2008-12-25)というタイトルの記事の中で、固有名詞の放つ光について触れました。前後の言葉たちの影を薄くし、時には読めなくしてしまうほどの、まばゆさが固有名詞にはある。注意を要する。そんなことを書きました。

『存在と無』

恐縮ですが、すぐ上の文字を、また 10 秒間ほど見つめてください。

さっきの、存在と無、との違いを感じませんか？『存在と無』と、かぎ括弧でくくったとたんに単なる名詞が本のタイトルとして固有名詞に変化する。そして、その固有名詞は強い光を放ちます。その差異を感じ取っていただきたいと思います。

存在と無、と、『存在と無』との差異。それは、両者の「存在」から生じたと言えると同時に、両者の「無」から生じたとも言える。その両義性について考えてみたいのです。

*

今後このブログで、＜私家版『————』＞というタイトルのもとに、時々文章を書きたいと思っています。「————」の部分には、既にかかれて存在する書籍のタイトルが入りますが、それとは無関係だとお断りしておきます。なにしろ読んだこともない本。過去に、買った、あるいは借りたが、全然読まずに終わったか、拾い読みはしたけれど、その内容の断片すら記憶にない本。名前しか知らない本。そうした本の名前が、＜私家版『————』＞、という形で、ブログタイトルとして記載されるのです。

ふざけた話だと嘲笑される、あるいは、お叱りの言葉を頂戴するのは覚悟しております。パロディにすら、なりそこねた駄文。しゃれにもならない。そうお思いになるのも無理はありません。でも、本気です。本気で書くつもりです。

かつて、哲学や文芸批評関連の書籍や雑誌の記事に、＜『————』の余白に＞というタイトルが、やたら使われた時期がありました。＜私家版『存在と無』＞よりも＜『存在と無』の余白に＞のほうがかっこいいなあ、と思いましたが、＜『————』の余白に＞は、あくまでも『————』を読んでいることを前提とした響きがあるので、気が引けます。あきらめました。

これから先、このブログでときおり書こうと予定している、＜私家版『————』＞の

『————』という固有名詞を、アマゾンなりグーグルで検索すれば、その作者名、出版社名、発行年月日が、そして翻訳書の場合には、原著者名、訳者名などのデータも入手できるでしょう。紹介文やレビューを読むこともできるでしょう。

繰り返し申し上げますが、＜私家版『————』＞は、そうしたデータとは一切関係がありません。単にタイトルに同じ言葉が用いられているだけです。

「本書はフィクションであり、登場する人物や場所などは、同名の実在する人物や場所とは一切関係がありません」

という意味の記述と、状況はほぼ同じです。

*

『————』という言葉の放つ強い光のまばゆさを前提とし、あえてそのかぎ括弧を外してみる。そして、その言葉の持つ、本来の辞書的な定義やステレオタイプ化したメッセージ、その言葉が連想させるもろもろのイメージやニュアンス、その言葉にまどわりついた手垢や汚れを、すべて肯定する。

また、かぎ括弧を外された、————という言葉を目にした人たちがそれぞれ受け取り想起するであろう、多種多様なイメージの「からみ合い」も積極的に肯定する。そうした「からみ合い」が存在することを積極的に認めたいうえで、＜私家版『————』＞の書き手はその「からみ合い」を構成する言葉たちに促され、その言葉たちと向き合ったさいに今度は自分が抱くことになる「からみ合い」と戯れながら文章をつづる。

*

以上が、＜私家版『————』＞の初めての試みとなる、＜私家版『存在と無』＞の「序文」です。序文というからには、本文が書かれる予定です。本文は、たぶんこのブログ開設以来書いてきた、一連の雑文のバリエーション＝焼き直し＝二番煎じになるでしょう。

『———』に入れたい言葉たちが、次々に頭に浮かびます。

善悪の彼岸、言語にとって美とは何か、野生の思考、鏡・空間・イメージ、権力への意志、「わからない」という方法、動機の文法、男が女になる病気、アレゴリーとシンボル、負け犬の遠吠え、思考と行動における言語、ああでもなくこうでもなく、部分と全体、起きていることはすべて正しい、名付けえぬもの、象は鼻が長い、存在の大いなる連鎖、「あいまい」の知、ビジュアル・アナロジー、翻訳とはなにか、文字の美・文字の力、モノからモノが生まれる……。

きのうの記事でも書きましたが、哲学したい、批評したい、自分の頭と体で考えたい。そんなスタンスで言葉を紡ぎたいと思っています。引用、固有名詞の羅列、研究、検証、実証、お勉強、は嫌いです。なのに、なぜ、羅列をしたのか？

上に羅列した言葉たちは、自分が初めて耳にし目にしたときには、書名という名の固有名詞でした。それは確かです。でも、もともと『』などついていなかった言葉たちです。『』は、お約束事、つまり制度、しがらみ、ルール、掟です。さきほどの、存在と無、と、『存在と無』の差異を思い出しましょう。そして、固有名詞から、『』を外し、匿名化された言葉の環境へと解き放つ。

すると、例の固有名詞特有のまばゆい輝きの代わりに、どこに光源があるのか定かではない部屋に置かれた物体のように、目を凝らせば凝らすほど、何であるかが認識できない、初めて目にするものとしか言いようのないものとして現前します（※今の文、ややこしくて、ごめんなさい。簡単に言えば、固有名詞が普通の名詞、つまり、ただの言葉に見えるということです）。その何やら懐かしい、それでいて心騒ぐ薄明の中で、そこにある言葉たちが、必死になって別の言葉たちを求め、おびき寄せようとする。

上に羅列した言葉たちは、思考を刺激し、考えることを促してくれる触媒なのだ、あっさり言うこともできるでしょう。とりあえず、その言い方でお茶を濁すのも、ひとつの方法でしょう。どうせ言い尽くすことなど、到底できないのですから。

ただ、その言葉たちのまとう表情と身ぶり運動に、自分の頭と体を任せてみたい。母親の胎内から出て、まだ見えぬ目で初めて「世界」と向き合ったという、始原あるいは誕生という名の「物語（＝フィクション）」を想定しながら。

あえて言うなら、その言葉たちの生い立ちや起源は、このさい、どうでもいい。そう、どうでもいいのです。

とはいうものの、「作者」という根強い「神話」と、「著作権・知的財産権」という名の、「制度＝ルール＝掟」があります。作者、著作権。これなしに、ヒトの世界は成り立たないのですから。

*

「現実」（※「真実」ではありません）は強い。

きょうは、新しい試みとして、これまでとは少し趣向を変えて書いてみました。この行まで、我慢強くお付き合いくださった方、本当にありがとうございました。

ちなみに、きょうの「消えてしまいたい指数」は40くらいです。きのうに比べれば、数段楽です。きのうは、本当につらかった。あんな暗いことを書いて、ごめんなさい。

*

元旦。

テレビを見ても、新聞を読んでも、何か例年と違った感じがするのは、自分だけでしょうか？「貨幣」というヒトの生み出した「病」が、グローバルな規模でかなり深刻化している。例年と違った感じがするのは、事態が重篤（じゅうとく）になっているからかもしれない。そう思うのは、自分だけでしょうか？

昨晚戻ってきたネコの首輪が、また新しいものに付け替えられていました。目の覚めるような鮮やかな濃いピンクで、よく似合っています。ネコが、よその家ではなく、この家で元旦を迎えてくれていることがうれしいです。おめでたいです。それ以外におめ

でたいことは、今のところ見当たりません。

09.01.02 論理の鬼

◆論理の鬼

2009-01-02 10:34:07 | Weblog

哲学したーい

と、このブログで言い続けています。でも、哲学って何でしょう。陳腐な言い方をすれば、100人いれば、100通りの哲学についての定義、あるいはイメージがあるでしょう。「哲学」という言葉を見聞きしたことはあるが、自分は使ったこともないし、その言葉について考えたこともないという人のほうが圧倒的に多いかもしれません。

分からないから、考える。結局は分からないだろうという覚悟をもって、考える。

それが、自分にとっての哲学です。簡単に言えば、そういうことです。確かドイツ語に「哲学する」という動詞があります。「考える」という動詞以外に、です。ちょっと、うらやましく思います。

そもそも「哲学」という言葉は、ヨーロッパの言語から翻訳したものです。ヨーロッパでの語の原意は「智を愛すること」。英語では philosophy。英和辞典をよく見ると、普段は目にすることのないところ、つまり語源の説明欄にちゃんと書いてあります。

哲学という言葉で、自分が連想する言葉たちを以下に並べてみます。固有名詞は除きます。

考える、論理、明晰、分析、演繹、帰納、弁証法、構築、脱構築、実証、認識、存在、実在、実存、現象、経験、理性、探求、言語.....。

とりわけ「論理」という言葉は、魅力的です。哲学を勉強したいと初めて思った中学生のころ、「哲学」と「論理」とは自分の中では、ほとんど同義語でした。それが今では、「論理」と呼ばれるものはかなり懐疑的になっています。

*

事情があり（※当ブログの「狂ったサル」2008-12-23 という記事に書きました）、大学では哲学ではなく文学を専攻しました。自分と同じ学科に「哲学の鬼」を自称し自任する学生がいました。その人は、その人なり of のちゃんとした理由があって、哲学科ではない学科に在籍していました。受験勉強はせずに、付属の高校からエスカレーター式に進学した人たちのひとりでした。そのせいか、大学内の情報にかなり通じていました。

「うちの大学の哲学科では、僕のやりたいことができないが、この学科には自分に近い考えの教員がいるし、僕が敬愛してやまない非常勤講師が講座を持っている」と言うのです。

とにかく、理路整然とした印象を与える話し方をする人でした。じっくり言葉を選びながら話すタイプではなく、かなりの早口。考えを言葉にするのが、じれったくてたまらない。そんなせっかちで迫力のある話し方をしながらも、仮にその言葉をそのまま聞き書きすれば、「てにをは」の使い方も正しく、話の筋道もちゃんと整った文章になるのではないか。そう思わせる話術を身に付けた人でした。外国語の授業でも、驚くほどよくできました。

同じ学科にいた自分は、授業前の教員が来るまでの間などに、教室にいる他の学生を相手にして、その人が熱っぽく語るのをよく耳にしていました。

世界は明快に説明できる。そのためには、言葉は明晰でなければならない。残念ながら、日本語は明晰さに欠ける。近いうちに、パリに留学しようと思っている。せめて学部学生のうちは日本にしようと考えていたが、ここでやっていることを思うと、歯がゆ

くてたまらない。もう待てそうもない。

というようなことを、しきりに言っていました。入学した年の夏休みが終わり、授業が再開したころには大学をやめていて、以後姿を見ることはありませんでした。

その人はいなくなりましたが、その人の吐いた言葉の断片と、その人から受けたイメージだけが、自分の中に残りました。強い個性を感じさせる人でしたから、余韻も長く続きました。今も、かすかに残っています。

*

で、「論理」に話を戻します。

僕は論理を信じている。僕は論理の鬼だ――。

その人は、何度か、そう言っていました。それを聞くたびに、論理とは情熱なのではないか、と自分は思いました。ショックでした。論理という言葉に、「沈黙思考」に代表される、冷徹で静的なイメージ（※今思うと、なんて通俗的なイメージだろうと恥ずかしくなります）を抱いていた自分にとっては、衝撃的でした。

あれほど、情熱的に論理を語る人がいるんだ。哲学っていうものは、案外、「熱い」ものなのかもしれない。

そういえば、論理学という、そのままズバリの名称を持つ学問分野があります。詳細は、その手の文献なり、サイトで調べることができます。自分の苦手な分野です。文系理系という手垢の付いた分類をするなら、すごく理系っぽい思考の手続きを必要とする分野みたいです。ほとんど数学とっていい手法で取り組むサブカテゴリーもあります。

*

いずれにせよ、哲学や論理学だけでなく、数学や自然科学でもいいですが、そうした学問を学ぼうとか、研究しようとする人には、しばしば強い情熱（※感情的、情動的といったほうが正確かもしれません）を持った人がいる。

経営学部や商学部に籍を置き、アメフト部やラグビー部なんかに所属していて、卒業後はバリバリの熱血サラリーマンになるのだろうな、と思わせるような絵に描いたような通俗的イメージを発散している「熱い」学生を、今でもときおり見かけますが、そんな人たちより、ずっと「熱っぽい」姿勢で取り組む「論理の鬼」たちがいる。そのことに注目したいというのが、きょうの記事の目的です。

コンピューターは、以前には電子計算機と呼ばれていました。つまり、機械です。最先端のもの、そして未来のものは、違った素材が主体になるそうですが、現在の主流のコンピューターは金属や鉱物が素材です。機械やコンピューターというと、「冷たい」イメージを連想しがちですが、実際に機械やコンピューターを扱っている人にとって、最も大きな悩みは熱をどう下げるかだと言われています。

機械は作動する、つまり動きます。動くからには熱を発生します。熱は機械そのものの素材を変形あるいは変化させます。すると誤作動が起きます。だから、

熱を下げるのが課題になる。

そういうことらしいです。コンピューターもそうですが、医療用のカメラやメスは、どんどん小型化されてきています。機械や器材は動くのが仕事です。動くためには、熱を発生しなければならない。しかし、熱くなると動きに狂いが生じる。

コンピューターに話を絞りましょう。コンピューターは、1か0かの二進法で情報を処理する。1か0かという仕組みを実現するためには、どんなにあがいても、何らかの移動、変化、反応という形態をとらざるをえない。分子、原子、電子、というナノの世界であっても、

熱から逃れることはできない。

数学者も、汗をかく。禅僧も、汗をかく。囲碁の名人も、汗をかく。コンピューターも、あっちっち。ナノテクも、それなりに、あっちっち。話が大きく、いや、小さくなりすぎたようです。話を戻しましょう。考えること、哲学することに。

脳でも、事態は同じみたいです。ヒトは生きている限り、熱を発する。食物を摂取し排泄をする存在である以上、必然です。沈黙思考、冷徹な思考などとは、大嘘だったのです。せいぜいよく言って、紋切り型のイメージだったのです。

*

が一ん——。

論理の鬼の熱っぽさにショックを受けた、学生時代の自分は、哲学を勉強することで、自分のなかにあるモヤモヤしたもの、ぐちゃぐちゃした収集のつかないもの、言い換えるなら、

分からない

という、「苦悩」とは言わないまでも、自分に巣くう「存在の居心地の悪さ」に何らかの解決策、あるいは対症療法があると信じていたのです。そして、それは、禅寺や修道院みたいに、浮世離れた、象牙の塔とも呼ばれる、取り澄ました環境の中で、冷静沈着に行われるはずだったのです。そのような環境にいれば、

「何か」

にたどり着くことができる。

モヤモヤやぐちゃぐちゃ

が解消される。ところが、哲学も論理も、そんな「救い」や「悟り」を与えてくれるものでは全然ない。ということが、どうやら真相だと分かってきた。

困った。

実に困りました。とはいうものの、ずるずると文学科に身を置きながら、自分なりに哲学し続けていました。そのうちに、哲学すること、つまり、考えることが言語とは切っても切れない関係にあることを、ある人の書く、または話す言葉たちによって知ったのです（※当ブログのバックナンバー「あえて、その名は挙げない」2008-12-24、「遠い所、遠い国」2008-12-25 という記事に書きました）。

固有名詞である名前など、どうでもいいのですが、話を進めるためにあえて言うなら、蓮實重彦という名を持つ人に感化された自分は、にっちもさっちもいかない事態に自らを陥らせた狂ったサル（＝ヒト）の一匹として生きていく「宿命」の「物語」を受け入れたのでした。

全面降伏

です。それに追い討ちをかけるように、「表象」というやっかいなものと同じく「宿命」という新たな「物語」を押し売りされ（※実際には、売り物でもないものを勝手にねだったのでしょ）、

買っちゃいました。

つまり、かぶれ、洗脳され、染まり、ぞっこんほれ込んでしまったのです。

こうなると、もはや、

出口なし

です。せいぜい、言葉の運動に身を任せ、言葉の身ぶりを模倣し、言葉の動きを積極的に肯定しようと居直り、そのあげくには、ああでもないこうでもないという、ネガティブな世界で右往左往する日常を反復するしか生きる道は見当たらない。そんな生き方を選んでしまったのです。そうして、今に至っています。

*

で、今、どんなふうを考えているかですが、以下のように言えます。

「表象」という人間存在の究極の素（もと）を、「言葉」（※これこそ代表的な「表象」であり、とりあえず使い勝手の良さを錯覚させてくれる道具です）と戯れながら、哲学する（※批評するとも言えます）、あるいは考えることならできそうだ。

抑うつ状態に苦しみながらも、「消えてしまいたい」願望に逆らいながら、哲学し考えることを支えとして何とか生きていけるだろう。ネガティブな生き方だけど、これならできる。そんな感じで生きています。

ネガティブとポジティブは反意語などではありません。両者の関係は、むしろ、ある物とその鏡像（※比喩です）、双子同士（※比喩です）、貨幣と偽金の関係（※比喩です）——という、比喩の果てしない連鎖の「運動」に似ています。

プリズムのように、万華鏡のように、さまざまな光と形の乱舞を繰りひろげる「運動」です。プリズムは、勝手にきらきら輝くではありません。見る者が、動くからきらめくのです。さきほどのコンピューターの話の思い出してください。

「運動」（※つまり、移動、変化、反応）は、常に熱を発せざるを得ない。

冷たいようで、実は熱い。死んだようで、実は生きている。「仮死の祭典」（※固有名詞を出すのは気が進まないのですが、『批評あるいは仮死の祭典』をグーグルなどで検索してみてください、このブログでは手に負えませんので）というやつです。

ちなみに、ひとさまからはネガティブに思われがちな、うつも実は熱いのです。

*

この行まで、お付き合いくださった方に、つつしんでお礼を申し上げます。

きょうの「消えてしまいたい指数」は、50 前後です。

ネコ、元気です。

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

◆うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

2009-01-03 09:59:17 | Weblog

このブログを開設して、16 日目になってしまいました。半月が過ぎたというわけです。「消えてしまいたい」願望と共生しながら、律儀に毎日書いているということは、このブログが「励み」や「癒やし」（※ひねくれた自分には、使いにくい、ちょっと嫌な言葉なのですけど）になっているようです。

ただ、その律儀さがくせ者で、こういう傾向が、うつになりやすい気質を物語っているとも言えるわけで、気をつけるに越したことはないと言わざるを得ず、自戒・自重をしております。

で、きょうの「消えてしまいたい指数」は、今のところ 50 前後です。

さて、当ブログは「にほんブログ村」にも住民票がありまして、そのうちの「メンタルヘルス」、およびそのサブカテゴリーである「うつ病（鬱病）」というところをうろろしております。時には、自分と同じ村道を歩いている方のブログを拝読し、うーんと唸ったり、はあーとため息をついています。

うつと闘っている人、共生・共存をはかろうとしている人、笑い飛ばすことで厄払い（※悪魔祓い？）をしようとしている人、真剣に救いを求めて何かにすがろうとしている人——いろいろな人たちがいることを知りました。

根っから友達・親友の類がない自分としては、別に人恋しくはないので、強いて仲間を作る気はないのですが、自分と同じくうつに悩んでいらっしゃる方々に、提案というか「こんな気晴らしの方法がありますよ」という感じで、お話したいことがあります。

*

うつとあ・そ・ぼ

遊んでみませんか。中には相当苦しんでいる方がいらっしゃることは承知のうえです（※お気を悪くなさった方、ごめんなさい）。うつと遊ぶというか、戯れることは、自分にとっては哲学することの一環なのです。冗談ではありません。本気です。ですので、よろしかったら、このままお読みになってくだされば幸いです。

*

ちょっと話を変えさせてください。唐突に思われるかもしれませんが、去年流行ったという、「アラフォー」を例にとって、言語の意味の構造について考えていることを書いてみます。

アラフォー（around forty）やアラサー（around thirty）の around という英単語で、その意味の構造をみてみましょう。

a + round = a(t) (「どこどこで」の「で」です) + round (「丸、円、球」です)

つまり、「まああるところで、うろちょろ」って感じですよ。構造なんて、こんなもんです。

で、

1) まあるく円を描いて、「まわりに、ぐるりと、四方に、周囲を、くるくると、囲んで……」というイメージ。

↓ ↑

2) まあるく円を描きそこなって、「うろちょろ、あちこちに、ぶらぶらしている、居る、存在する、現役だ、活動中……」というイメージ。

↓ ↑

このあたりから、アバウト = about と重なります。実にアバウトで節操などありやしない。酔っ払いの千鳥足状態。

↓ ↑

で、酔った勢いで、近くにいた about にかからみます。a + bout = 昔は「外をぶらぶらとほっつきまわる、そのあたりでうろうろ」だった、そうです。

↓ ↑

1) まわりに、そのへんにいる、あたりに、近くに、居る、存在する、うろうろ、動き回

る、移動している、もう少しあっちまで、広まっている、ばい菌が流行している、めぐりめぐって、順番に。

↓ ↑

2) だいたい、アバウトに、ぼんやりと、約...、およそ、...ごろ、...くらい、...ほど、...前後、...をめぐって。

↓ ↑

3) ...をめぐり、...について、...に関して、...に基づき、...を根拠にして

↓ ↑

4) ...にくっついている、...に従事している、...につきっきりでいる、...に手が届く、...にちょっかいをだす、...が手に入る、...を利用できる

↓ ↑

5) ...のそばにいる、もう少しで...に触れる、...しようとしている、まさに...するところ

ということです。お疲れ様でした。

*

がらりと話を変えます。

空蟬と現人を、例にとりましょう。「うつせみ」と、ちょっと大きめの国語辞典で引いてみれば、この両方の言葉が出てきます。その意味も、ちゃんと調べてください。意味深ですね。身につまされます。せつないです。うつに近づいてきましたね。辻褄は合いますよね。さきほど、本気だと書いたことに、嘘はありませんでしたよね。

中には、空蟬と現人の関係について歴史的な説明が書かれている辞書もあるでしょう。「訛って」「転じて」「字を当てて」とか、書いてあります。面倒くさい、とお思いなら、そうした辞書の記述はパスしてください。

気になる方は、「空蟬」＋「現人」をキーワードにグーグルなどで検索してみるのもいいです。そのキーワードではヒットはしないかもしれませんが、「坂部恵」『仮面の解釈学』という固有名詞（※固有名詞は嫌いだと言いながら、つい使っちゃっていますが）で検索するのをお勧めします。特に後者の書名の本を入手しお読みなれば、かなり哲学できます。すごい本だった、という記憶があります。何しろちゃんと日本語で哲学しているのですから。

で、ふたつの「うつせみ」、つまり「空蟬」と「現人」ですが、要するに、

間違えてしまった

ずれてしまった

のです。

言い間違い、聞き間違い、取り違い、大いに結構、大歓迎。というのが、このブログでの言葉に対する基本的な態度です。

国語の乱れ？ いいじゃないですか。美しい日本語？ そんなもの、ありません。ら抜き？ 自分は使いませんがチャーミングですね。正しい言葉遣い？ 無理です。文化審議会国語分科会（※国語審議会の後釜です）？ そんな会に使うお金があったら、現在、職と住まいを失った人たちのために使いましょう。こじつけ・だじゃれ？ ひとりギャグで毎日やってます。オヤジギャグ？ 万歳って感じです。

良きにつけ悪きにつけ、間違いや、錯覚や、方言や、新しい言い方や、いわゆる「若者ことば」や、言葉遊びや、帰化人・移住者の影響、外国語の流入などが、言語を「豊か」(※本当は、好きじゃないです、この言葉)にしてきたことは、世界あちこちに散らばって棲息(せいそく)する「狂ったサル」(=ヒト)どもが共有する「歴史的現実」というべきでしょう。自分がちょっと苦手な人のキャッチフレーズであるイヤな言葉を引用すれば、「起きていることはすべて正しい」のです。

ヒトはうろうろせずにはいられない。まっすぐになんて歩けない(※人類というレベルのお話です)。アラ= around を地で行っています。その習性から逃れられない。ヒトの悪口を言っていたためか、何だかヒトの端くれである自分までうろうろしてきました。

*

本題に入りましょう。

うつとあ・そ・ぼ

遊んでみませんか。手元の電子辞書の広辞苑で「うつ」を引いてみます。うつ、うつ【鬱・鬱】、うつ【打つ・討つ・撃つ】、うつ【棄つ】、うつ【全】、うつ【空・虚】——うーん、しばし言葉を失います。今挙げた各項目の語義にまで目を通すと、そのあとは絶句が5分間くらい= around (= about) five minutes 続きました。

広辞苑では、そのあとがあるんです。

うつうつ、うつうつ【鬱鬱】、(中略)、うつお【空】……。

「空」は言の葉ながらも、魂にぐっとくる「深い」言葉です。

うつ、うつ……とうつ尽くしにして、ごめんなさい。ここで、へこまないようにしましょう。うつに悩む人たちにとって禁句である「頑張れ」、とは死んでも言いませんが（※書いてはいますけど）、これだけは言わせてください（※書かせてください）。

上で並べたのは、しょせん「言葉」です。存在、概念、観念、実体なんて、忘れましょうよ。「うつ、そのもの」は、脇に押しつけましょう。言葉なんて、口から出る音（※声ともいいますが）＝息＝一種のガス（※気体）です。体内から出てちょっと汚れているけど、空気です。もうひとつの大切な穴から出る「○」（※はひふ○ほ）と、ほぼ同じではありませんか。

うっ、へー

なんて、言っちゃって（※こうやって、ひとりオヤジギャグで自らを慰める毎日を送っております）――。というか、一緒に叫びましょうよ。

うっ、へー！

こんなふうに、うつという言葉（※あくまで言葉ですよ）を使って遊んでみましょう。もてあそびましょうよ。うつむいた顔を上げ、うっとうしいこの世のうさを晴らしましょう。少なくとも、そんなふうに、うつと共生する生き方もあるんです。

さらに言わせていただくなら、ジャック・デリダも、ジャック・ラカンも、それぞれ哲学者、精神病理学者として一部の人たちから崇め奉られながらも、ひたすら言葉と戯れていたじゃありませんか。あの人たちの本をちゃんと読んだわけでは全然ありませんが、あれって確かオヤジギャグ以外の何ものでもなかったですよ。

しかもフランス語で言葉の遊びをしているため、邦訳は、「概念」なり「意味」なりをくみとって日本語にするという、2人のジャックさんご両人が最も望まない倒錯に陥ってしまわざるを得ない。なのに、その邦訳を手には深刻さを装い、しかめっ面をして、デリダ様を、ラカン様をありがたく読むなんて、「デリダする」ことにも、「ラカンする」ことにも、ならないのではないのでしょうか。概念？ 害念、ですよ。意味？ 忌（いみ）（※この「忌（＝斎）」の意味は広辞苑あたりで調べてください）、ですよ。

デリダ、ラカン……。またもや、必要に迫られて、固有名詞を出してしまいましたが、権威など嫌いです（※この点については、当ブログの「その点、ナンシー関は偉かった」2008-12-31の記事で書きました）。固有名詞の放つ、まばゆい光を利用しようという魂胆（※「虎の威を借りる」とも言います）など、毛ほどもありません。

*

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

この記事を読んで、お気を悪くされた方、不快感を抱かれた方、ごめんなさい。心から、お詫び申し上げます。

きょうは調子に乗って書きすぎてしまったようで、自己嫌悪に陥りつつあります。へこみそうです。でも、くどいようですが、本気です。正気だとは言いませんが、軽い気持ちで書いた文ではありません。

ちなみに、「冗談」や「おふざけ」の反意語は、「本気」や「真剣」ではありません。言葉が、そんなに、「きちっとした＝整合性のある」ものではないことは、上で around と about を例にとって説明した通りです。

「うつ」という「言葉」を笑い飛ばしましょうよ。「うつ、そのもの」を笑い飛ばせない悔しさをかみしめながらも。

*

ネコがその辺にうろうろしていないので、寂しいです。どこをうろついているのでしょうか。自分も家のまわりをぶらぶらしながら、探してきます。人と視線を合わせるのが苦手なので、うつむきながら。

うつむき、訛って、うつに向き、訛って、うつを剥（む）き、するとネガがポジに転じ

る——そうだ、一皮ずつ、うつを剥いていきましょう。

空を見る けさの気分は うつとおし

第 2 部 09.01.04～09.01.19

第2部

ブログタイトル：ネガティブに生きる（2009年1月4日～2009年1月19日）

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

◆ haiku と俳句、ベースボールと野球

2009-01-04 10:23:48 | Weblog

自分の場合、苦しい時には、肩がぱんぱんに凝ります。今の「消えてしまいたい指数」は30ほどです。きのうの記事に書いたように、きょうもオヤジギャクで気を紛らわそうかと考えております。

うつで苦しんでいる多くの方々が俳句を作って心を癒やしていらっしゃる。「にほんブログ村」の「メンタルヘルス」のカテゴリー内にある、「うつ」というサブカテゴリーに登録されているブログを、あちこち訪問して知りました。よく分かるような気がします。もちろん、短歌の愛好者の方々もいらっしゃいますけど。

ところで、俳句は体言中心、短歌は用言中心、という説明の仕方があります。これも、分かるような気がします。俳句と短歌の違いを、自分なりに言うと、

*俳句は言葉を言葉として扱いつつも、言葉が言葉でない所まで行こうとする。言い換えると、俳句においては、言葉は物になる。

*短歌は言葉を扱いつつ、言葉の始原と言葉の行き先に重点を置く。言い換えると、短歌においては、言葉は概念を目指す。

となります。

*

概念は苦しい。とりわけ、心に病をかかえている者にとっては重すぎる。こうした個人的なイメージがあるため、短歌は苦手です。一方の俳句ですが、日本独自の俳句がグローバルな広がりを見せ、haikuとして、日本語以外の言語で作られていることは、よく知られています。英語で詠まれた haiku を専門にしているウェブサイトを、時々覗いてみるがありますが、なかなか壮観な眺めで、圧倒されます。活気があります。

俳句および haiku の約束事について考えてみましょう。

短い。

これは主観的であり、また相対的なものですから、さまざま長さ（＝長さ）がありますが、自由な形式で（※ haiku にも、ある程度の制約や型を設けているものあります）短く言葉をつづるというルールです。

こうした緩い約束事のもとに、おびただしい haiku に出会うことができます。ヨーロッパの言語では、定型詩に「韻を踏む」とか「音節数を合わせる」とか、厳格でややこしい規則があるため、短くて自由な haiku に惹かれる欧米の方々が多いのかもしれませんが。もちろん、欧米にも定型詩以外に自由詩もありますけど。また、年少者に対し積極的に haiku 作りを奨励している学校も、海外にたくさんあると聞きます。

季語。

自分は、この制約については、あきれ返って物も言えないので、ここでは触れません。季語、字余り、うっとうしいです。ゆるくアバウトに5・7・5だけで、十分です。少なくとも自分にとっては。

*

話は変わりますが、

かつての高見山（※ジェシーです）を先駆けとし、年月をへて小錦や曙が活躍したころに、相撲は sumo になりました。モンゴル出身者が番付の上位を占め、ロシアおよびその近辺の国々の出身者が目覚ましい活躍をみせている現在は、sumo どころか、c y m o になってしまいました（※ちなみに、モンゴル国では歴史的経緯からロシアの文字、つまりキリル文字が未だに広く使われていますね）。いやしくも「国技」が「国際化」すれば、数々の日本人にとって「ゆゆしき」問題が起こるのは、当然の帰結です。それが「国際性」（=国をまたぐ）というものでしょう。

やくさん、内館さん、委員を辞めないでください。それから、北〇海さん、お国のために、この際、ついでに理事もお辞めになってください。

さて、柔道は、もはや judo でしょう。judo をマネージする国際的組織で日本人が顔をきかせていた時代は、過去のものになりました。着衣の色や判定基準など、これもごたごたするのは当然の帰結です。こうして日本の島国根性と鎖国癖は、完膚なきまでにやりこめられていくほかないというわけです。それが「国際的」という言葉の「意味=実態」です。

山下さん、対ビゼール戦では一本とられましたが、肩を落とさないでください。judo が変わっていても、いいじゃないですか。現実を直視しましょう。そして、井上さん、あなたが野心家なことは、薄々感じています、はっきり言って役不足です。CMで頑張れるうちに頑張ってください。

明るい話題もあります。

野球です。野茂が Nomo となったのが、今から振り返ると大きな契機でした。その意味では、Nomo は偉い。潔かった。Nomo が英断をしなかったとすれば、Ichiro、Matsui、Iwamura らが活躍する状況を目にするのは、もっと遅れたかもしれません。おっと、Daice-K = D-Mat を忘れてはいけません。言うまでもなく Matsuzaka のことです。Matsusaka ではなく Matsuzaka ——「S/Z の恐ろしさ」、これが〇〇年ほど前に書いた、自分の卒論のサブテーマでした。懐かしいです。

Ichiro さん、間違っても引退後は、自〇党の国会議員にならないでください。虫の知らせというか、あなたが一番心配なのです。何をしても、おかしくない。それが、あなたのいいところですが——。

やはり野球がらみの話なのですが、次のような言葉をお聞きになったことがありますか。

ベースボールと野球は違う。別ものだよ。

かつて一時期に、一部の人たちが、通(つう)ぶった顔で、そう語ったものでした(※懐かしい響きのあるフレーズです)。もはや、そんな言い草をすれば、失笑を買うだけでしょう。スポーツというイベントあるいはエンターテインメントの商品化の波は、ものすごい勢いでグローバルな展開をみせています。

何しろ、お金はのっぺらぼうの化け物です。何でもかんでも、貨幣に化ける。化けた貨幣の匿名性は強い(※この点については、当ブログの「匿名性の恐ろしさ」2008-12-29の記事で書きました)。あらためて、そう思います。そのことを実感させてくれる例を、もうひとつ挙げましょう。

野球に比べれば、日本では相当出遅れたサッカーの世界ですが、漢字からアルファベットへの衣替えが、当然のこのように行われています。Nakata、Naka(mura)、Ina(moto).....といった固有名詞を並べるまでもないでしょう。

カズは kazu ではなく、カズのままでいてください。「人間国宝」ですから、「化石」な

んて言ってませんよ、「ジャスト・ジョーク」なんて言っていませんよ。書いてはいますけど。

ところで、Nakata さん、お帰りなさい。「自分」は見つかりましたか？

で、グローバルな視点で見れば、ベースボールにおける日←→米、米←→ラテンアメリカを中心とした、カネとヒトの流れに比べれば、サッカーやラグビーの多国籍性のほうが、圧倒的にすごいし、先進的でした。その広がりも、南半球にも及びます（※南アフリカ、ニュージーランドのラグビー、ブラジルのサッカーを思い出しましょう）。

この国で、そうした意識が希薄なのは、やはり日米軍事同盟の産物でしょうか？ アメリカナイゼーション（※これも懐かしい響きの言葉です）などという、ヤワな話ではないことは確かです。

*

さて、haiku です。ようやく、話が戻ってきました。ただし、haiku ではなく、俳句。これは、しんどいです。川柳の愛好者が増えているといいます。きのうネコを探しに行っただけで、たまには見聞を広げようと、勇気を出して書店に入り（※たくさんの本が並んでいるのが、うっとうしくもあり、めまいを誘い、怖いのです）、「公募ガイド」という雑誌を立ち読みしましたが、なるほど、と納得しました。

何しろ、間違っただけで入賞すれば、20文字＝シラブル（※正確には「モーラ」というそうです）が〇万円に化けるのです。いいですねー。川柳ブームは、不況も大いに関係していると新聞に書いてありました。

川柳はメッセージソングに似たところがあります。つまり、「言いたいこと」（※「概念」でもいいです）が込められている。だから、短歌とも似ている、とも言えます。俳句においては、「言葉は物になる」と、冒頭で書きましたが、川柳の場合には、言葉の「物質性」に迫るといって、ちょっとシリアスな、自分好みの味わいに欠けるのです。もちろん、例外もあります。

haiku も、自分があちこちのウェブサイトでいろいろ読んでみた限りでは（※ほとんどが英語ですが）、どうも俳句とは趣（おもむき）が異なる。いや、かなり違う。

漢字とひらがなとカタカナの組み合わせによる、多義性。

主語・述語やセンテンスという、ヨーロッパから借りてきた概念の不在。

「ノンセンス（※ナンセンスの仲間です）＝無意味＝反意味＝無方向＝無軌道」といったらいいのか、言葉を用いながら、言葉の意味を「脱色」あるいは「反転」あるいは「抹殺」しようとするラディカルな姿勢。

言葉が「伝達」や「表現」の道具としての使命から遠く離れ、もはや「物＝物体＝オブジェ」としか言えないような「物質性」を帯びる瞬間に立ち会う「偶然性＝アクシデント」。

以上並べたような、俳句独特のたたずまいが、haiku には感じられないのです。だから、

haiku と俳句とは、絶対に違う。

philosophy と哲学とが違うくらい、違う。

と、声を大にして言いたいのです。

*

なぜ、こうしたことを肩に力を入れて訴えているのかと申しますと、今、＜私家版『存在と無』一序文一＞（※当ブログの「私家版『存在と無』一序文一」2009-01-01 の記事で書きました）の続きの＜私家版『存在と無』一その1一＞を書こうとして、ああでもないこうでもないと考えているからです。

誰に頼まれたわけでもないのに、

です。

で、それを書くために、「存在」と「無」というふたつの言葉にまわりついて離れない「概念」というもの——自分にとっては、「亡霊」のように恐ろしいものなのです——を相手に、誰に頼まれたわけでもないのに考えまくっているのです。

まだ、言葉として書きつづることはできませんが、きょう書いた、

haiku と俳句の違い、

つまり固有名詞や名詞の、ある文字から他の文字への変換（＝転換）、

ひいては翻訳という行為の不可能性＝可能性、

つまり、各言語間にある違い（＝隔たり）、

そして、俳句における言葉の「物質性」

は、自分の中ではつながっているのです。そのことについて、いつか書いてみたいと思っています。

*

それにしても、haiku と俳句との間、そして philosophy と哲学との間に、これほどの隔たりがあり、交流も翻訳も婚姻も野合も、うまくいっていないのに対し、どうしてペー

スポーツと野球の間、soccer とサッカーの間には、あれほどの交流＝交換＝流通＝交通があるでしょう？

異言語間の隔たりの大きさ（※これは、かなり絶望的）に比べて、スポーツの共通性＝国際性（※ルール之差はわずかです、京都弁と大阪弁との違いよりも、その差は遥かに小さいのではないか）が著しいのはなぜなのか？

やはり、さきほど触れたように、お金の問題が大きくからんでいると思われまふ。貨幣の匿名性って、やつです。選手とチーム間の契約金、放映権、選手と企業間の契約――すべてお金に還元できる話ばかりじゃないですか。選手（※あくまでもヒトですよ）までが、ブランドという一種の貨幣に化けるといふわけだ。そして、貨幣は匿名性を帯び、そ知らぬ顔をして流通するといふ次第だ。

それにひきかえ、haiku と俳句、そして philosophy と哲学は、お金にならない。旺盛な物欲がある人ならば、haiku も俳句も philosophy も哲学も、普通はしません。生業にはしません。哲学者ではなく、哲学学者なら、最高学府に大勢いそうだ。もちろん、例外もあつた。また、余技といふ場合もあるでしょう。

やはり、話はお金に行き着くようだ。

*

この行まで、読んでくださった方に、感謝いたします。長かっただけでなく、文章が下手なうえに、内容がややこしくて、ごめんない。そして、どうもありがとうございました。

俳句について書いておきながら、ちなみに自分は俳句が詠めません。読むのは好きですが、作れません。「野球（のぼーる）」＝「獺祭書屋主人（だっさいしょおくしゅじん）」＝「常規（つねのり）」＝「子規（しき）」の句なんて、実にいい。

ネコの寝姿を見ていると、一句浮かびそうな瞬間を感じることがあります。詠んではみるものの、たいていは、季語なし、字余り、技量不足で、へこむのがオチだ。肩の力

を抜いて、もっと自由奔放にやればいいんですけどね。

肩苦し 詠もうとすれど 型狂し

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

◆翻訳の可能性＝不可能性

2009-01-05 10:15:19 | Weblog

きょうも朝から肩がばんばんに凝っています。肩の「ばんばん」と「消えてしまいたい指数」はある程度の相関関係があるみたいに感じられるのですが、「ばんばん」のほうに気がとられて、「消えてしまいたい」が紛れるということもあります。きのうもそんな感じで、きょうもそんな感じです。

きのうは、いつか<私家版『存在と無』—その1—>（※このことについては、当ブログの「私家版『存在と無』—序文—」2009-01-01 という記事で書きました）を書く準備を兼ねて、haiku と俳句などを例にとり、「国際的・国際性」とか「グローバル」とかいう、美辞麗句になりかねない言葉たちをののしりました。

自分の中では、きのうの続きとして、「頭の整理」のために翻訳（※これは国ではなく、言語を「またぐ」身ぶり＝動作です）という作業について書いておく必要があるのではないかという気がするので、その線に沿って言葉をつづってみます。

「論理の鬼」と自称していた人については、すでにも書きましたが（※当ブログの「論理の鬼」2009-01-02 という記事で書きました）、「翻訳の鬼」または「翻訳業界の鬼」と勝手に自分があだ名を付けている人のことから、お話ししたいと思います。「翻訳通信」と「山岡洋一」を、ダブルのキーワードとして、グーグルなりヤフーなりで検索なされば、その人の主宰しているウェブサイトにとどり着けます。

その業界では、有名な人です。自分には苦手な人というか、怖い人です。でも、その人が発行している月刊のメールマガジンを無料で購読しています。お金を出して、その人が書いた本も2冊手に入れました。損はしませんでした。大変いい勉強になりました。

翻訳家、特に出版翻訳家がいかに「食べていけない」職業であるか、翻訳業界では未だに徒弟制度が生きていること、翻訳学校が翻訳業界という氷山の海面下の巨大なかたまりを形成していること、翻訳を生業とするためには並々ならぬマゾヒストの素質が要求される。といった情報を、「翻訳の鬼」様は常に発信し続けていらっしゃいます。

そうした生臭い話は、脇において、ここでは翻訳という、複数の言語をまたいで行う作業の「いかがわしさ」について、書こうと思います。

お断りしておきますが、「翻訳の鬼」様について、業界のボスだとか、業界のご意見番とかいうイメージを抱かれた方がいらっしゃれば、それはちょっと違います。ちょっとですけど。

「翻訳の鬼」様は、翻訳、特に英語から日本語への翻訳を中心に、過去から現在に至る「日本文化」（※多分に抽象的でずさんな言葉ですが）における翻訳という行為の可能性と不可能性について深く考察されている方であり、また口だけでなく、現役の翻訳家としても優れた業績をあげていらっしゃいます。

「翻訳の鬼」様、貴ウェブサイトへのリンクを貼らなくて、ごめんなさい。自分は輸血が苦手なのです（※宗教とは関係ありません、念のため）。当方は、自家中毒症（※比喻です、不快に思われた方、お詫び申し上げます）を省みず、ひとりでシコシコやっているブログなのです。したがって、外部のサイトへのリンクは控えております。

*

もうひとり「翻訳の鬼」とあだ名を付けても失礼にはならない、立派な業績を残していらっしゃる方がいます。難解と言われる一連の作品を英語で書いていた、アイルランドの作家の著（あらわ）した、ある小説を翻訳なさった人物です。そのアイルランドの

作家の「ある作品」のどこが難解なのかというと、「意識の流れ」を言葉につづるという手法を用いて、登場人物の心のモヤモヤを作品にしたり、晩年にはもはや英語とは言えない独自の言語で、お通夜をめぐっての小説を書いたのです。

そのお通夜の小説は翻訳不可能と言われていて、日本の英文学者で翻訳に挑戦したのは、そのもうひとりの「翻訳の鬼」様くらいでした。昔、ある翻訳塾でその人の授業を受けたことがあります。どのような英語で書かれた作品であれ、原文にある「しゃれ」(※「地口(じぐち)」とも言いますね)や言葉遊びは、絶対に日本語でも「しゃれ」にできる、いや絶対にしてみせる、と豪語なさるまさに「鬼」のような方でした。

きょうは、主に「概念」の翻訳について書きたいので、この2人の「翻訳の鬼」様については、別の機会に再度ご登場を願おうと思います。

*

さて、哲学です。

哲学をしたーい。自分の頭で考えたーい。

これが、当ブログの作成者の叫びです。philosophy や、philosophie や、Philosophie (philosophieren) はできなくても、哲学はしたい。消える前までに、できるだけたくさんしておきたい。その後は「無」だから、今のうちにしておきたい。「自分の頭で考えたい」というと、何やらポジティブに聞こえますが、言い換えると、英語、フランス語、ドイツ語で哲学の原書を読むこと、ひいてはその邦訳を読むことは放棄しよう、日本人の書いた哲学書も読まないでおこう、要するに、

全面降伏し、撤退し、逃げよう、または「勘弁してください」と土下座しよう

という姿勢なのです。早い話が、「自分の頭で考えたい」とは、インプットをやめて、ひたすら戯言(たわごと)をアウトプットするという、きわめてものぐさで横着なスタンスをとることなのです。

ですので、自分には、もう哲学書を読む理由も義理もありません。これまで、読み、あるいは耳にした言葉の断片と、そうした言葉と遭遇したさいに抱いたイメージを呼び覚ましなが、新たに言葉を紡いでいこう。そんなネガティブで無精で覇気（はき）のない態度で、自分なりに、ぼちぼち、しこしこと、哲学していこうと考えております。うつのせいには、したくない。絶対にしたくはありません。こうしたらしらないスタンスは、自分の根っからの気性なのです。

怠け者で、暗くて、おまけにへそ曲がり。

それは自分が、一番よく知っています。でも、本気です。本気なんです。これだけは言っておきたいです。それにもかかわらず、生意気にも、あえてきょうは翻訳にこだわりたいと思います。

<私家版『存在と無』—その1—>を書くために、自分なりに「概念」「観念」「意味」に、けりをつけておく必要があるからです。というか、けりなどつけることは無理だと承知で、けりをつける身ぶりを言葉で演じておく必要があるというべきでしょう。くどいですが、あくまで、「言葉で」です。

*

とにかく、概念や観念や意味というやつは難物です。亡霊です。背後霊のように、後ろから重くのしかかってくる。だから、お祓（はら）いをしなければならない。やつらは（※失礼！）毒みたい、ダニ（※ダニさんたちに、「失礼！」）みたいなものだと言ってもいい。だから、解毒しなければならないし、駆除（※ダニさんたちに、「ごめんなさい」）しなければならない。悪魔なら、悪魔祓いという言い方が適切でしょう。映画「エクソシスト」を思い出してください。

ギャッハー！

です。半端じゃ、お祓いできません。現に、

概念と観念というやつ

ですが、これは、たとえばフランスの哲学者たちが、精神医学者まで引き連れて束になり、言葉遊びやオヤジギャグなんかをかましたぐらいでは、とてもじゃないが手に負えなかった、半端じゃなく厄介なものなのです。

そんなわけで、まともに悪魔に立ち向かうのはやめ、ちょっと視点を変えて、ここで言語の違いについて考えてみましょう。

*

哲学 = philosophy が、いくら頭の中で「考える」行為だとしても、結果としては、「言葉」として口にし、それを誰かが（※たいてい弟子ですが）「文字」として記録したり、あるいは哲学をした人自身が「文字」として残します。つまり、哲学は言葉 = 言語（※たいていは母語）に「拘束 = 呪縛」されるということです。

考える。話す。書く。いずれも、体を張った具体的な行為です。

聞く。読む。そして、翻訳（※あるいは通訳）する。それを聞く。読む。これらも、体を張って「行為する」ことです。つまり、

具体的な行為

なのです。ややこしい話になってきたので、ちょっと逃げます。比喩に走ります。オヤジギャグを飛ばします。悪い癖とは分かっているのですが、根っから根性がないので、踏ん張りがききません。で、比喩に逃げます。

まず、フランス語とドイツ語を比較します。自分にとっては、辞書と文法書を頼りに、ほんの少し読めるくらいの言語ですが、自分の抱いているイメージを書いてみます。

フランス語は軽快で、小回りがきいて、おしゃれで（※「駄洒落」の「しゃれ」も含まれます）、明快（※言い古されたイメージです）なところが、いいです。一方、ドイツ語は、

重厚で、力強く、生真面目（※「ドン臭い」も含みます）で、魂にぐっぐっとくるところが、いいです。フランス語は滑ります。ドイツ語は停滞します。

フランス語が「下痢」（※失礼！）なら、ドイツ語は「便秘」か「胃もたれ」です。フランス語が「軽いめまい」なら、ドイツ語は「昏倒（こんとう）」か「失神」です（※フランス語、そしてドイツ語を母語とする方々、ごめんなさい）。

で、存在と無ですが、『存在と無』を書いた、あの小柄なフランス人は、確か血筋的にも、また思考のプロセスを踏むうえでも、ドイツ人に近いDNA（※比喻です）の持ち主でした。だから、あの人の著作はフランス語で書いてあるのですが、胃にもたれます。

欧米で仕事をしてきた、ある文芸批評家が、第二次大戦後のフランス哲学の状況を、
「フランスはドイツによって再占領されている」

と、かつて言ったそうです。いや、嘆いたそうです。これを初めて聞いたとき、大学に入ったばかりの自分はびっくりしました。

話が違うじゃないか。

何しろ、「明晰ならざるものは、フランス語にあらず」という、あるフランス人がプロパガンダしたフレーズを信じきっていたのですから。迷ったあげく、ドイツ語よりフランス語に比重をかけて勉強しようと張り切っていたのですから。内なる自分に巣くっているモヤモヤから救ってくれるものを求めているのですから。

その「再占領」について、教えてくれた人――。

懐かしい！ 涙が出そうになります。今は一部の学生たちから「学魔」とあだ名を付けられています。自分が出会った当時は、少壮気鋭の（※なんと手垢の付いた言葉でしょう）英文学者でした。この記事をお読みの方、ぜひ「学魔」をグーグルなどで検索願います。

「学魔」様、くれぐれも目を大切になさってください。それだけが、心配でなりません。『存在と無』の著者もそうでした。『伝奇集』を書いた、アルゼンチン出身の作家もそうでした。もっともっと本を読んで、うんとうんと書いてほしい人が重篤な目の疾患に襲われます。残念でなりません。

で、その「学魔」様が言うには、そのコスモポリタンな（※懐かしい響きの言葉です）文芸批評家は、仏・独・英語はもちろん、複数のヨーロッパの言語および古典語を、自由自在に扱うことができるという、古き良き時代の欧州の伝統的教養を身につけた、これぞ「生けるヨーロッパ文化」みたいな人だ、とのことでした。だから、大学に入りたての自分は、「再占領」うんぬんの話はヨタ（※「でたらめ」）ではないらしいと思ったのでした。

そうか、せっかく米国に助けられて戦争に勝ったというのに、フランスはドイツによって、また侵され（＝犯され）てしまったのか。いや、侵され（＝犯され）続けているのか。

本当でした。大学生となり、お勉強をしていくについて、その当時の若いフランスの哲学者たちがこぞって、もう世を去ったドイツの哲学者たちの著作の注釈みたいなことに熱中している実態が判明してきました。

にもかかわらず、

若いということは馬鹿いということ、愚かでナイーブ（※国語辞典ではなく、英和辞典でnaiveを引いてください）だった自分は、ころりとそのフランスの哲学者たちの言うことや書くことに心酔してしまったのです。振り返ると、危うかった。あのフランス人たちの冗談半分を真に受けていた。というのも、あの当時のフランスの哲学者たちは、

一種の知的アクロバット

にふけていたのですから、本気で読んではいけない部分もあったのです。全部ではありませんけど。

*

だから、翻訳は信用できない。

と、自分は短絡するのです。

一方、敗戦国であった日本の哲学は、いろいろ媚態（びたい）をつくってはみたものの、ドイツ哲学にも、フランス哲学にも、見向きもされなかった。侵され（※犯され）もしなかった（※これは、セクハラ発言です、お詫び申し上げます）。

こうした状況は、現在もこの先も同じではないか、というわけで、ここで話はまたもや短絡（＝飛躍）するのです。

ビジネス上の通信文、メディアの報道記事、多国間でのさまざまレベルでの条約・コミュニケーション・契約書、特許明細書、各種機械を始めハードやソフトのマニュアル、いわゆる実用書、自然科学の論文・書籍などの翻訳は、ここでは問題にしていません。人文科学・一部の社会科学の論文・書籍や、「純文学」（※「死語」ですか？ いずれにせよ、とりあえず使います）の翻訳を問題にしています。もちろん、ここで特に疑問視しているのは、哲学書の翻訳です。

上で最初に触れたほうの「翻訳の鬼」様は、こうした点についても敏感で、とあるドイツの哲学者の著した書物の新訳と旧訳を比較しながら卓見を展開していらっしゃいます。その議論を読むと勇気づけられる部分もあるのですが、正直言って、

概念＝観念なんか翻訳はできない、できっこない

と言いたいです。

重すぎて、他の言語に置き換えることなど不可能。同じ言語内でもパラフレーズ（※言い換え）は至難の業（※それなのに人は楽々と「至難の業」をやっているつもりでいる）。まして、他の言語に変換などできるのでしょうか？

そもそも、概念＝観念とは、まぼろし＝空蝉（うつせみ）＝現人（うつせみ）（※一昨日の記事をお読みいただければ幸いです）＝空（うつお）ではないでしょうか？ うんとやさしく言えば、概念＝観念なんて「からっぽ」ではないでしょうか？ それを言葉＝言の葉で、掬い取ろうなどというのは、いかさまではないでしょうか？

空しい、虚しい、むなしい、

です。概念退治、悪魔祓いなどは無理。実体がないのだから、そもそも無理。知覚も観察もできないのだから、絶対に無理。

概念はヒトを縛るにもかかわらず（※比喩です）、ヒトは概念を手で触れることも、まして、拳骨（げんこつ）で打ちすえることも不可能。銃で撃っても駄目。原子爆弾でも無理。いや、この星に散らばって存在する原子爆弾を全部使ってヒトが絶滅すれば、可能かもしれない。言語を持った他の生物が、ヒトに代わってしゃしゃり出て来ない限りは。

*

疲れました。心も体も、うつせみ状態（※「うつせみ」については、当ブログの「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03の記事で書きました）になりかけています。正直言って、かなり危ういです。

この行までお付き合いくださった方に、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

ネコが不思議そうな顔をして、こっちを見ている。気配を感じたのでしょうか？

うつせみの声はすれども気配なく

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

◆ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

2009-01-06 09:49:52 | Weblog

「言葉（※あるいは数字）が、ひとり歩きしてしまい……」

という言い方は、失言や暴言や妄言（※本音とも言います）を吐いた、政治家や官僚や財界人や企業経営者などが多用する、言い訳に成り下がってしまいました。要するに、この決まり文句は、責任逃れの道具と化した感があります。

こうした言い訳は、上に挙げた人物以外の人たちもしますが、手にしている権限や影響力の大きさという点では、上記の人たちの発言を、特に問題にしないわけにはまいりません。

厳密に言えば、冒頭で取り上げた「ひとり歩き」とは、少しレベルが違うのですが、きょう書こうと思っているのは、

「表象のひとり歩きのメカニズムについて」

です。

表象とは、言葉（＝言語）、お金（＝貨幣）、イメージ（＝知覚 or 認識 or 意識された映像、思い、気分、記憶、想像、幻想など）、数字、記号……のことです。誰もが、毎日出合ったり、他人と交わしたり、ひとりで密かにいだいている or だいているものばかりですね。

これらなしには、ヒト（※このブログ日記では、しばしば「狂ったサル」と呼びますが）は、生きていきません（※ちなみに、「人間」「人類」「霊長類」「霊長目」という言葉は、偉そうで嫌いです。「ポリティカル・コレクト」に、単に「ヒト」と呼びたいです）。したがって、

「CEE はひとり歩きする」

といったフレーズの、CEE は、「人間は CEE なしでは生きられない」という言い方の、CEE にたいい置き換えることができます。「たいい」と書いたのは、（１）理屈は合うが、語呂が悪くて変に聞こえる場合がある、（２）表象ではなくて具体的なもの（※あるいは行為）の場合がある、からです。そうした理由から、水、酸素、たんぱく質、腸の善玉菌、持病のための治療薬、食事、排泄、などといった（２）は除いたうえで、

「人間は CEE なしでは生きられない」

の XX に入るものを、並べてみます。

愛、性行為、信仰、癒やし、スピリチュアリティ、生きがい、尊厳、アイデンティティ、交友関係、人間関係（＝他者との付き合い）、趣味、強さ（＝タフであること、精神力、元気）、安心感（＝安全、保障）、やすらぎ、他者との一体感（＝愛国心、仲間意識、群れること）、法（＝法律、掟、しきたり、タブー、罪、罰、道徳、倫理）、美、知識、情報（＝データ）……

まだまだ、あるでしょう。また、上で挙げたものに対し、反論もあるでしょう。言葉の構造は、かなりアバウトでモヤモヤ、ぐちゃぐちゃしたものですから（※この点については、当ブログの「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 の記事で書きました）、こうしたリスト作りには、当然限界があります。致し方ありません。

*

いずれにせよ、今、挙げたものたちは、すべて「表象」という言葉でくくることがで

きます。

Aの代わりに「Aでないもの（つまり、表象 or 代理 or 偽物）」を用いること。

これを「表象の働き」とか「表象の仕組み」とか呼んでみます。実は大雑把で、ずさんな言い方ですが（※この点については、当ブログの「そして、話はお金に行き着く」2008-12-28の記事で書きました）、致し方ありません。

表象を相手にする場合、通常、言葉（※これも表象です）を用いることしかできないため、仕方がないのです。つまり、前提が、

Aの代わりに「Aでないもの（つまり、表象 or 代理 or 偽物）」を用いること、つまり「すり替え or こじつけ」

なので、きわめていい加減で、いかがわしいのです。

そうですねえ、すごく簡単に言えば、自分の代わりに代理人を使うようなものです。自分ではありませんから、何をするか、分かったものではない。信頼できない。そんな不信感が心の奥にあっても、不思議ではありません。

*

ところで、あなたは「愛」を指で触れたり、手で握ったり、または舌先で舐めたことがありますか？

あります。毎日やっていますよ。

と、おっしゃる方は、おそらく、愛する対象（※たいていは人間ですが）を指していらっしやるのではないかと思います。逆にその愛する人もあなたを愛しているとして、その愛ってなんでしょう？ あなたの持っているお金？ あなたの顔？ あなたの体？ あなた

の地位？ あなたの美しさ？ あなたの力？ あなたの技能？

「いや、私たちは真剣に愛し合っています。何か文句があるんですか？」

という言葉が返ってきそうです。

ひょっとして、あなたとその人は、お互いに手で触れることもできないイメージをいだき合っているのではないのでしょうか？ つまり、すれ違い、勘違い、または錯覚。

「いいえ、とんでもない。無償の愛ですよ。とにかく、私たちは、心から愛し合っているのです」

と聞こえてきます。

分かりました。つまり、代償（＝代わりになるもの）を求めない愛ですね。すると、触れることも、握ることも、舐めることも、できないものに行き着いてしまいます。それは

イメージ

です。

さきほど並べた

表象の一種

です。

表象って、かなりしぶとい嫌なやつなんです。ある意味では、ですが。

なぜかと申しますと、あなたが愛している対象（※人か物）とは、あなたが五感を用いて知覚しているもの、つまり「代理」なのだ、とも言えるからです。

うんと簡略化して言えば、知覚＝五感でとらえられるものとは、知覚器官が機能して生じた信号＝情報なのです。その信号＝情報が、シナプスを通じて脳に伝わって初めて、触った、握った、舐めた、嗅いだ、聞こえた、見たと、あなたは感じるわけです。要するに、間接的にあなたは、愛しているものを知覚するしかない、ということです。

「代理」

とは、そういう意味なのです。

「そんなことは、へりくつ、言葉の遊び、でたらめ、それこそ、妄言、暴言、失言ですよ」と、幻聴様がささやきます。

ちょっと待ってください。あなたが言い並べたものたちも、表象＝代理になってしまいます。概念＝観念という「からっぽ」の亡霊と同じです。「そのもの」（※これは知覚という間接的手段を除き、ヒトが直接的にとらえられないものです）ではなくて、「そのものの代わり」（※当然のことながら、これも直接的にはとらえられません）とも言えます。

人間は表象なしでは生きられない。

そして、

表象はひとり歩きする。

のです。

実に困ったものです。でも、それでいいのです。普通は、こんなことを考えなくてもいいのです。人間は、「こんなこと」を考えていては生きられない。だから、笑い飛ばしましょう。忘れましょう。無視しましょう。

今述べてきたことも、しょせん言葉＝「からっぽ」です。不快な思いをさせてしまいました。ごめんなさい。

*

最初にずれがあった。

四半世紀以上前に流行った本で読んだ記憶のあるフレーズです。その本は、哲学・思想関連の書籍としては、驚異的な売れ方をしました。その本の、たぶん冒頭あたりに、「最初にずれがあった」という意味のことが書いてあったと記憶しています。ここでは、その断片的な記憶を頼りに、話を進めます。

きのうの記事でも書きましたが、こうした無精で横着なスタンスが、自分にとって、哲学をする、自分の頭で考える、ということなのです。と、ここで、改めてお断りしておきます。自分は、学者でも研究者でもありません。ただ、哲学がしたいと、ほざいている単なるアホなのです。ということなのですが、この先をお読み続けていただければ幸いです。

で、どう「ずれた」かと申しますと、ある尻尾のないサル（※ ape のほうで monkey ではありません）のうちの、あるグループが、

狂っちゃった＝はずれちゃった＝ずれちゃった

んです。というか、たぶん脳に異変が起きたのです。地球上のあらゆる生き物は、表象の働き（※Aの代わりに「Aでないもの」を用いること）を、それなりに使って生命を維持し繁殖しています。

たとえば、イボイノシシもオニヤンマもアカシタビラメも、視覚や触覚などで視覚的イメージなり、気配なりを察知して（※理科が苦手だったので、オニヤンマとアカシタビラメに聴覚があったかどうかは自信がありません）、天敵から逃れたり、食べ物を得たり、生殖の相手を見つけたりしています。すばらしいことです。そうした仕組みが存在することに、心から驚嘆します。

それとは、比較にならないほどの「高度な」（※抵抗のある言葉ですが、とりあえず使います）、とほうもない「表象の働き」を尻尾のないサル的一种が獲得してしまったらしいのです。それが、「ずれた」の真相だということです。太古の話だそうです。

*

とほうもなく、ずれてしまった。そしてサルはヒトになった。

話が、とほうもなく大きくなりそうなので、自分の脳の情報処理能力に合わせて、以上のように、うんと単純化します。で、論理的な思考が苦手なので、飛躍します。

「言葉（※あるいは数字）が、ひとり歩きしてしまい……」と言うとき、狂ったサル（※ずれてしまったサル）であるヒトは、しばしば、言葉なり、数字のなりに責任を転嫁しています。

ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない。卑怯（ひきょう）です。潔（いさぎよ）くありません。政治家として、官僚として、財界人として、経営者として、そんなレベルの話ではありません。誰もが、してはいけないことです。ヒトとして、です。

ずれてしまったことに、ヒトは責任をとらなくてもいい。ヒトは犠牲者だ。被害者だ。よくあることだ。大目に見よう。目くじら立てることではない。

そうかもしれません。

でも、あえて言いたいです。そんなことは、今始まったことではない。それくらいは、

分かっているのがヒトです。

分かっていなければ、ならないのです。

人間らしく、とは言いたくもありませんが、せめてヒトらしくありたい。そう思います。だから、言葉、そして表象に、こだわらずにはられません。

書きたいことは、まだまだあります。でも、「消えてしまいたい指数」(※当ブログの「再び「消えてしまいたい指数」について」2008-12-30の記事で書きました)が80くらいになってきたので、この辺で失礼し、処方されたお薬を飲みます。

お薬のせいではぼーとした頭で、このブログ日記を書きたくはありませんから、ブログを書いている間は、苦しくても「素面(しらふ)」で臨みます。それが自分の取れる最低限の責任だと思えます。

あすは、以上のことについて、別の視点から書いてみたいです。念のために、言い添えますが、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

ここまで、辛抱強く読んでくださった方、どうもありがとうございました。

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

◆名のないモンスター、あるいは外部の思考

2009-01-07 10:50:39 | Weblog

英語に次のようなことわざがあります。

Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)

「美は皮膚の薄さほどのものにすぎない」と、とりあえず日本語に訳することができるフレーズの持つ言葉の身ぶりを、演じてみる(=模倣する)こと。これが、きょうこの記事で書いてみたいことです。きのうのテーマだった「表象のひとり歩き」の続きです。

ここで、ある小説を引き合いに出します。その作者が、上のことわざを知っていたかどうか、ことわざが先か、小説が先か、そんな文学史的論議はどうでもいいことです。そもそも、その小説と上のことわざの間に、類似性をみるのは、自分だけかもしれません。つまり、思いつき、錯覚、妄想です。

たった5つの単語から成るセンテンスと、おびただしい数の単語から成る1編の小説に、同じ言葉の身ぶりが演じられていると、ある一人の読者が抱いた「印象」と受けとっていただいて構いません。

*

さて、

醜い。化け物。きもちわるい。不気味。

何度か映画化もされ、さまざまなマンガのキャラクターとしても登場し、テレビでもドラマやバラエティー番組やCMなどで、その姿が数知れず映し出されたに違いない、ある「モンスター」が登場する小説です。ここでは、イメージ=表象が問題なので、「やむを得ず」固有名詞を出します。なぜ、「やむを得ず」なのかは、このブログで以前書いた、「あえて、その名は挙げない」2008-12-24と「遠い所、遠い国」2008-12-25という記事を読んでいただければ幸いです、別にその記事を参照することなく、このまま読み続けていただいても一向に構いません。

フランケンシュタインです。

これほど視覚的イメージが、広く共有されているモンスターも珍しい。そう言っているくらい、その容貌と身体的特徴は、それこそグローバルな規模で多くの人たちによって知られているに違いありません。

各人によるイメージの差はあるでしょうが、おおまかに言えば、全身の各所に巻きつけられた包帯と傷口とぎこちない動きが人目を引く、人造人間です。ある医学生が複数の死体から取った部位をつなぎ合わせて作ったのですから、そうした視覚的イメージとして描かれるのは当然でしょう。

醜さの代名詞

という言い方もできるでしょう。その小説のストーリーについては、ウィキペディアに記載されている要約が、正確で簡潔だと思います。また、ウィキペディアで「フランケンシュタイン」の項を読めば、広く共有されている、ある誤解も解くことができるでしょう（※「フランケンシュタイン」とは、モンスターの名ではない！）。とにかく、ウィキペディアで「フランケンシュタイン」を、ぜひ検索してみてください。深読みできそうな面白いことが、いろいろ書いてあります。

*

「醜い」対「美しい」

その差は皮膚ほどの薄さだ。具体的に言えば、絶世の美人や超イケメンも、その顔の薄い皮膚をぺろりと剥けば……。と言われても、とうてい想像できないほど、胸に深く迫る醜さ。そして、その醜さを与えられてしまった「存在」（＝creature＝クリーチャー＝生き物＝異様な生き物）の美への憧れと、創造者であり自分自身の身体のパーツの提供者でもある、ヒトへの憎しみ。それが、小説のテーマなのは確かです。

ここで、整形手術（＝形成外科学）を思い浮かべてください。程度の差はあれ、「醜い」から「美しい」に転じる方法のひとつです。身近な人の中に、あるいは自分自身がそうした手術の体験をお持ち方も、いらっしゃるでしょう。美容整形ではなく、先天的な変

形、不慮の事故による損傷、または何らかの疾患などが原因で、形成外科学や整形外科学による治療を受けた方もいらっしゃるに違いありません。

軽く扱ってはならない話題です。何しろ美容であれ治療であれ、ご本人やご家族や身近な人たちにとっては、深刻な問題をかかえた結果として受けることになる処置ですから。お気を悪くされた方には、深くお詫び申し上げます。

*

さて、

ヒトが「美」や「醜」といった「表象」に、いかにかんじがらめに縛られているか。自分を含め、その呪縛から逃れることは不可能に近いのではないか。これは、どういうことなのか？ そう思わずにはいられません。

「美」「若さ」「健康」といった「イメージ」＝「概念」＝「神話」＝「表象」の圧倒的な強さを前にして、ヒトはいかに無力か。いったい、どれほどのお金が「美」「若さ」「健康」のために、毎日地球上で費やされ、あるいは動いているのか。つまり、表象の「交換と流通」（＝トレード）が日々起きているのです。

芸術、スポーツ、医学、芸能（＝エンターテインメント）、ひいては文化、文明――。その根底にあるのは、「美」であり、その影に「醜」があるのではないのでしょうか。

いずれにせよ、

狂ったサルであるヒトが、数知れない行為を通じて、貨幣と言語という、表象の中で最も大きな影響力と流通性を持つ「化け物＝モンスター」に、振りまわされ奔走している。

だから、

表象の「働き」＝「動き」＝「仕組み」の恐ろしさに、ヒトはもっと自覚的であってもいいのではないか。というより、そもそもヒトは、あまりにも無自覚ではないか。

さらに言うなら、

21世紀、霊長類、人類、文明、歴史、文化遺産、ノーベル賞、オリンピックの金メダル——といったポジティブで誇らしげで口当たりのいい言葉や美辞麗句を真に受けていいのか？ それらは、とほうもない鈍感さを前提としてはいないか？

1匹の狂ったサルである自分自身を含めて、問い正したい。そう考えています。

で、

その一歩として、表象に敏感になろうではないか。これが1匹の負け犬の遠吠えとしか、とられないことは十分承知しています。狂人のたわごとと聞き捨てられることも分かっています。何しろ、表象のいかがわしい仕組みについて考えたとしても、それはヒトである自分のアイデンティティを放棄する、単なる身ぶりやポーズにしかなり得ないので、

いわば「外部の思考」、つまり、ヒトであることをやめるという、できもしない行為を、言葉の身ぶりとして演じるしかない。言い換えれば、フィクション＝作り話、つまり、単なる偽善的なパフォーマンスにしかなり得ない。

ちなみに、

「外部の思考」とは、ある女性が書いた上述の小説に出てくる「モンスター」が、「人造人間」＝「人間に似せた人間以外のもの」＝「人間の外部にあるもの」として、人間を模倣して演じる「思考に似た行為」と呼ぶこともできるでしょう。しかし、それが言葉で書かれている限り、その言葉が表象しよう（＝表現しよう）とするものには決してたどりつけず、ただその「抽象的な」身ぶりを「具体的な」言葉で模倣するしかないのです。

ああ、まただ。

模倣の模倣。

ここで、トートロジーなどという、小ざかしげな言葉で満足する身ぶりを装うことはやめましょう。とはいうものの、その小説に書かれた「言葉たち」の「身ぶり」を「演じる」とすれば、恥ずかしい、みっともない、見てはられない、見にくい、醜い、という一連の言葉遊びという仕草にしかなり得ないはずです。どうせ、ヒトは概念になど、たどり着けないのですから。

一句浮かびました。

けさもまた じゃっく よめども ひびきなし

ジャック・ラカン、ジャック・デリダ、そして彼らの惹句。言葉のアクロバットの名人たちと、ヒトを「概念へ」ではなく「言葉の運動に」誘おうとする、彼らが書いた、あるいは彼らが口にしたことを誰かが書き取った、プロパガンダ的な言葉たち——。それを積極的に模倣し、徹底して、言葉にこだわろう。言葉と戯れよう。

と、いうのもまた、このブログのスタンスなのです。その決意については、きのうも触れた「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 に込めた、新年の抱負をご笑覧願います。

*

さて、

その「モンスター」には名はありません。奇（く）しくも、です。固有名詞が与えられていないのです。あの漱石の「猫」と同様に「名前はまだない」まま状態で、ストーリーは語られていきます。

かわいそうです。あわれです。「外部の思考」の主である「モンスター」も、自分のあ

われさを意識しています。そこで、憎しみが生まれます。その結果として、殺人を重ね、北へと行きます。モンスターの製作者（＝創造者）である医学生は、モンスターを追いかけます。

この身ぶりに、自分を重ねられない読者は、「サル目（もく）ヒト科の動物＝ヒト」であることを放棄しようとあがく「人間」様——この「様」は、ニュアンス的には、北〇鮮の將軍様の「様」です、そしてその將軍様を近親憎悪している、都庁でふんぞり返っている都知〇様 I S の「様」であり、とにかく威張っている、つまり「お山の大将」というニュアンスです——であるに違いありません。

ここで表象のひとり歩きを連想するのは容易です。安易と言ってもいいほど、たやすいことです。ストーリー的には、できすぎているくらいのお話ですね。

こういう様（さま）を、下世話な言葉で「やらせ」とも言います。そう言っても、いいくらい、できすぎた、いかがわしいストーリーの小説です。でも、その小説につづられている言葉の身ぶりを見る限り、大切な何かをはらんだ小説です。恐怖小説、ホラー小説、などと呼びたくはありません。フランケンシュタインという、通俗的な視覚イメージを「おはらい」するためにも、多くの人たちに読んでほしい小説です。

小説が抽象的な物語（＝ストーリー）として読まれ、書かれている言葉の身ぶりと表情を模倣するという、具体的な行為として演じることを放棄するのが、圧倒的なヒトの世の慣わしであるなら、ウィキペディアなどの要約やあらすじでも構いませんので、多くの人に読んでほしいと思います。

*

小説から離れます。「一般論」という横着をしましょう。

要するに、

太古にヒトが獲得してしまったものに、ヒトが振りまわされている。その「ひとり歩き」に手を焼いている。

その「ひとり歩き」するものは、葉っぱ、あるいは皮膚の厚さほどしかない、表象（※「表面的」の「表」が使われていることに注目しましょう）です。言葉、つまり言の葉だけでなく、貨幣（※紙幣・硬貨）も、薄っぺら。そのぺらぺら（※「あの人、英語ぺらぺらだよ」のぺらぺら。「ぺらぺら紙をめくる」の「ぺらぺら」）なものに、ヒトが翻弄（ほんろう）されている。

ひらひらと、葉っぱか紙のように翻（ひるがえ）される。ヒト、つまり人間様が、ですよ。

これは、いったい全体、どういうことか？

誰にも分からない。

でも、

たぶん、その「ヒトが作ったもの」の「ひとり歩き」の責任はヒトにはないが、せめて、その「ヒトが作ったもの」に名前くらいは付けてあげてほしい。単なる責任逃れの道具（※この「道具」には、名はありません）だけにはしないでほしい。

そのためには、その『名前がないという』名前＝言葉の身ぶりや動きや働きについて考えましょう。哲学しましょうとは申しませんが、自分の頭と体で、その「ヒトが作ったもの」の「ひとり歩き」について考えましょう。

答えは、おそらく出ないと思います。何しろ、「名前」の動きですから。答えがひとつであるわけがありません。だからといって、あきらめてはなりません。答えは出なくても、考える——その「プロセス」が大切だと思います。

*

「名付け得ないもの」に付けた「名前」は何か、そして「『名前がないという』名前＝言葉」の動きと働きはどういうものなのか。

事態は深刻なのです。

「名のないもの＝ヒトが作ったもの＝名無しという名」が、ヒトの思惑を超えてひとり歩きしているのです。「表象」、「代理」、「言葉」、「名前」、「〇〇」と呼んだところで、ひとり歩きがやむわけではありません。でも、名付けないわけにはいかないのが、ヒトの宿命です。その名付けずにはいかない、名付け得ないもののひとり歩きを、その名付け得ないものに、ヒトは責任を転嫁してはなりません。

「『名前がないという』名前＝言葉」は、次々と変わります。変わるという動きが、使命であるかのように、変わります。本名なんて、単なる言葉です。あだ名、仮の名、別名、異名、ニックネーム、戒名、源氏名、ハンドルネーム、芸名……という言の葉が列をなして控えています。

ということは、「名前＝言葉」とは、空（うつお）です。せみの抜け殻と同じです。内容は無い様でございます。乾ききった殻という形で、死んだ後にも残る可能性がわずかでもあるのが、せめてもの救いでしょうか。

ここで一句。

からからと 冬木にからむ せみのから

すると、

お墓みたいなものじゃないですか！ そこには私はいません、と言われるに決まっていますが。

じゃあ、

空（※そら＝くう＝うつお＝から）ですか？ 貴方は、どこにいるのですか？「山のあなた（＝彼方）の空遠く」ですか？「幸い住むと人のいう」所ですか？

カール・ブッセさん、いや、その方の詩を翻訳（※「訳す」とは、「翻す」ことなのですね）なさった上田敏さん、声に出して読みたいニッポン語、とか何とかいう仰々しい惹句（＝キャッチフレーズ＝プロパガンダ＝景気づけ）を、お墓の下で、どうお思いになっていますか？ やはり、そこにはいらっしやいませんよね。そう信じています。あくまでも、空（※そら＝くう＝うつお＝から）の、あなた（※彼方）、で翻っていらっしやるのですよね？

いずれにせよ、いや、だからこそ、

生きているヒトにとって、大切なことは、彼方ではなく、今、ここで、ひらひらと「考える」ことなのです。ぺらぺらと「頭を含む体を『張った＝貼った』行為」が重要なのです。それが、きつと責任をとることなのです。張る、貼る。ぺらぺらのものを、ひたすら張り、貼り続ける。ひらひら舞う、眩う。決して安住しとどまることなく、まして掘り下げて分かったりすることなく。

そう思います。本気です。正気とは言いませんが、本気です。

*

ここまでお読みくださった方に、心からお礼申し上げます。

きょうの「消えてしまいたい指数」は30前後です。だいぶ楽です。ネコ（※今、足元にいる猫の名前です）、元気です。きょうは、頓服のお薬は飲みません。たぶん。

空をみて けさもとなえる あなたの名

09.01.08 見えないものを見る

◆見えないものを見る

2009-01-08 09:19:48 | Weblog

英語に次のようなことわざがあります。

Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)

<またかよ。きのうと同じじゃないか。>

ちょっと待ってください。確かに出だしは同じですが、きょうはきのうとは違ったお話をします。ジャック・ラカンもジャック・デリダも、出てきません。

高校生の時の話です。確か2年生になった春。新学期が始まって、新任の英語教師が教壇に立ちました。女性です。教師も生徒たちも、お互いに相手を探りあう瞬間です。その教師は、黒板に自分の氏名を書き、簡単な自己紹介をしたあと、生徒たちの氏名と顔を照らし合わせながら、出欠をとり終えました。

「みなさん、辞書は持ってきていますかー？ ない人は、持っている人のそばに行ってください。どのページでもいいから、そうですねー、3回ほどめくって開いてみましょう。ページの中身を読む必要はありません。ただ見るだけでいいです」

いきなり、教師はそう言いました。教室内がうるさくなり始めました。席を離れてもいい、と言われたわけですから、あちこち動き回る生徒もいます。

「じっくり、読む必要はありませんよー。目を細めて、少しページから目を離して見てください。きっと、そのほうがよく分かりますから」と、さらに教師は言います。

「えーっ」

と生徒たちの不ぞろいな声が上がります。何だか、なぞなぞめいてきました。電子辞書など、空想もできなかったころのことです。生徒たちは、一人で、あるいは数人が固まって、分厚い辞書を開き、遠視か老眼の人のように、左右見開きのページから目を離し、近視の人のように目を細めています。

3分ほどして、教師は言いました。

「何か、気づいたことはありませんか？ 読むんじゃないですよー、見た目の印象です。気付いたことを、聞かせてください」

初めて相手にする英語教師に対し、誰も発言しようとはしません。ただ、ざわざわするだけ。

「なぞなぞ」の効果も薄れ、教室内のざわめきが収まりかけたころ、教師は次のように言い足しました。

「短い単語ほど、たくさん意味が書いてありませんかー？」

「なーんだ」とか、「うーん」とか、「おーっ」とか、「はあ？」とか、「……………」とか、生徒たちの反応はさまざまでした。

「英語で一番短い単語は何でしょう？ そう、a(※ア)です。aを引いてみましょう」

よくは覚えていませんが、確かその時に自分が持っていた中型の学習用英和辞典には、番号が振られたいくつかのaがありました。そのことだけでも、自分には驚きでした。

そのうえ、冠詞の a には 1 ページをはみ出るほどの意味や例文が載っていました。驚きました。

で、Beauty is but skin deep. に、いったん話を戻します。たった 3 文字のアルファベットから成る but にいろいろな意味がある。たとえば、only の意味がある。と言って、その教師が例文として上記のことわざを板書したのは、初対面の授業からたいぶ経った、ある日の授業のことでした。

つまり、きのうときょうの記事の冒頭に挙げたことわざは、その教師が教えてくれたのです。

*

それから数年後、自分が大学生になり、言語について考えるようになったとき、その教師の「いたずら」というか「なぞなぞ」と、その「種明かし」をよく思い出しました。そのころには、ゲルマン系とラテン語系という英語の二重構造についての知識も頭に入っていましたし、言語あるいは各単語の意味の構造に関心を示すようになっていました。

二重構造

とは、要するに、

かつての日本語にも、大和言葉（＝日常語）と、インテリや支配階級の用いた漢語（＝文語）の二重構造があり、その構造が今でも意味合いや形を変えて続いているように、英語にも土着系の言葉（＝日常語）と侵入者（＝征服者＝支配階級）の言語（＝文語）の二重構造がある。

という、語学の授業などで、よく聞かされる話のことです。

土着の日常語のほうが、意味の層が厚いのは、つまり多義的なのは、誰もが納得できるでしょう。簡単に言うと、日常生活でよく使う言葉にはさまざまな意味が付着する、と

ということですね。

ちなみに、さきほどの例文に出てきた but という単語の構造を図式化すると、さぞかし、ごちゃごちゃモヤモヤしたものになるでしょう（※この点について興味のある方は、このブログの「匿名性の恐ろしさ」2008-12-29 と「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 を、お読みください）。

言葉（※「何ものか」の代わりに用いられるもの）を使用する

という、

表象の働き（＝Aの代わりに「Aでないもの」を用いること）

のモヤモヤごちゃごちゃぶりは、

数字、視覚的イメージ（＝映像や記憶など）、音声、記号、信号といった他の「表象」たちの、モヤモヤごちゃごちゃぶりと本質的には変わりません。

*

で、話をまとめますと、

上で触れた英語教師の「なぞなぞの答え」、つまり、英和辞典のページを、目を細めて、ぼんやりとした映像で見ることで、英語という言語の構造（※歴史と言っていいでしょう）、つまり、ふだんは見えないものを、「見る」、あるいは、「感じとる」ことができる、

ということなのです。

さらに言うなら、短い単語、すなわち、日常よく使う単語ほど、使用頻度が高いために、意味の層が厚くなります。それだけでなく、文字や音節が少ないほど、だじゃれや、意味の取り違いの対象となる確率が増し、多義性が生じるとも言えます。

*

したがって、

言葉の身ぶりに寄り添おう、

などと肩に力が入っている、このブログの記事は、オヤジギャグとだじゃれの連発で、ますます長く読みにくくなり、その読みにくさを隠蔽（いんべい）しようと企み、やたら改行をするためにさらに長くなる結果として、書いているこのアホは、

疲れて、

うつが悪化し、

へこむ、

というわけです。つまり、

言葉という表象に、とことん、こだわっている代償を払わなければならないはめに陥った、

気取らずに言えば、

罰（ばち）があたった

ということであり、ぶっちゃけた話が、

自業自得

という次第なのです。

言い換えると、

ちょっと頑張りすぎちゃったかな

って感じですよ。だから、

肩の力を抜こう、

頑張らないようにしよう、

ネガティブに生きよう、

と自分に言い聞かせているのです。

*

きょうは診察のある日です。診察を受けないと、お薬が切れてしまいます。そうなる
と、自分としては、かなり困ったことになります。

では、行ってまいります。

追記

ネコ、元気です。

09.01.09 読めないけど分かる言葉

◆読めないけど分かる言葉

2009-01-09 10:27:21 | Weblog

ある文章について思い出そうとしているのですが、なかなか出てきません。でも、自分にとってはとても大切な意味を持つ文章なので、書き進めながら何とか思い出してみます。

まずは、その文章の前提というか背景となる話から書きます。

ヨーロッパのある国に、日本映画、それも 1930 年代から 50 年代に撮られた作品が好きでたまらない女性がいました。その人が、日本からその国の大学に留学して文学を研究している男性と恋愛関係になり結婚しました。これは想像ですが、ふたりの仲を取り持ったのは映画だと思います。何しろその男性の映画好きは、度を越していましたから――。現在も、そうです。

半端じゃありません。

自分より映画を愛している他者を認めない、

という意味の、挑発的なタイトルのウェブサイトをコーディネートしているくらいです

(※「公式ウェブサイト」なのでしょうか？ その辺は自分にはよく分かりません)。「さよなら、さよなら、さよなら」と三唱しながらこの世を去った、映画の化身みたいだった例の黒縁眼鏡のおじいさんの向こうを張ろうとでもいうのでしょうか？

*

で、その男性は夫人を伴って帰国しました。大学の講師になり、子をもうけ、やがて助教授(※昔の話ですから、当時はこの名称がありました)になりました。

その助教授は、自分の所属する大学でのアカデミックな仕事以外に、文芸批評や映画批評を専門誌に寄稿し、一部の若者の間でカリスマ的な存在になりました。親衛隊みたいに、その助教授に付きまとい、非常勤講師として授業を行っている他の大学にまで押しかけるといふ熱烈なファンまでいました。

独特の文章を書く人でした。書かれている内容ではなく、その文章の虜(とりこ)になる学生も、たくさんいました。そうした学生の中には、その助教授を真似て亜流の文章を書く者も少なからずいました。

その意味では、「焼跡闇市派」を名乗り、「黒眼鏡」をトレードマークにしていた、往年の流行作家と似ています。その独特の文体を模倣した亜流の文章の氾濫(はんらん)の元となったという点で似ています。ただし、その助教授とその追随者たちの場合には、「氾濫」の規模は、「焼跡闇市派」連中のそれとはとても比較にならないほど、ごく局地的なものでしたが。

この記事を書いている自分も、その助教授(※自分の在学した大学では、その人は非常勤講師でしたが)の文章に幻惑され、呪縛されたひとりです。思えば、長い間、その影響下にありました。今でも、その名残があることを強く感じます。

ときおり読点、つまり「、」は打たれるものの、句点つまり「。」になかなかとり着かない、長いセンテンスを書きつらね、漢字を多用した、改行の少ない文体が特徴でした。しかも、その改行が極端に少ないため、改行なしのページすらありました。読む人による好き嫌いが、はっきりとあらわれる文体でした。

いや、「文体です」と書くべきでしょう。総長をへて名誉教授となった現在も、その人は息の長い文章を書きます。その文章に対し、

字面が悪い、

とか、

日本語としての美しさに欠ける、

という、首を傾げざるを得ない意見もあります。この「美しい国」の文章で「、」と「。」が現れるようになったのが、歴史上「つい最近」だという事実をうっかりお忘れになった方の、錯覚だと理解しております。

「」（ ）も、濁点も、主語という概念も、ましてや？ とか！ も無かった、ながーい時代があったという、学校でお勉強したはずの、国語的あるいは古文的または文学史的「知識」を思い出しましょう。

いや、偉そうなことは申せません。このブログは、児童・生徒・学生時代には国語が大の苦手だった者の文章ですので、上記の点で事実誤認がありましたら、どうかご容赦、あるいはご教示願います。

*

さて、その助教授の夫人である、さきほど触れた女性ですが、この人もまた語学学校やアカデミックな場での語学教師として働きながら、夫とともに子育てをし、日本での生活には満足しているようでした。でも、やはり日本語には相当な苦勞をしていました。

ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字の混在する書き言葉。敬語の複雑さ。そうした日本語のややこしさに日々悩みながらも、その人は日本語を覚えようと必死で努力を続けました。

その人が、ある文章を書きました。ジャンルで言えばエッセイだったと思います。その内容からして、おそらく原文はその人の母語で書かれていて、その人の夫が日本語に訳したものだと思われます。

で、その文章について、さきほどから思い出そうとしているのですが、記憶が定かではありません。それを書いた女性の名もその夫の名も知っていますが、その文章のタイトルや、何に掲載されていたのかが、どうしても思い出せないのです。グーグルで検索してみましたが、キーワードが足りないか不適切らしく、その文章に関するデータが得られません。

内容は、次のようなものだったと記憶しています。

その人は、まだ日本語がよく分からない。日常会話にはそれほど不自由しなくなったが、読み書きとなると心もとない。夫は毎日書斎でデスクに向かって何やら書いている。デスクの上の原稿を見たことはある。その文字の連なりなら、何度か目にしている。でも、何を書いているのかはさっぱり分からない。

今思えば、日本人でも、その内容を「理解した」と言い切れる人は、それこそ数えるほどしかいなかったに違いない文章の書き手です。異国出身の夫人が読めなくて当然でしょう。

でも、分かる。

読めはしないけど、夫の書いた文章がある雑誌に掲載されていれば、ばらばらめくっているうちに、それだと分かる。

読めないが、分かる。

愛するあの人の書いたものだと分かる。その女性の文章には、そうした意味のことが書かれていたと記憶しています。エッセイのテーマとは関係なく言及してあった瑣末（さまつ）な部分を、こっちが勝手に拡大して思い出しているだけかもしれません。

*

なぜあの文章が、今これほど気になるのか。自分でも不思議です。夫婦間の美談でも、男女間の神秘的な体験でもなく、国際結婚についての「ちょっといい話」でもなく、書かれた日本語の字面を感知できるようになった一外国人の苦労話でもなければ、言語の実相を垣間見るなどという、意味ありげな逸話でもありません。

一言、つぶやくとしたら、

感動

かもしれない。そう思います。感傷とは程遠い感動、むしろ知的な興奮に近い感動です。少なくとも、かつてその女性の文章を読んだ時の自分は、文字通り心が動かされた。それは、はっきり覚えています。

読めない。でも、分かる。

そんな夢のようなことが、他の言語でもあり得るのでしょうか？ あるとすれば、それは、

日本語の豊かさ？ 美しさ？

まさか。そんな抽象的なことではない、と断言できます。となると、

言葉の物質性、言葉そのものとの遭遇、意味から遠く離れた言葉。

そうした小ざかしげなフレーズが次々と浮かんできますが、感動の代わりに、そうした言葉をつづるのは、きょうはやめておきます。

表象。

何だか、きょうはむなしく響きます。空虚な言葉には違いないのですから当然です。言葉をめぐっての事態は一向に変わらないのだから、当然です。

今、改めて、あの文章についての記憶をたどろうとすると、やはり感動のほうが先に立ちます。夢を見ているような、うっとりした心持ちです。それでいて、むずがゆい、鳥肌が立つような興奮を、うなじから両肩あたりに覚えます。

その皮膚の感覚を大切にしたい。

これ以上、言葉をこねくりまわすのは、きょうはやめておきます。

なお、さきほど述べました、

「、」は打たれるものの、句点つまり「。」になかなかたどり着かない、長いセンテンス

に、万が一、興味や心当たりのある方は、当ブログのバックナンバー、「あえて、その名は挙げない」2008-12-24 と「遠い所、遠い国」2008-12-25 を、ぜひ読みください。

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

◆聞こえるけど聞けない言葉

2009-01-10 09:56:42 | Weblog

当ブログを開設して、あっという間に3週間が経ってしまいました。うつ苦しみを紛らわすためという当初の目的のひとつを越えて、どうやら生活の一部になってきたようです。

何かを続けること自体が目的化して、つい頑張りすぎてしまうという、これまで幾度か経験した愚行を繰り返さないように――。そう、自分に言い聞かせずにはられません。

ところで、

取り立てて書くほどの必要がなかったのですが、これまでこのブログには書きませんでした。自分には聴覚の障害があります。中途難聴と言え、分かっていたのでしょうか。

自分の場合、「聞こえにくさ」は、先天的なものではなく、ある年齢から聴力が低下し始め、現在では補聴器なしには生活はできないというものです。障害者手帳の交付も受けています。手帳を持っていると、NHKの受信料や、長距離の列車運賃や、タクシー料金が割り引かれるなどの恩典があります。

親の年金と、預金の取り崩しで生活している身にとっては、旅行やタクシーの利用などは贅沢で、とてもできません。今のところ手帳の恩恵にほとんど浴してはませんが、持っていないよりはましでしょう。

*

きょう、お話ししたいのは、そうした福祉関連の話題ではなく、あくまでも、言語についてのことです。このブログの主要なテーマは、言葉。それ以外にありません。聴覚の障害について書こうと思うのは、そうした障害者でなければなかなか実感できない、言語のある側面についてお話ししたいからです。

目に見えない障害、

という言葉があります。

聴覚障害者は、その障害が目につかないために、さまざまな苦勞をします。銀行や病院で名前を呼ばれても分からないため、係の人に事情をいちいち説明し、合図を送ってもらう必要があります。その類の不自由さを挙げれば切りがありません。

*

内部障害、あるいは内臓障害、

つまり内臓や身体内部の機能に疾患や障害をかかえた人は、たとえば公共の乗り物の優先席に座って体を休めたいと思っても、周りの人たちに自分の苦痛や不調が「見えない」ために遠慮が先立ち、なかなか座る勇気が出ない。冷や汗をかきながら苦しみをひたすら我慢する。そうした話を聞いたことがあります。

広く意味をとると、在日の日系外国人や、一部の帰国子女も、そうです。初めての場所を訪ねなければならないとき、ローマ字表示がないために道に迷う。つまり、日本語がまったく分からない人もいれば、日本語を話したり聞いたりするにはあまり不自由しないが読み書きには苦勞する人が多い、ということです。

言葉に不自由し人に尋ねたいが、ためらってしまう。きよろきよろ辺りを見回しても、髪や目や肌の色、そして容貌にきわだった「異国性」がない場合には、ほとんどの人が親切心を示してくれない。困ったあげくに、道を聞こうとして片言の日本語、あるいはちゃんとした日本語で話しかけると、気味悪がられたり警戒されて、相手が逃げていくこともよくあるらしい。

こう考えると、

目、または視覚というものは、ある意味で、とても残酷

ですね。残酷さは、それだけではありません。

見える、つまり目につく障害がある人にとっては、これもまた他人の目、または視線が残酷なものに転じることは、容易に予想がつくでしょう。

じろじろ見る。

あるいは、

見たとたん、視線をそらす相手。

*

さて、きょうは話を難聴に絞ります。自分自身の体験で語れるテーマだからです。

聞き間違い。

これは、頻繁に経験します。テーマがテーマだけに、いつものような深入りは避けませんが、その経験はだじゃれの種（たね）になりそうなものから、言語の構造に迫る「地口（じぐち）」まで、多岐にわたります。言い間違い、聞き間違い、そして読み間違いが、語の多義性を生じさせ、いかに言語を「豊かに」してきたかについては、このブログの「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 をお読みいただければ幸いです。

で、聞き間違いですが、

笑って済ませられる場合もある一方で、それがもとで他人（※家族や親しい人も含みます）との間で不和が起こったり、時には深刻な問題に発展する事態やトラブルも生じま

す（※仕事や、金銭がからむ場合を想像してください）。当然、職を探すさいには、大きなボトルネックになります。

補聴器。

これも誤解されます。補聴器をつけているなら大丈夫でしょう、とよく言われます。

うーん。そうお思いになるのは、無理ありません。でも、補聴器は「完璧な」解決策ではありません。奥が深い問題なので、詳しいことは書きませんが、どう説明すればいいか――、そうですねー、

聞こえるけど聞けない、

のです。英語を持ちだすと、

hear できるけど、listen できない、

のです。分かっただけでしたでしょうか？ 英和辞典で両者の意味の違いを確認していただければ、たぶんお分かりになると思うのですが――。

いわゆるヒアリング・テストというのは、本当はリスニング・テストですよ。ヒアリング・テストは、聴覚能力を診断するために耳鼻科などの医師が行う検査。リスニング・テストは、聞いた内容の理解度を測る、語学でのテスト。こう言えばご理解いただけるでしょうか？

<あいた うしに ほご いーちに いてね。>

相手のしゃべっている言葉が音としては、はっきり聞こえるが、意味のある言葉としては聞き取れない。

聞こえにくさは、人によってさまざまです。ある特定の音域が失聴（※または低下）している人、全体的に聞こえが低下している人、耳鳴りが激しい人、片方の耳だけが聞こえない人、ある子音を聞き取るのが苦手な人、などなど、です。

ここで、上に書いた、意味不明に思われたら、言葉を再現します。

<あした、うちに午後1時に来てね。>

これが、次のような音の連なりとしてはっきりと聞こえるのです。

<あいた うしに ほご いーちに いてね。>

という具合に、です。あくまでも、たとえば、ですが、自分の場合には、誇張すれば、そんな感じですが。繰り返しになりますが、人によって「聞こえ＝聞こえにくさ」は違います。

*

しみりしてきたので、ちょっと話を飛ばします。

子どものころ、次のような経験をしたことがありますか？

夜、床につく。目がさえて眠れない。近くで、あるいは、隣室から大人たちの声が聞こえてくる。耳をそばだてると、話の内容がはっきりと分かる。

誰かの噂話をしている――。その誰かは、知っている人だ。へえー、あの人、そんなことやっているんだ。あんな顔をして。ふーん。えーっ、すごい。

そのうち、眠気が訪れる。噂話には興味があるけれど、どうでもよくなってくる。

聞いている。聞こえている。聞いている。聞こえている。

そのうちに聞こえてくるのが、言葉ではなく、音、音楽、旋律のように感じられてくる。そして意識が薄れる。眠りに入る。

そうしたことが、ありませんでしたか？ 今でも、同様の経験ができるはずです。

音、音楽、旋律のように聞こえる言葉――

いささか、甘美すぎる、たとえば、

聞こえるけど聞けない、

というのは、それにちょっとだけ似ています。

「聞こえてる？」

きょんとんとしていると、よく言われます。

聞こえているよ。でも、聞けないんだ。何を言われたのか、分からない――。

内心、そうつぶやきます。

*

難聴、失聴、ろう、という現実を日々生きていらっしゃる方、あるいは、そのご家族や友人の方に、申し添えたいことがあります。この記事を読んで不快に思われた方には、心よりお詫び申し上げます。

そして、

健聴者の方、

どうか耳を大切にしてください。

特に、ヘッドホン、イヤホンの類の使用は、あまりお勧めしたくありません。利用するなら、音を小さめにしてみてはどうでしょう。いったん聴力が低下すると、回復する確率はかなり低くなります。

煙草やそのけむりが体に悪いように、耳元での大きな音やヘッドホンは、耳に有害です。くれぐれも、気を付けてください。

では、また。

09.01.11 目は差別する

◆目は差別する

2009-01-11 10:20:53 | Weblog

この数日間、「見る」「聞く」という知覚をキーワードにして、言葉について思うところを書いています。誰もが毎日体験している知覚です。視覚や聴覚に障害を持った方も、程度の差はあれ、「見る」「聞く」という動作を日々の現実の一部として生きています。

視力や聴力を、完全に失った人はまれだと聞いたことがあります。完全な「闇の世界」、完全な「沈黙の世界」というのは、まれだということです。視力を失った人の場合には、明暗や、空気の温かさと冷たさを感じ取ることが「視力」となり得るそうです。また、聴力を失った人にとっては、手足を始めとする体を感じる振動や、空気の揺れ・流れという形での「聴力」が備わっている。そんな話を思い出します。

後者の場合は、中途難聴者である自分にはよく分かります。ドスンとか、バターンという大きな音を、足元や手元にある物の揺れとして感じ取ることが実際にあります。このように障害というものは、たとえば聴力においては、「聞こえる」対「聞こえない」という白黒の区別がはっきりつくものではありません。濃淡というグラデーションのイメージが現実に近い気がします。つまり、その濃淡は各人で異なるのです。各人がそれぞれのグレーの世界に生きている。そんなふうに感じられます。

要するに、

「見る」も「聞く」も、いわゆる「健常者」の特権などでは断じてない、

ということです。

冒頭で「程度の差はあれ」と書いたのは、そうした意味です。他意はありません。そのことに、自分は敏感でありたい、そしてほかの方々も敏感であってほしいと思っています。

*

日常的な動作であればあるほど、慣れ親しみすぎて感じ取れなくなっている。ということが、人には案外あるものです。たとえば、「見えているはず」なのに「見えない」。または、「見ようとしていない」。「聞こえている」のが現実なのに「聞こえていない」か、「聞いていない」。そんなことが自分には気になって仕方ありません。

ここで、一般論をさせていただきます。多種多様なマイノリティーを無視した、残酷

で粗雑な話になりますが、どうかお許しを願います。

うつで苦しい時などに自分がついついやってしまう、ある「遊び」があります。それをやっている、子ども時代に戻ったような心持ちになり気がまぎれるのです。

大したことはありません。虫眼鏡を使って身の回りのさまざまなものを見る。それだけのことです。

パソコンのそばに、虫眼鏡が1枚あります。恥ずかしいながら、虫眼鏡を「枚」や「面」で数えることを、たった今、ある辞書を引いて知りました。まあ、どうでもいいことですけど――。虫眼鏡を1個、1つと数える人がいても、その人の勝手です。言葉に関しては、辞書や世間のルールに振り回されたり縛られたりしたくはありません。

辞書といえば、辞書は好きで、よく読みます。引くというより、読むことのほうが多いかもしれません。各語の成り立ちや定義を知るためなどという、格好をつけた言い方はしたくはありません。ズバリ言って、だじゃれのネタ探しのためです。で、虫眼鏡について今引いたのは「かぞえ方」の載っている便利で小型の辞書です。

*

さて、虫眼鏡ですが、細かい字の辞書を引いて必要な個所を「読む」以外に、「見る」ためにも使っています。

たった今、愛用の虫眼鏡のレンズの直径を測ってみましたが、4.5センチきっかりです。小学校時代、いや保育園に通っていたころから、家にあったような気がします。レンズの枠や柄は青のプラスチック製ですが、もう古ぼけて色がくすんで見えます。でも、レンズ自体は劣化してはいません。愛着があって今でも使っています。

一時活字のデザイナーになりたいと思ったことがあります（※このブログの「地図は現地ではない」2008-12-20で触れました）。大学を卒業して最初の就職に失敗し、ぶらぶらしていたころです。活字を製作している会社で、短期間アルバイトをしたり、東京の六本木という所にあった、こぢんまりとしたグラフィックデザイン専門の塾に籍を置い

たこともあります。どちらも長続きしませんでした。

上で「活字」と書きましたが、正確には、活版印刷で使う「母型（ぼけい）」と呼ばれる金属製の型のことで、これを鋳造（ちゅうぞう）して活字を作るのです。今も、そうした印刷の方法が行われているのかは知りません。

もしも手元に虫眼鏡があれば、辞書でなくてもかまいませんから、文字を拡大してじっと眺めてみてください。

上で挙げたくらいの小ぶりの虫眼鏡で十分です。というか、それくらいの小ささのものが、文字を拡大して「見る遊び」には適しています。個人的な趣味というか、一種の暇つぶしでやっていることですから、みなさんが楽しめるという保証はまったくないのですが、自分にとっては不思議な気持ちを味わらせてくれる密かな慰みです。

文字が、意味を持つ音声としての言葉（＝声に出す言葉）の代理であることをやめて、形そのものに見えてくる。

活字が、書道で書くさいに経験する文字のように見えてくる。

そんな感じです。

書道を、思い浮かべてみてください。筆で書かれた大きな文字を、頭の中で描いてみましょう。あるいは、近くに書（しょ）の現物や印刷されたお手本があれば、ぜひ取り出して見てください。虫眼鏡ではなく、裸眼で見つめてください。

毛筆独特の柔らかさと勢いや、刻印された筆圧だけでなく、書いた人の息づかいや上手下手、あるいは性格まで感じ取れるような気がしてきます。

文字というより、絵というか、物のような気がしてきませんか？

自ら筆を使い、墨で文字を書いたときのことも、思い出してみましょう。緊張しながら何度も練習したり、お手本を見つめているうちに、

文字が文字でなくなってくる

ような不思議な感覚がしたという記憶はありませんか？

もし、したとすれば、それなのです。

きょう、お話ししたいのは、その感覚なのです。

*

自分の場合、虫眼鏡を使って拡大して眺めているのは、文字ではありません。写真も、いいです。写真でもいいではなく、写真もいいです。実にいいです。

写真を虫眼鏡で拡大して見ると、文字よりも強烈なイメージや、思わぬ発見があるので、抑うつ状態が激しいときには、自分は避けます。体が震えるほどの、衝撃を覚えることすらあります。誇張や嘘ではありません。ぜひ試していただきたいです。

見慣れた写真に思いがけないものが映っているのを発見する、という興味本位の驚きもあります。ただ、きょう、ここで問題にしたいのは、そうした驚きではありません。

何が映っているかは知っている、と高をくくっている自分が見逃していた「何か別の被写体の発見」ではなく、「見て知っているはずのもの」の拡大された細部に「確かに見たことはあるものの思いがけないもの」を見て、はっとするのです。不意打ちをくらう、という感じでしょうか。

*

話を、少し変えます。

プリントされた（※印画紙に焼き付けられた）写真ではなく、新聞に載っている印刷された写真を拡大してみましょう。雑誌の場合には、画質がかなり向上してきていますから、ぜひ紙質も画質も悪い新聞の写真で試してみましょう。カラーではなく、なるべくざらついた感じの解像度が悪そうな白黒写真を選んでください。

拡大してよく見れば分かりますが、画像は細かな点から成り立っています。質の悪い紙にぼつぼつと並ぶ点の集まり――。自分の場合には、画像の細部を拡大して眺めると、ある一連の言葉やイメージが頭に浮かぶことがあります。

異形（いぎょう）、醜さ、奇形（＝畸形＝畸型）、気味が悪い、気持ち悪い

そうした「差別語」と理解されても言い訳ができそうもない、言葉やイメージを連想してしまうのです。上に並べた言葉たちを見て不快な思いを抱かれた方に、心よりお詫び申し上げます。

新聞の白黒写真を拡大して細部を見るという「遊び」をしていて、きれいだとか美しいと感じることも時にはあることを、書き添えておきます。とはいえ、やはり、そう思うことは少ないです。ネガティブな印象のほうが多いのは、ひょっとすると個人的な傾向なのかもしれません。

何しろ、こうした密かな「趣味」＝「遊び」をひとさまに打ち明けるのは、これが初めてです。自分以外の人が、どう感じるかは見当が付きません。そう考えると、私小説的か身辺雑記的な随筆のように、ごく個人的な経験を書いていることになります。この記事をお読みになっている方に、上記の「不思議な感覚」が伝わったかどうかは、まったく自信がありません。

いずれにせよ、そうした不思議な感覚を前提にして、強く訴えたいことがあります。

目は差別する

のです。

*

きょうの記事で書こうとしているのは、いわゆる「差別語」の差別とは重なる部分もありますが、少し違います。

区別する、という言葉があることは、十分承知しています。でも、「差」という漢字に、徹底してこだわりたいのです。

差異、誤差の「差」です。「さ」は音読み、つまり漢語です。昔々、支配者や知識階級や帰化人が用いていた書き言葉から来ています。

一方、「違う」の「ちがう」は訓読み、つまり大和言葉です。上で書いた「昔々」以前から、この列島に住み着いていた人たち（※断じて単一民族などではありません）のうちの一部が話していた言語（※複数の方言や異言語があったらしいです）から来ています。

「差」と「ちがう」という語たちが、列島のあちこちで長年にわたって、他の言語や言葉のかげらとくっ付いたり離れたりしながら、現在に至って辞書に収められもし、文字として書かれもし、活字として印刷されて流通もし、人びとの口を通して話され（＝放され）もしているのです。

言葉を用いるとは、「差」・「別」することです。「ちがひ」を意識化し、顕在化する行為です。

「AとBとの違い（＝差異）」をみとめ（＝認め・見留め）、あるいは聞き取る。そして、それを口にし、または文字にする。

「AとB」などと、何げなく書きましたが、「Aそのもの」と「Bそのもの」(※つまり、「実体」や「概念」という大問題です)にこだわるだけの余裕は、きょうはありません。ここでは、素知らぬ顔をしてすっとぼけるだけに、とどめておきます。こういう卑怯な態度を、「抽象化」とか、「一般化」と言います。「抽象化」や「一般化」という作業の「虚構性」＝「嘘であること」については、いつかこのブログで書いてみるつもりです。

と、大見得を切ったものの、「頑張らない」が、このブログのスタンスのひとつなので、長い目で見てくだされば幸いです。

きのうの記事でも、少し触れましたが、目は残酷です。もちろん、耳にも残酷さが備わっていますが、きょうは耳は扱いません。ただ、いくつか例を挙げるとするなら、声の良し悪しや、方言・訛り、おならの音などです。特に、訛り・発音の違いに関しては、英国ではほかの国では考えられないような「残酷さ」が存在すると聞きます。

*

目に話を戻します。

じろじろ見る。じっと見つめる。

物心のつき始めた子どもの目が、一番残酷かもしれません。大人の不躰(ぶしつけ)な凝視は、残酷には違いないものの、ある種のずるさと計算が含まれていて、実に嫌なものです。

子どもの目の残酷さについて、想像してみましよう。見慣れないものをじっと見つめる。幼いほど、悪気はないのです。でも、ヒトの子です。すでに、大人の目の萌芽がちらつきます。「賢い」と言われる子ほど、そうです。

障害、形、美醜、階級、所得差、人種・民族……

といった「差異＝違い」を、残酷な目がとらえるさまを思い浮かべてください。難しく

言うと、今挙げたのは具体的な「もの自体」が、目という知覚器官を介して転じた抽象的な「概念」を表す言葉ばかりです。

具体的なもの自体は、あえて列挙しません。というか、列挙できません。あまりにも、差別的な言葉の羅列になってしまいます。悲しくなります。必要以上に、読む人たちの心を傷つけてしまいます。だから、想像してください。

たとえば、「○色の肌を持つ人は△だ」——という具合に。

「もの」が「意味」あるいは「概念」に転じるのは、その目の瞳、その奥にある網膜、そこに並ぶ多数の細胞、神経線維（せんい）、さらには、大脳皮質で、ほとんど瞬間的に「知覚」という現象が起こっているからです。

簡単に言えば、これが「ヒト（※このブログでは、しばしば「狂ったサル」とも呼びます）であるということ」= human being なのです。たった今、視覚を特権化したうえで一般化し、「これがヒトであるということ」だという表現を用いたことについては、視覚に障害を持った方々に対しお詫びを申し上げます。

言うまでもなく、今論じているのは、「そうではない人たち（※視覚を論じる場合には、見ることができない人たち）」を排除した「一般論」です。一般論とは、ある線引きをし、その線から外れた物や者を選び分けて排除することです。でも言葉を用いる以上、「選別と排除」から免れることはできません。致し方ありません。

*

で、繰り返しますが、

目は差別します。

当たり前なことだと、おっしゃる気持ちは分かります。でも、ここで、ちょっとだけ遊んでみませんか？

虫眼鏡を用意してください。新聞や雑誌の文字でも、写真でも構いません。拡大して、じっとご覧になってみてください。「知っているはずのもの」「分かっているはずのもの」が、そうでなくなります。不思議です。このような、休日のひとときの過ごし方、あるいは暇のつぶし方もあっても、いいのではないのでしょうか。

そのさいには、差別という抽象的な言葉やイメージは忘れてください。忘れていいのです。さもないと、「見えるものも見えなくなります」から。意味や概念や抽象から、たまには離れる努力（※いや、遊び）をしてみませんか。

要領は、上述の、書道で経験する、「文字が文字でなくなる瞬間」に立ちあうことです。文字の代わりに、何らかの被写体を映した写真であっても構いません。

『何か』が『何か』でなくなる瞬間

を意識的に体験してみませんか？

*

ブログには長々とした文章を、ここまで辛抱して読んでいただいた方、どうもありがとうございました。

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

◆投資って何だろう？ お金って何だろう？

2009-01-12 11:07:58 | Weblog

このブログを開設してよかった、と思うことがいくつかあります。そのひとつは、新聞が読めるようになったことです。その経緯については、ブログを始めて数日後の記事に書きました。そのときにも触れたかと思いますが、うつが進行すると新聞を読む気力まで失せる場合があります。

世の中で起きていることに興味を持たない。どうでもいい。文字を追うのが面倒になる、または、つらい。そんな心理状態になります。テレビのニュース番組をぼんやりと見たり、たまたまインターネットのポータルサイトに表示されたニュースの見出しを受動的に見ることはある。それなのに、世の中の出来事についての記事を進んで選び、熟読する気にはなれない。

程度の差はありますが、自分の場合には、そうした期間が長く続いていました。ブログを開設し文章を書く習慣がついてきたのに少し遅れる形で、「世界でとんでもないことが起きている」らしいことが、ひしひしと感じられるようになってきたのです。

不景気。不況。大不況。

そうなんだ。他人事ではないんだ。ヒトである限り、逃れられないもののひとつが、

経済

なのだ。

はっと、あるいは、ふと、その当たり前のことに気づいたのです。で、新聞を読まなきゃ、という焦りをようやく覚えたというわけです。

新聞が読めるようになった。

これって、社会復帰への小さな一歩でしょうか？ こう書いて、思わず笑ってしまいま

した。「社会復帰」という言葉を書いて失笑するようでは、まだ先は長いようです。なにしろ自分は、根っから根性がないのです。

*

いずれにせよ、

お金がない。

お金が、どんどん減っていく。

うちの経済状態についても、遅まきながら、やっとで思いを寄せるようになりました。現実を直視する、というやつです。

で、そのとき、思いました。このブログでは、

(1) うつとの共生の道を探る、

(2) 自分の頭と体で哲学する、

(3) 「表象の働き」(※Aの代わりに「Aではないもの」を用いること)をテーマに考える、

を柱にするはずではなかったか。そのうちの、(3)については、言語ばかりが頭にあるために忘れていたが、

お金、つまり「貨幣=通貨」も立派な表象

ではないか。そういえば、お金という、しぶといやつがいたんだ。言葉と同様に、ヒトはこいつなしでは生きてはいけない――。

というわけで、お金について、ああでもない、こうでもないことを、ブログの中で書くようになりました。抑うつ状態がひどい場合には、お金という切実な問題も、どうでもよくなるのです。

よかった。忘れていたことを思い出せて本当によかった。

全然よくないこと（※お金は諸悪の根源になり得るという意味です）だけれど、とにかく思い出せて良かった。

*

で、きょう、考えたいことは、

投資って何だろう？

と、

お金って何だろう？

です。

貨幣が価値の表象として、ヒトを振りまわしている。

大雑把に言えば、そういうことでしょう。価値とは何か？ 貨幣の働きとは、どんなものなのか？ 言語と同じく、世界中の人たちが、頭を抱えている問題です。知恵を絞っている問題です。

お金がないのなら、どんどん印刷すればいいじゃん。

こう言うと、たいてい笑われます。「小学生の考えそうなことだ」(※児童のみなさん、ごめんなさい)、「無教養な人間の考えそうなことだ」(※「無教養な人間」と呼ばれている方々、ごめんなさい)、「経済を知らない者の言うことだ」(※「経済を知らない」方々、あっ、これには自分も含まれています、他人にそう言われると頭に來ますよね)と、言って笑われます。

いや、「笑われました」じゃないでしょうか？ だって、ネット上で読める英語ニュースのヘッドラインを眺めていると、さかんに printing more money とか書いてあります。別に難しい単語じゃありません。自分にも、「英文読解」できます。「お金を刷ること(動名詞)」または「お金を擦りつつある(現在分詞)」ですよね。

お金がないのなら、どんどん刷ればいいんじゃないですか、やっぱり。

やっているんじゃ、ないですか、やっぱし。

日本語だと、通貨供給うんぬんとか、介入とか、発行とか、マネーサプライがどうのこうのと、煙に巻かれますが、英語の場合には、そのものズバリの表現が使われています。ニューヨークタイムズ、ワシントンポスト、フィナンシャルタイムズ、ウォールストリートジャーナル、全部、そうですよ。こちらの記憶が正しければ、ですけど。

で、政府や中央銀行はお金を刷れても、個人は刷れません。子供銀行券の発行や偽札作りじゃありませんから。

では、どうすれば、「お金」を増やすことができるのか？ すると、

話は「投資」に行き着く。

*

以前、フリーランスで仕事をしていたころに、必要に迫られて経済や経営や金融の勉強をした時期が、短いながらもありました。当時既に抑うつ状態だったのですが、食べていくために、何とか「頑張って」いました。うる覚えですが、『証券投資論』とかいう、高価な本も買いました。読んでも、さっぱり分かりませんでした。CDOなんて略語の入ったタイトルの本も、買った覚えがあります。これは途中で投げ出しました、確か。

そう言えば、subprime loan とか subprime lending って単語、そのころ、ネットで見かけましたよ。だいたい前のことです。日本でサブプライム、サブプライムって騒がれる、ずっと前でした。当時、米国か英国で、誰かが、サブプライム・ローンとか、CDOとかの、仕組みについて批判をしているという話も、英語の雑誌で読んだ記憶があります。自分は、その分野は大の苦手なので、全然意味はつかめませんでした。デリバティブや仕組み債を含め、金融工学とやらのいかがわしさへの警鐘を、はるか遠くで聞いた気がするの、妄想または記憶違いでしょうか？

安全に見えて、やっぱり、ヤバかったんじゃないでしょうか？ その種の「仕組み=からくり」って、アスベストみたいに、本当は相当ヤバかった、いや依然としてヤバいんじゃないでしょうか？

とにかく、そういう批判をする人たちは、絶対的なマイノリティーでした。世界でも、ましてやこの国でもです。それだけは、確かです。そう嘆く数少ない日本人うちのひとりが、あるマイナーな雑誌に書いていましたもの。圧倒的多数者の中での絶対的少数者の孤独って、やつです。マイナーとか、へそ曲がりとか、大好きですから、そういうことだけは、よく覚えているんです。

さて、お金を増やすための仕組みとして、さまざまな投資があるわけですが、株式にしる、債券にしる、デリバティブにしる、コモディティにしる、投資信託にしる、なにやら現在は、全部が死に瀕している様相を呈していますね。死に体(=死にたい.....)。どうなっているんですか、本当のところは？ とにかく、自分のような素人、しかもとろい者にとっては、わけが分からない分野ですから、以下にテキトーに言葉を組み合わせ、疑問を並べてみます。

使っている言葉の意味が不明なのですから、本当にテキトー、イイカゲンな質問ですよ。鉄砲、いやマシンガンの弾と同じで、言葉を乱射するうちに何かに当たることもあるかもしれない。それだけが、頼りです――。

じゃあ、いきますよー。

*

一番気になるというか、不思議な語感の言葉から、お尋ねしますが、

実体経済とかよく見聞きしますが、それって比喩ですか？ それとも、何らかのちゃんとした、あて（＝実体）があって使っている言葉なんですか？

次に、昔、チューリップの球根と関係があったらしい、バブルって言葉ですけど、

それも、比喩ですか？ 球根は英語でバルブっていうんで、だじゃれかと思っていたんですが、両者が関係あったことだけは事実らしいですね。で、バイブルじゃくて、バイブじゃなくて、バブルのほうですが、抽象概念ってやつですか？ それとも、触ったり、咬んだり、舐めたり、かじったりできる、実体のあるものなのですか？ 弾けるって話ですが、その時には、パンとか、bang とか、パチンとか、プシューとか、やっぱり、音がするものなのですか？ その音の予兆ってありますか？ つまり、回避可能なものなんですか？

基本の「き」みたいなことを質問して、恐縮ですが、

利子ってなんですか？ うちの場合には、それだけが微々たる頼りなんですけど、これの仕組みって破綻しないですよ？ したら、非常に困ったことになるんですが、大丈夫でしょうか？

それから、電子マネーって、けさの新聞に出ていた言葉、

これって、うまくいくんですか？ もう、当たり前の現実で、この惑星のすべてのヒトが逃れられない域までに達し始めているのですか？

で、話は、ちょっと飛びますが、

組織を変える、自分を変える、行動経済学を応用する、脳を活かす、脳にいいことをする、星座で占う、何て言っても最後は癒やしだ、発想法を磨く、思考法を鍛える、前世にこだわる、成功には原則や法則がある、オーラを見る、求めない、頑張らない、起きていることは全部正しい、モノやカネではなく自分に投資する、守護霊を大切にする、とあって、やっぱり、アリですか？ ガセや、ヨタじゃないですよ？

ついでにお尋ねしますが、

鏡とか、ひきつけ（※じゃない、引き寄せ、だったかな？）って、もう、旬は過ぎましたか？ かかわらない方が、いいですか？ 口にすると、笑われますか？ 恥ずかしながら、そういうのに、ちょっと興味があったんですけど、終わったってということなら、きっぱりあきらめます。ちょっぴり、寂しいですけど、また元気の出るような、みんなを楽しませてくれるテーマが、続々出てきますよね？ ハリポタやバカ壁は終わったみたいですけど、こういう心を支えてくれるものには、終わりはないですよ？ サザ江さんや、鉄子の部屋や、笑店みたいに、これからも、続けてくれますよね？

それから、脳、なんですが、

しばらくブーム、続きますよね？ 右脳左脳で、右往左往して、右も左も最近はとっぴらちゃったみたいですけど、脳はヒトにとって「命」それも「究極の、命の母」ですから、安心して読んでいて、いいですよ？ ノー・モア・ノーズなんてこと、ないですよ？

で、話を、戻しますが、

自分にとっては、哲学を連想させる言葉なんですけど、

価値ってなんですか？ そのメカニズムが分かったうえで、各国の政府なり、中央銀行なり、金融庁・財務省なり、御用学者なり、金融機関なり、基金なり、機関なり、機関投資家なり、大投資家なり、ギャンブラーが、自分たちのやっていることを、ちゃんと認識しているようには、どうてい思えない、いや感じられないんですが、やっぱりこう感じるは、こっちの頭が悪いからですよ？

ところで、もはや投資の対象は、

ナッシングですか？「無 (=む)」ですか？ この不況が続く限り、ナッシングですか？ そんなことないですよ？ そうだったら、むっ、としますよ、世界中のヒトたちが――。誰かがどこかで、儲けているんですよ？ 儲ける方法が、一部のヒトたちに握られているだけですよ？ 景気って、波ですよ？ 苦もあれば楽もある、の精神でいけば、オーケーですよ？ せいぜい長生きすれば、絶対いいことがありますよね？ これまでの歴史が、示している通りですよ？

ちなみに、

ノーベル経済学賞って、

途中から設けられた賞がありますが、米国の陰謀だとか、アカデミックな世界のペテンだとか、だって書いてある本は、いわゆるトンデモ本ですか？ 信じちゃいけないんですよ、ああいう本は？ 経済学って立派な科学ですよ？

唐突ですが、カジノ資本主義って、

発想自体が間違っているって、本当ですよ？ ああいう発想は、危険思想ですよ？ ああいうことを言う人は、過激派ですよ？ C I AやF B I（※機構改革して、もう存在しないのでしたっけ？）に狙われますよね？ そもそも、投資と投機は、違いますよね？ ケインズの株狂いと、ケインズの経済学ほどの大違いですよ？ だから（※何で「だから」なのか？ 自分でも分からなくて言いました）、資本主義って、勝利したんですよ？ 現に、ベルリンの壁が崩れたのですから。第一、ソ連が崩壊したのが動かせない証拠ですよ？ 米国が崩壊するなんて、ありっこないですよ？ 中国も、インドも、ジャパンも、EUも、大丈夫ですよ？ 万が一、米国が風邪を引いても、デカップリングが働くから大丈夫ですよ？ それとも、今回の危機は、高病原性鳥インフルエンザ並みですか？ だとすると、困るんですけど。

で、ケインズなんですけど、

昔、暴走する市場経済への処方せんを書いてくれたんですよね？ 頼もしいです。今度の大不況も、その弟子たちが何とかしてくれますよね？ 庶民は安心して、ただ時間が経つのを待っているだけで、いいんですよね？ なんとって、ケインズは偉い人だったんですよね？ 自分的には、好感を持っています。神の見えざる手と闘ったんですもの。神は死んだ、と叫んだニーチェと同じくらい、偉い人だと思っております。オー・マイ・ゴッド（※クリスチャンの方、不快感を持たれたとすれば、ごめんなさい。自分は、よそ様の信仰に、立ち入る気は毛頭ありませんので、はい）。ただ、自分は、自分なりにロゴスと闘っているつもりなんです（※哲学がした一い、だけです）。

ケインズつながりで、お尋ねしますが、

オバマはFDRになって米国を救ってくれるんですよね、JFKじゃないですよね？ というのも、去年の11月に米国のTIME誌の表紙を見て、イヤな気持ちでしたものだから。グレーのハットに、グレーのジャケット、楕円形のレンズの眼鏡、くわえ煙草、そこまではいいんです。オープンカーが気になって仕方なかったんです。沿道の人たちといい——。ダラスを思い浮かべて……。杞憂ですよね？ 深読みしちゃ、駄目ですよね？ ひょっとすると、メディアの「わしらは分かっていたぞ」の「アリバイ作り」だったりして。メディアを対象にしたイコノロジー（図像解釈学）を実践するなら、最適の画像だと、その時に思ったんですけど、考えすぎですよね？

【※ただ今書いたところを読んでいて、理解に苦しんでいる方、ちょっとご面倒をおかけしますが、グーグルで“TIME” “NOVEMBER 24, 2008” “cover” をトリプルで同時に検索してみてください。ある雑誌の表紙の写真が載っているサイトに、たどり着けるはずですので。】

ちょっとシリアスですけど、そもそも、数学とか数字とか統計学とか、

信じていいんですよね？ 言葉でしか知らないんで、恐縮ですけど、ゲーデルの不完全性定理とかいうのって、無視していいんですよね？ 悲観することないんですよね？ 夜、安心して眠っても構わないんですよね？ これも、聞きかじりですけど、ポアンカレ予想ってのが、解決したらいいんで、霊長類・別名サル目・ヒト科・ヒト属・ヒト種、つまり、ホモサピエンス、いわゆる人間様は、やっぱし頭がいいんですよね？ 何しろ、月にも行ったし、2000年問題もノストラダムスの予言も（※両方とも、本当に大問題でしたよね？）

乗り切ったし、その英知は、この惑星で、いや少なくとも太陽系でダントツですよ？

だから、

世界中のヒトたちが、一番心配している、お金の問題も、

そのうち、チョー頭がいいその道のエキスパートの手でバッチリ解決しますよね？ 単に時間が経てば解決するだけの問題だなんて、大嘘ですよ、

ね？ ねっ？？ ねーえ！？

*

まだまだ疑問はいっぱいあるのですが、書ききれません。それより、さすがに、きょうは疲れました。慣れない、経済関連の言葉たちを使ったせいでしょう。お金のことで、やっぱり苦手です。

お金なしでは、生きていけないのは、分かっていますが、お金の話をしていると、ただでさえ、イヤな自分がイヤなヒトになっていく気がします。この記事を書いたあと、即、お薬が必要になりそうです。「消えてしまいたい指数」が上がってきました。

しつこいようですが、

ひょっとして、貨幣という表象の仕組みや、市場経済というメカニズムが、間違っている＝うまくいかない＝諸悪の根源だ＝大チョンボ、なんていうこと、ないですよ。心配でなりません。

だとすれば、一大事どころか、ヒトという種にとっての大問題です。言語の問題のほうは、とっくにあきらめています、お金のほうまで、そうだとすると、現実的に困り

ます。ご飯が食べられなくなってしまいます。ヒトだけでなく、今、足元にいるネコやその仲間たちにも、危害や被害が及びそうな予感すらします。

何よりも困ったことで、きょうの記事を締めくくります。これまで、上で綿々と書き連ねたような質問は、いったい誰にすれば、いいのでしょうか？ 冗談じゃなくて、誰？

誰なんだ！？

「貨幣＝表象」に備わった「匿名性の恐ろしさ」が怖いんです。硬貨は、しょせん金属、お鍋とっしょ。紙幣は、しょせんぺらぺらの紙。

紙のみぞ知る＝カミのみぞ知る＝誰にも分からない、

ですか？

*

きょうも、長々と書いてしまいました。この行までお付き合いくださった方、お疲れ様でした。

で、もし、よろしければ、当ブログで、自分なりにお金について考えたことを書いた「そして、話はお金に行き着く」2008-12-28 と「匿名性の恐ろしさ」2008-12-29 もお読みいただければ、とても嬉しいです。

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

◆架空書評：狂った砂時計

2009-01-13 10:26:35 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、訳者名、出版社名、定価は、すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご注意ください。)

書名：『狂った砂時計』サラ・G・ルイス著、東京子訳、速川SF文庫、680円＋税

翻訳書を買う場合には、私は奥付などに記された原題を確認する。本書の原題は、A Crazy Hourglass。タイトルが素直に訳されているところが、気に入った。これが、仮に『てんてこ舞い』などと意識されていたとすれば、私はその訳者を信用しない。そのような次第で、原題を見たのであるが、「ア・クレイジー・アワーグラス」と口に出してみた途端、ふと酒が飲みたくなった。

アワーグラスで our glass を連想したのだ、と気づいて赤面した。グラスが、単数形であるところがいい。好みの女性と2人で1個のグラスを支え持ちながら、交互にちびりちびりしている様子が脳裏をかすめる。想像は膨らみ、スコットランド産の琥珀（こはく）の液体か、濃いピンクのカクテルなんぞを、ときおり鼻先を接し合って同時にすする。

なぜ、こんな私的で淫らな妄想を白状したのかということ、似たような場面がこの小説に出て来るからである。

場所は、南太平洋に浮かぶ小島。観光以外に何の産業もない港町の小さなホテルに、夫婦ではない男女が滞在している。男性は、オーストラリアにある大学付属の研究所に籍を置く物理学者、フレッド。女性は、米国政府の行政組織を辞職して間もない、ジェーン。ストーリーは、1人の会話と、過去数カ月にわたる2人の行動が断片的に挿入されるという形で展開していく。

どうやら時が狂いかけているらしい。これは、ネタバレにはならないであろう。小説を10分の1ほどまで読み進めれば、そうした状況に陥っていることが明らかになるからである。ジェーンが勤務していた組織が情報機関であったことが、ほのめかされる。米国

政府は、「時が狂いかけている」現象の真相究明に密かに乗り出しているという。フレッドは、世界に起こりつつある異常な事態に各国の科学者たちが気づき始めて、メールなどを通じて事態の真偽や原因について議論している模様をジェーンに語る。

時とは何か。空間とは何か。果たして、光は波なのか。時空に歪（ゆが）みはあるのか。時間の速度と空間の膨張は一定しているのか、それとも変動するのが常なのか。生物の認識は時空に沿っているのか、無関係なのか。

フレッドとその同僚たち、およびインターネットを通じて話し合う他国の学者たちとのやり取りが、描写される。一方、ジェーンは、自分が所属していた、脳科学者や心理学者から成るセクション（※彼女は、その部署の秘書を務めていた）で見聞きしたことや出来事をフレッドに語る。そのセクションは、かつてマインドコントロールや催眠法を研究の対象にしていたらしい。ジェーンが働いていた建物でのさまざまなエピソードが、フラッシュバックのように再現される。

本書に出てくる物理学的な議論は、私には禅問答のように感じられた。科学者たちの話の中では、時と空間と光が、無とすれすれの存在のように扱われる。はっきり言って理解できなかった。原文が難解で翻訳者が混乱しているのではないかと思わざるを得ない文章が、多々あった。しかし、ストーリーの面白さにつられて私は読み進んだ。

話の核心となる異常な事態とは、私たちが普段よく経験する印象と酷似している。ただ、それが個人のレベルではなく、世界的規模で同時的に起きている。

今日1日は、いやに早く過ぎたなあ――。

君、時間を守ってもらなければ、困るよ。何だって？ まだ、午前9時だと言うのか？――

今日の午後は、嘘みたいに物事がゆっくり進んでいった気がするわ――。

あれ、もう7時？ 6時の間違いじゃないの？――

この番組、2、3日前に見たような記憶があるが、あれからもう1週間たったのか――。

さまざまな人物による上述のようなシーンが、ジェーンとフレッドとの会話に、次々と織り込まれる。奇妙なことに、それぞれの場面で登場する人たち全員が、まったく同じ時間の緩急を感じている。普段より時間が驚くほど速く過ぎ去る時があれば、じれったいほど時間が進んでくれないと感じられる時もある。そうした時の歪みや変動が、どうやら世界同時に起きているらしい。

そのために、事故が一時期に多発したり、ある時間帯に病院で患者が急にばたばた亡くなったり、スポーツをしている人達が自分の体がスローモーションで動くような、あるいは早送りされているような体験をし、大騒ぎになる。

とはいえ、たいていの場合には、自分一人だけが錯覚しているものと思込み、他人から正気を疑われたくないために互いにそのことには触れないように気遣う。そんな個人の心理描写が、笑いを誘う。だが、そうしたシーンが次から次へと紹介されるにつれて、読者は各登場人物に感情移入し、これは決して笑ってなどいられない状況だ、と考えるようになるに違いない。巧みな構成である。

物理的には規則正しく時間が進んでいる。同じ標準時間帯では、どの時計も、それが正確なものであれば同じ時刻を示している。逆戻りはない。ただ、時間が速くなったり遅くなったりしていることは、世界中の人たちが薄々感じているらしい。

一部の高等な生物も時の歪みを感じているらしいことが、観察され、報告される。これは個人的な錯覚ではないのではないかと誰もが感じ始める。しかし、面と向かってそれを話題にするまでには、なかなか至らない。誰もが、「自らの狂気の自覚と発覚を恐れている」(※これは本書から引用した言葉である)。

「訳者あとがき」にも指摘があるが、本書と同様の「時間の歪みや変動」をテーマにしたSF小説は、これまでにたくさん書かれてきたらしい。私はジャンルを問わず何でも読む性格なので、特にSFに詳しいわけではないが、確かに誰もが思いつきそうなストーリーではある。時間の歪みや変動を感じるのは、人間一般にみられる心理だからであろう。

とはいうものの、そうした現象が世界で同時的に起こるとすれば、大変なことになる。各国の政府も、事態を甘受し静観しているわけにはいかなくなる。実際、この小説の中では、グローバルな規模で展開している経済活動や、各国政府の安全保障に関する施策が大混乱に陥る。

小さな島に滞在する2人の人間に焦点を当てることで、作者は上述の大きな問題を処理するのにある程度の成功を収めているという印象を受けた。難解な物理学的記述はさておき、本書を読んで抱いた私見を最後に述べたい。

人間を始めとする地球上の生物の時間感覚と、物理的な時間とのずれ。それが一致しているというのは、錯覚ではないか。むしろ、生物が物理的な時間に、自らを適応させて生き延びてきたというのが、真相ではないか。それができない生物が淘汰されて、現在に至っているのではなかろうか。時間については、古今東西の自然科学者や、思想家、宗教家が、考察を重ねてきた。その思索に驕（おご）りがなかったか。彼らはおのれの五感や脳が、正確無比な機械、ないしは精密な器機であるかのごとく振舞ってこなかったのだろうか。

懐疑主義者たちもいたことは、歴史が示している。しかしながら、彼らの疑念さえも、人類一般に共通する想念の中の、いわばシミュレーションにすぎない。もし、時の歪みや変動という現実遭遇した場合、懐疑主義者も含め、個人はどのような身の処遇をするであろうか。その時にこそ、私たち一人ひとりの人間としての生き方なり倫理観が試されるのではなかろうか。

どうやら、私は深読みをしすぎたらしい。

本書の終わり近くで、ジェーンとフレッドが、ベッドで1個のグラスに入った酒を分け合い、やがて情事が始まる。ジェーンは、それまでいじっていた砂時計をサイドテーブルの上に置く。3分きっかりで落下し終わるはずの細かな砂が、男女の寝そべるベッドの脇でゆっくりと落ちていく様は、エロチックであり、また神秘的でもある。作者の筆がさえる。

そこで、急に場面が変わる。それ以降、ジェーンとフレッドは現れない。

まず、ホテルのスイートルームのトイレで、てんてこ舞いする男性の宗教家の様子が描写される。きらびやかな僧衣をまとった宗教家が、恥も外聞もなく慌てふためく様が、何とも悲しく、また可笑しい。うろたえて立ち騒ぐ宗教家が信徒たちに向かってインターネットを通じて放送する説教が、バスルームのドアの向こうから聞こえてくる。以前に収録されたものらしい。説教の内容は、現在世界で起こりつつある神秘的な現象と、それに対しての身の処し方である。達観し悟り切ったかのような文句が、次々とパソコンのスピーカーから流れる。時間が速く進むために、宗教家はこらえきれなくなる。僧衣が邪魔になり、排泄に失敗し排泄物にまみれる。

次に、研究所のオフィスのデスク脇で立位のまま、女性とセックスに耽る、前年にノーベル賞を受賞した物理学者のてんてこ舞いが描写される。早く果てた物理学者をよそに（※この物理学者は常に「早い」らしい）、突然、無慈悲にも時間がゆっくり進み始める。当然、相手の女性は満足しない。場所が場所であるから察せられるが、2人は夫婦ではない模様。なにしろ、女性の罵倒がすさまじい。ここでは引用は差し控える。物理学者は懸命に、世界で起こりつつある珍現象を難しい用語を駆使し、長々と「講義」する。置いてきぼりをくった女性が、そんな言い訳を許すわけがない。怒り狂った女性は、下半身だけ裸の物理学者に向かって、オフィス内のさまざまな物を投げつける。スローモーションのようにゆっくりと飛んでくる物体を、思うように動かない体を必死で動かして、かわしながらも、物理学者の「講義」は続き、尻切れトンボのように小説は終わる。

ところで、デジャ・ヴュにせよ、時間の緩急感にせよ、当たり前だと思っている現実の中で生きる私たちにとって、一抹（いちまつ）の存在的不安を抱かせるのには十分な錯覚である。だが、本当にあれは錯覚なのだろうか？

到底あり得ない話だとはいえ、不思議な読後感を残した小説であった。翻訳には多少の不満はあったが、作者の構成のうまさには感心した。複雑で大きくなりそうなテーマとストーリーを、コンパクトにうまく処理してある。5段階評価であれば、私は4をつけたい。

<評者：孟宗竹 真（もうそうだけまこと）・詩人>

*

当ブログの開設者には、本を買っても読まないでいる、いわゆる「積ん読」という悪い癖がありました。現在では、本を買う金銭的余裕がないので過去形で「ありました」と、書くしかないところが寂しい限りです。

上記ブックレビューの評者、孟宗竹氏とは、このブログ画面の左にある「メッセージを送る」機能を通して頂戴したコメントが縁で、ネット上でのお付き合いをしております。

「本の虫」(※同氏ご自身のお言葉です)である孟宗竹氏から、「不定期に」という条件で、当ブログに無報酬で寄稿いただくことになりましたことは、同じ虫でも「親の寄生虫」である、このブログ開設者にとっては身に余る光栄であり、同氏に深く感謝しております。

メールに添付されてきたワード文書の原稿に手を加え、ブログの記事として読みやすいレイアウト(※読点と改行を多くすることや、段落分け)にしたいという、こちらのわがままな申し出を快諾していただいたことに対しても、孟宗竹氏にお礼申し上げます。

孟宗竹さん、今後とも、よろしくお願い申し上げます。(パ)

*

昨晚、もどってきたネコ(※うちにいる猫の名前です)の首輪がまた変わっていました。今度は、鮮やかな水色です。冬にしてはちょっと寒そうな色ですが、よく似合っています。

うちでは、ネコを「飼っている」とは言いません。「いる」とか、「来た」とか、「戻って来た(※そういえば「帰って来た」とも言いません)」とか、「いない」とか、言っています。

「えさをやる」とも、めったに言いません。「ご飯(※キャットフードや、うちの食卓に載

せるおかずの一部ですが)は、もう済んだ」とか、「ご飯は、まだ」とか、「用意する(※もちろん、もちろん「つくる」とは言いませんが)」とか、「きょうは要らないらしい」とか、「もう済ませてきたみたい」とか、そんな言い方をします。

ある家からうちに来て、赤ちゃんのころからいるのですが、いつの間にか、そんなふうになっています。

いずれにせよ、これまで何度か変わった首輪といい、ご飯の食べ具合といい、普通の言い方をすると、どこかで「飼われている」、または複数のヒトたちが「飼っている」つもりらしいことは、間違いありません。猫は自分が人間を飼っていると思っている。そんなフレーズを見聞きしたのを思い出しました。

そんな、ネコがうらやましいです。

追記

孟宗竹氏の書評の後に書かれている、拙文の最後に「(パ)」とあるのは、「ネガティブに生きる」というタイトルで、このブログを書いていた時期に、「パリス・テキサス」というハンドル・ネームを使っていた名残です。ご存知の方も多いと思いますが、ヴィム・ヴェンダースという映画監督が製作した「Paris, Texas」(邦題はなぜか、「パリ、テキサス」)から拝借したものです。米国のテキサス州にあるパリス市から来た題名ですね。パリス・テキサス改め星野廉を、今後ともよろしくお願い申し上げます。

09.01.14 ん？

◆ん？

2009-01-14 11:01:58 | Weblog

えっ？アラフォーが新語だってー？そんなん、もう死語じゃん。

これは、実際に聞いた言葉です。ネコを捜して近所を歩き回っていたとき、すれ違った自転車に2人乗りした高校生のひとりが、大声で言っていました。難聴者の自分にも、聞こえるくらいの大きな声でした。1カ月以上も前、つまり去年の12月のことです。

新語・流行語って、寿命が本当に短いものなのですね。もちろん、今、使った「新語」と「死語」は、辞書的な定義からは外れた、一種の「俗語的表現」として使われているものを指します。「俗語」の「俗」という漢字には軽蔑的ニュアンスがあって、好きな言葉ではありませんが、とりあえず話を簡単にするために使います。

で、特に若い世代の間で、上の例のような使われ方をしている「新語」と「死語」ですが、どう違うのでしょうか？

*新語：比較的最近使われ始めた流行語の一種。造語もあれば、従来の語句に新しい意味を加えて用いられる場合もある。若者の間で自然発生するほかに、テレビ番組・インターネット上・携帯サイト上において発生し流通する。

*死語：すたれた新語・流行語。まだ知られているものであるほど、軽蔑的に「死語」と呼ばれる場合がある。また、自分が知らない語に対し、自らの無知を取り繕（つくろ）い、居直った態度で吐かれる悪態としても機能する。

上記の定義を前提とするなら、新語・流行語大賞が発表される12月上旬には、晴れて大賞を勝ちとった新語・流行語は、既に「死語」と化している公算は大だと言えなくもありません。つまり、

「そうか、これがチョー、ナウいのか。じゃソッコー、使ってみよう」

とか、

「そお、これがイマイのね。うふっ。よし、よし、よーし、使ってみよっと」

などと独り言を口にしている、「若さ」や「新しさ」に羨望（せんぼう）し、ワカモノや時流に媚び、「流行」に敏感であろうと必死の努力をする、若作りおじさん、若作りおばさんが、そのもくろみを実行した場合には、世間、いや、ワカモノ（※バカモノとも言われる場合もあります）から笑いの対象にされる公算も大だと言えるわけです。要するに、賞味期限が短い場合がほとんどを占めているために、「too late = 残念ながら期限切れ」となる次第です。

当然のことながら、ワカモノのせせら笑いなんか、そんなの関係ねえ、という硬派の方も多数いらっしゃいますが、そういう方々は、そもそも新語・流行語など使いませんし、根っから無視しています。

*

で、さきほど挙げた2つの語の定義に話を戻しますが、「新語」と「死語」とは反意語の関係にはなく、むしろ親戚、近親、兄弟姉妹ぐらいの「近さ」があるのではないかと、そう思います。いや、きっと、そうに違いありません。

近親憎悪

という便利な言葉で、説明することも可能でしょう。

これまで見聞きした、「新語」から「死語」への、はかない移り変わりの数々を思い出してみると、少しではありますが、

出世魚、あるいは勲章

に似ていると思いました。同じ魚、ヒトなのに、貼られるラベルが変わるという意味で、です。ただし、「新語」から「死語」へとレッテルが変わるのは、1回きりなのが普通です。また、「出世魚、あるいは勲章」とは、向かう方向が正反対なので、「出世魚」という

より、「左遷魚」か「降格魚」、また「勲章」というよりは「前科」（※ここで不快な思いをいだかれた方に対し、お詫び申し上げます）か、「(人生における) 汚点」と言うべきでしょうか？

新語にしろ、勲章にしろ、汚点にしろ、何かの形で残ります。1回きりの出来事であっても、ちゃんと覚えている人たちがいて、のちのち、どこかで後ろ指さされる事態は免れそうもありません。その残ったものを、

名誉と考えるか、あるいは恥と考えるか

は、人それぞれでしょう。

また、いったん「死語」となった語が、「あの人は今」の乗りで、回顧される、あるいは捜し出されたことが契機となり、再び脚光を浴びる＝再ブレイクする、なんてことがあるかもしれません。現に、「蟹工船」（カニコー）、「これでいいのだ」というリバイバルもありました。

当ブログでは、「表象の働き（※Aの代わりに「Aでないもの」を用いる）こと」を、主要なテーマとしています。その親玉みたいなものが、「言語」と「貨幣＝お金」です。きょうは、そのうちの「言語」をテーマにしています。

上で定義した「新語」と「死語」について、考えていることを、こうして書きつづりながらも、あらためて、「言語＝言葉」の持つパワーの恐ろしさ、しぶとさ、しつこさに驚いています。辟易（へきえき）を乗り越えて、感心してしまいます。

で、当然のことながら「新語」や「死語」とは言葉ですよね。その言葉が、ある言葉を指す事態となるのです。去年の例で言えば、「新語・流行語」と呼ばれた「アラフォー」と「グ〜！」が、既に「死語」と呼ばれるようになりつつあるのです。

比喩的に言えば、ヒトが「あるラベル＝語」に「別のラベル＝語」を貼る、とも言えます。上で述べた「表象の働き（＝Aの代わりに「Aでないもの」を用いること）」の一種です。例を挙げると、

「それ、どういう意味？ ふーん」（＝新語の登場という、流通・普及と差別の始まりの瞬間）

そして、

「そんなの死語だよ」（＝新語・流行語から死語への移行という、消滅・破棄と差別の始まりの瞬間）

という具合に、ラベル（＝言葉・語）に別のラベル（＝言葉・語）が貼られます。新語が生まれても、死語と呼ばれるようになっても、どちらの場合にも差別が伴います。

極論ですが、どうやらヒトは差別なしには生きられないようなのです。

*

ここで飛躍します。

ある言葉を口にすると、「それは右寄りの考え方だ」とか、逆に「それは左寄りの考え方だ」と頭ごなしにラベルを貼られる場合があります。言葉が言葉に貼り付く。ラベルがラベルに貼り付く。これって、言葉同士の共食いですよ（※比喩です。比喩の使用もラベルを貼ることです）。怖いです、言葉が他の言葉を食べちゃう、咬んじゃう、しゃぶっちゃう、のですから。獰猛で、貪欲で、無慈悲というほか、ないじゃないですか。似ているものがあるとすれば、トラでもピラニアでもなく、ヒトです。

ヒトは、共食いをする。

怖いです。あまり、自覚していないところが、なお、怖いです。

いや、ヒトは、共食いなんかしない。

そう、お思いになった方、グローバルなレベルでの経済的格差を思い浮かべてください。本当に、共食いしていませんか？

他のおおぜいの貧しきヒトたちの犠牲のうえに、豪奢（ごうしゃ）に暮らしている少数のヒトたちと、そこそこに暮らしている多数のヒトたちが、いませんか？ 境遇こそ違っても、みんなヒトです。それにもかかわらず、大きな差がある。

別に、お説教のつもりで申し上げているわけではありません。自分を含めての、自戒の念です。自分のことは棚に上げての、世相批判などはしていないつもりです。自分を真正面に据えての、懺悔（ざんげ）のつもりです。そもそもこのブログの開設者には、ひとさまにお説教できるような資格はありません。「うつとの共生」なんて格好を付けながら、親の年金にたかっているダニ（※ダニさん、ごめんなさい）なんですから。ですので、この部分は、聞き（いや、読み）流しただいて、かまいません。念のため、申し添えます。

ところで、さきほどの、

「それ、どういう意味？ ふーん」

という、「新語の登場という、流通・普及と差別の始まりの瞬間」について、ちょっとこだわってみます。こういう瞬間には、ワカモノは、さすがに、「それ、新語？」などと無粋な文句は口にしません。言えば、仲間から笑われ、軽蔑されます。なぜだと、お思いになりますか？

これは内緒の話で、大きな声では言えないのですが、

実は、「新語」っていう言葉は、「死語」なんです。

若いヒト同士の会話を盗み聞きしていて「新語」って言葉が口にされるのを聞いたこ

と、ありますか？冒頭に紹介した、高校生の言葉は、オトナたちの愚行をダシにした場合の、例外です。ワカモノが、「新語」を自分の「無知」に結びつけて用いることは、たぶん、ないと思います。

ですから、「新語とは死語である」の「死語」は「禁句」とも言い換えることができます。「死語」も「禁句」も、口にすれば、仲間たちから寄ってたかって、「差別」される言葉なのです。

「それって、新語？」などと口にすると、自分の「無知＝流行遅れ」をあからさまに、さらけ出すことになります。仲間から笑われて、最悪の場合にはイジメに遭います。というのは、「新語」という言葉自体が、「死語」だからです。「禁句」なんです。はい、そうなんです。内緒ですよ。いずれにせよ、上に挙げた「それ、どういう意味？ ふーん」(＝実は、「それって、新語?」)と誰かが言い、それと同時に差別が始まる瞬間の緊張感を、想像してみてください。

ひとつ間違えば、イジメと差別を招き寄せる、危機をはらんだ緊張の一瞬です。「それ、どういう意味？」と口にしたとき、おそらく唇はかすかに震えているはずですよ。こころなし、語気も弱いでしょう。それに続く、

「ふーん」

の、ふかーい含蓄を味わってください。

どうして、こんなささいなことに、こだわるのかと申しますと、「言語と差別」という、自分にとっては非常に興味深く大きな問題とかかわっているからです。こういう微妙な話なので、大きな声では言えないのです。内緒なのです。まあ、普通は、どうでもいいことなんですけど……。いつか、「言語とタブー」というテーマで、このブログに詳しいことを書きたいと思っています。

*

以上の整理のために、

ここで、ちょっと算数をしてみます。引き算です。

$$\text{新語} (\text{※しんご} = \text{shingo}) - \text{死語} (\text{※しご} = \text{shigo}) = n = \text{ん}$$

ん？

新語にあって、死語にないものは、「ん？」なのです。省略せずに言うと、「ん？ それ、どういう意味？」です。

もう1つ、引き算をしてみます。

$$\text{死語} (\text{※しご}) - \text{新語} (\text{しんご}) = -n = (\text{マイナスなので上下ひっくり返して}) u = \text{う}$$

う

意味不明ですねー。困りました。

う？ う！ うっ？ うっ！ う。うっ。

こう書いても、事態は、依然として改善しません。きっと、どこかで計算を間違えたのでしょうか。計算式自体に、誤りはないと思うのですが.....。

もう1度、計算してみます。

$$\text{死語} (\text{※しご} = \text{shigo}) - \text{新語} (\text{※しんご} = \text{shingo}) = -n = u = \text{U}$$

U

解けました！ うれしいです。ここで、思いきり目を細めて笑顔をつくり、歯をむき出して、スマイルしてみてください。恥ずかしがらずに、はい、チーズ！

できましたか？

それです！

ニッコリした時の、その口の形。つまり、

U = (笑)

だった、のです。式に誤りは、ありませんでした。

では、清書します。

死語（しご）－ 新語（しんご）＝（笑）

死語にあって、新語にないものは、（笑）なのです。死語（※もう、使われなくなった「新語」（＝元「新語」）を、使うと笑われるのです（※「出世魚」ではなく「降格魚」、「勲章」ではなく「前科」のイメージを思い出してください）。苦笑、爆笑、失笑、嘲笑……なんでもいいです。とにかく、笑いの対象にされるのです。

真打昇進のあべこべ、角番大関の陥落（＝降格）

笑いは、むごいですよね。とりわけ、嘲笑は。こういう、差別って、嫌です。でも、ヒ

トである限り、仕方ないみたいです。言葉を使うって、「差別」することなのです。

「おい、聞いた？ いま、あのオヤジ、『何も言えねー』って言ったぜ」

「やだ、いま、あのオバサン、『グ〜！』って言った」

あとは、(笑)というわけです。

*

このブログでは、世の中の言葉の推移については、かなり寛容というか、柔軟というか、どーでもいいというか、とにかく、「異質な」あるいは「異形（いぎょう）の」言葉遣いや語に対しては、いっさい批判はしないという態度をとっています（※当ブログの「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 をご参照願います、面倒な方はパスしちゃってください）。

したがって、新語を吐こうと、死語を吐こうと、はたまた、新語を批判しようと、死語を笑おうと、その人の自由だと考えております。

いつの世も、ヒトはこんなふう生きてきたらしい。自分と異質な者と直面すると、不安感を覚え、ネガティブな反応を示す。どうやら、これはヒトの習性のようなのです。こうした事態が改まることを、期待するほうが的外れなのかもしれません。

マッコウクジラは、陸上では棲息（せいそく）できません。ホタルイカに、ノコギリヤシを与えても食べないでしょう（※たぶん、ですが）。それと同じです。言語という表象に関してのヒトの習性＝性（さが）は、もはや生理的、いや、生物学的な域にまで達しているのではないかと、思われます。

逆戻りも、改善も、なし、です。

だから (※いや、そこで、かな?)、

このブログでは、「新語」も「死語」も非難してはいません。せいぜい、

「差別って、イヤーだな」

とつぶやくのが、せめてもの抵抗です。とはいえ、はっきりしていることは、あくまでも、

敵は、「差別＝差異」の根底にある「表象の働き」(※Aの代わりに「Aでないもの」を用いる) ことだ

なのです。念のために、最後に言い添えておきます。

*

くだらとした、この文章にお付き合いくださった方、心よりお礼申し上げます。

09.01.15 「ん」の不思議

◆「ん」の不思議

2009-01-15 10:36:35 | Weblog

きのうの記事の続きです。もう、「う」「ん」ざり、なされた方も、いらっしゃることと
思います。ごめんなさい。悪気はないのです。本気なんです。で、きょうは不思議な話

をしたいと思います。専門家の方なら、

「そんなこと、もう解決済み。不思議でも謎でもなんでもない」

で、おしまいになる話かもしれません。ただ、素人の自分には不思議でならないことなので、やっぱり書きます。

単純なことなのです。実に、単純。

ノウ、ノン、ナイン、ニェット、ノ、ノ

英、仏、独、露、西、伊

ほかにも、あるらしいのですが、専門家でないので分かりません。勉強嫌いなうえに、無精者なので、図書館まで出かけて調べるとか、グーグルで数時間かけて検索しまくるとか、そんな元気がありません。とりあえず、今、知っていることだけを頼りに書きます。

「ほら、やっぱしね。そんなことだろう、と思った。今、あんたの言おうとしていること、学会（※学問研究のほうの学会です、念のため）では常識よ」

とおっしゃる方がいても、無理はありません。

何しろ、英と仏は海峡で隔たれているだけ、仏を中心に独と西と伊は陸続きだし、英仏独西伊と露との間には、露や伊の親戚がいくつもある。みんな、親類同士か、兄弟姉妹の関係にある。それに、昔々には羅や希があった。

ちょっと暴走し始めたので、注を付けさせてください。

※西＝スペイン（※語）、伊＝イタリア（※語）、羅＝ラテン語（※ローマ帝国の言語）、
希＝古代ギリシア（※語）（そんなこと知ってるわい、とおっしゃった方、失礼！）

で、ヨーロッパの言語が「みなきょうだい」であることを考えると、不思議ではないわけ
です。ただし、フィンランド語やハンガリー語やバスク語はきょうだいではないそう
ですけど、詳しいことは知りません。とにかく、ヨーロッパの諸言語は大雑把に言うな
ら方言みたいなものですから、似たところや共通点があっても全然不思議じゃない、と
いうことです。

*

印欧祖語、インドヨーロッパ語族、サンスクリット語、比較言語学――

言葉だけですが、何となく覚えています。でも、その内容や、からくりや、手法につ
いては分かりません。

ソシュール、バンヴェニスト、あるいはチョムスキー（※チョムスキーは、ここでは、
ちょっと場違いかな？）――

学生時代によく聞いた名前です。読もうと思いましたが、難しそうなので、やめまし
た。生意気なことを言いますが、まだバルトやラカンやデリダのほうが、肌に合ってい
たのです。そんなことは、どうでもいいですね。話を戻します。要するに、

親戚だから、似ていて当然

ということでしたよね。そこだけは、思い出しました。うっすらと、分かりかけました。

ところで、上で、中と韓（※朝、ハ）が出て来ないことは、まことに恥ずかしい、と感
じております。この国に陸上の国境はないにしても（※ここでクレームをつけないでく
ださい、国際政治の話は苦手なんです）、とにかく隣国なんですから。

*

で、自分が不思議だと思うのは、上に書いた「いいえ」に相当する各国の言葉たちの共通項である「n = N = ん = ン」のことだけでは、ないのです。

う「ん」にゃ—— ん (※大和言葉系)

所得税を払って「な」い—— n (※大和言葉系)

職が「無」い—— n (※大和言葉系)

裕福であるか「否」かを問わず—— n (※大和言葉系)

ネット社会、「否」、世間一般においても—— n (※大和言葉系)

「有」「無」を言わせず、彼女の手を取り—— う = u (※漢語系)、む = m (※漢語系)

政治には「無」関心—— む = m (※漢語系)

存在と「無」—— む = m (※漢語系)

古今未曾「有」の珍事—— う = u (※漢語系)

希「有」な愚行—— う = u (※漢語系)

【※こう並べてみると、何だかどれもこれもネガティブですね。ないない尽くし、なしく

ずしの死、ああ南無三宝、という感じです。とりあえず、「う = u」を別にして。とりあえず、の話ですけど。】

たった今、上で挙げた、各語句に続く「——」の右に記した、

「ん」「n」「む」「m」「う」「u」

ですけど、

不思議で仕方ないのは、それなんです。もちろん、「う」「ん」 = yes」 (= 肯定) とか、「ん」だ「ん」だ = yes」 (= 肯定) などの、例外があるのは承知しています。「ん」「n」はまだしも、「む」「m」 (= 否定) と「う」「u」 (= 肯定) を、同列に扱う無神経さと無教養さとずさんさ、についても、重々承知しております。でも、「無」の反対が「有 = 存在」とは、自分にとっては、どうてい思えないのです。

「ほら、やっぱりね。せいぜい、そんなことだろう、と思った。で、何が疑問なの？ 素人さん、偶然だよ。関係はっさい、なし。不思議も、なし。おしまい」

と言われたさいには、自分としては、「やっぱり、そうでしたか。恐れ入りました。いつか、図書館か、グーグルで確認してみます」と、引き下がるしかないわけです。そして、「まめに、こつこつ勉強していないから、自分はこんなことで不思議がるのだ。いつか、「消えてしまいたい指数」が、もっと低い時にでも、勉強してみよう」と、反省するしかないわけです。

*

でも、このブログで、

哲学がしたーい

表象の仕組みと闘うぞー

と、しこしこと、しこを踏み踏み、ひとり相撲をとっている身としては、やっぱり不思議でならない。だから、勉強はいつかするとして、きょうは、

とりあえず、

自分の頭と体で考えよう

というスタンスしかとれないわけです。

*

で、勝手に決めました。

「大問題であることが確実らしい日本語」にかかわる準備運動として、最も自分にとって身近な外国語である英語について、昔、お勉強したことのおさらいをしてみます。

no / no one / nobody / nothing / nowhere / none / nay / not / nor / neither / never / null / naught / negation / negative

ふーうっ、という感じです。これ以上あることは、確実ですが、きょうはやめておきます。これで十分だと思います。やっぱり、negative で落ち着いたみたいです。全部、「ネガティブ」、「否定的」ということです。

n が、否定的な意味の印（しるし）だ、素（もと）だ、

ということは、英、仏、独、露、西、伊だけでなく、その周辺から、はるか遠くにあるイラン、インドにまで達する「現象」らしい。さらに言うなら、

n ⊆ 2 = m

m も、否定的な意味の印だ、素だ（※たぶんですけど）

という駄洒落か嘘みたいな話も、全面的に否定するわけにはいかないらしい。

では、

n ⊆ (-1) = (上下ひっくり返して) u

u も、否定的な意味の印だ、素だ

ということが、あったとしても不思議ではないかもしれない。あくまで、「かも」「たぶん」ですが。

「ほらほら、とちくるってきたぞー」

今聞こえたのは、幻聴ですか？ 難聴、耳鳴りに加えて、幻聴ですか？ 困りました。でも、いいんです。どうせ、狂ったサルなんですから。と、言い聞かせるほかしかない。

ここで、「大問題であることが確実らしい日本語」にちょっかいを出してみましよう。戯れてみましよう。言葉の奥ではなく、言の葉（＝ことのは）の表面を手でなぞってみる。音としての言葉を、口というか舌を使って、もてあそんでみる。言葉の身ぶりや表情や動作に寄り添い模倣してみる。

*

以上は、このブログを開設して間もないころの記事に書いた「決意」です。それを、こ

こでも実践してみたいのです。参考文献、引用、権威、正確さ、実証。そうしたことは、当ブログではふさわしくありません。というか、できません。

ネット上では比較的「新参者」であるブログというものについてはよく知りませんが、そもそも初期のインターネットは、数々の大学や研究所をつなぐ学問の交流の「場＝網＝ネット」として、発達してきたと記憶しています。

もとをたどれば、軍事目的。確かにそうだったのでしょうが、現在では、この惑星で極度に貧しい生活を送っている、おびたしい人たちを除けば、誰もがネットに接続し、いわゆる「知」と「情報」を手に入れ、また発信できる状況が実現しています。

うつせみ＝現人（＝生きているヒト）の端くれである、このブログの開設者は、いわば「うつせみ＝空蟬（＝せみのぬけがら）」です。うつお＝空（＝からっぽの空間）です。そのからっぽの箱の中で、うつろな言葉という音（ね）を響かせてみたい。音は消え去る。それでいい。このブログは、いわばお墓。そこには誰もいない、空のお墓なのです。

あなた（彼方＝over there）にいる、あなた（貴方＝you）に音が届けば、それで幸せです。それが、ごく短い間であっても幸せです。なぜか、センチメンタルになってしまいました。さっきの幻聴（※たぶん）の罵倒のせいでしょう。へこみやすいのです。

うつせみの あなたにおくる うつおのね

*

で、

不思議

に、話を戻します。遠い記憶をたどります。「あなた＝彼方」に思いをはせます。

中学生のころに聞いた話です。国語か社会の授業中に、教師が話してくれました。この国のどこかは忘れましたが、とにかく、日本のある地方を訪れたイスラエルの人が、その地方の方言で歌われている民謡を聞いて、ヘブライ語の詩として意味がとれることに、たいそう驚いた、とか。本当なら不思議です。

次は、高校生のころに聞いた話です。上でも触れたサンスクリット語のことです。この辺の知識があいまいなので、不正確な話になるのを承知のうえで、あえて書きます。サンスクリット語は、仏教のお寺などで見かける梵字で表記されることから分かるように、仏教と大いに関係があるらしい。日本の仏教用語で「アカ」というのは「水」のこと。それが、サンスクリット語から来ている、とか。

考えてもみてください。サンスクリット語が使われていた土地、つまり古代インドを経由して、日本語の「アカ」が、はるかかなたの島国の言語である、英語の「アクア (aqua) = 水に関する語」とつながるといいます。不思議です。

もう1つ、思い出しました。墓地に立ち並ぶ卒塔婆 (そとうば)。その、「そとうば」の「とう = 塔」は、英語の「tower = タワー = 塔」につながり、その語頭にある tow は、「とう」と読めないこともない。大学生になって、エッフェル塔を仏語 (※フランス語です、仏教語ではありません、念のため) で「la tour Eiffel = ラ・トゥー・エッフェル」だと知った時にも、高校時代のあの授業を思い出しました。不思議です。

「う」ー「ん」。今、思い出しても、唸らずにはられません。

ヘブライ語については、未だ不明。サンスクリット語については、謎は実証済みらしいので、「そうか、別に不思議ではないのか」と納得できるような気がします。そうはいうものの、今もなお、素直に言って、

不思議です。

*

さて、「大問題」にとりかかりましょう。

上で書いた、「ん」「n」「む」「m」「う」「u」です。

「な」「ん」で、こ「う」「な」る「の」、でしょうか？

根拠など、「な」い。実証も、でき「な」い。

単なる「accident = 偶然 = アクシデント = 事故」だ。

果たして、そうなのか？ それとも、何らかの学術的な説や法則があるのか？ あったとして、それは既に定説なのか？

それで思いしましたが、日本語とタミル語。タミル語って、インド南部、スリランカの言語ですよ！ 隣の国とは違うのですよ。その2つの言語の驚くべき類似性を示し、あとは実証するだけのところで、世を去った学者がいました。学生時代に、その学者の授業を受けたことがあるので、記憶違いではないはず。Oh, no. オー・ノー（※ごめんなさい、大野晋先生）。次に、「すすむ」ことにします。

タミル語でも、「ん」「n」「む」「m」「う」「u」についての類似性があったのかは、全然知りません。

ただ、言葉って不思議。おもしろい。そう、思います。

*

で、無精者である、当ブログの開設者としては、ここで、先ほど述べた言葉たちとの戯れを実践してみます。よろしければ、ご一緒にどうぞ。

「ん = n」と口にしてみてください。声らしきものが出ないかもしれませんが、口の中

の状態は、感知できると思います。舌と前方の口蓋（こうがい）がぴったりくっつきま
すよね。両唇は、離れたままで、「ん = n」。唇を閉じると「m」になるので、注意して
ください。

ナポコフの書いた『ロリータ』の冒頭を思い出します。何だか、すごくエロいことを
しているような気分です（※実際、そうなのかもしれない）。「ん = n」は、ご承知のよ
うに子音です。だから、五十音図では仲間外れ扱いにされているのですね。子音だけで、
母音がないから、はみっ子。

次に、

「む = m」です。「mu」と母音を添えないでください。子音だけ。それが、音の素（も
と）なんですから。意味の素（もと）なんですから。味の素（もと）なんですから。上で
説明したように、口を閉じて、上と下の両唇がしっかりと、むすばれた状態になります
よね。次に、

「う = u」。思いきり、口をとがらせましょう。では、ご一緒に、

ん・む・う。

このさい、この行為の意味、つまり、今、なぜ、自分がこんなことをしているのか、な
んて考えるのは、やめましょう。

ん・む・う

一句、浮かびました。

部屋寒しひとり遊びの にらめっこ

「無」から「有 = 意味 = 言葉」が生じる瞬間。m から u が生じる瞬間。m と u は反

意語ではなく、表裏一体の関係にある。つまり、

自分が「尻尾の無いサル」から、「狂ったサル」＝「ヒト」になっていくさまを、模倣し、演じているような気がします。あまりにも、出来すぎた話でしょう。「ガセだ。ヨタだ」と、お思いになるのは、無理ありません。ですので、お遊びだと思って軽く考えましょう。

「軽く考える、だって？「狂ったサル」どころか、「狂ったヒト」にはついていけない」

と「あなた」からの声が聞こえたのは、錯覚でしょうか？ 幻聴でしょうか？ そうですか、やはり、こういうのって、あやういですか？

*

いずれにせよ、

不思議

だけが残ります。念のために言っておきますが、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

ん

という1字をめぐって長たらしく書かれた、この文章にここまでお付き合いくださった方、それだけで涙が出そうになるほど嬉しいです。どうも、ありがとうございました。

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

◆あなたなら、どうしますか？

2009-01-16 11:16:57 | Weblog

たとえば、電車で通勤途中のある男性が、乗り換えの駅に着き、プラットフォームに降り立つ。突然、見知らぬ女性が男性の手を取り、「この人、痴漢でーす！」と叫ぶ。数時間後、男性は最寄りの警察署で逮捕される。

たとえば、ある女性がデパートの化粧品売り場で口紅を選んでいる。気に入ったものがないため、そのフロアーから上のフロアーへとエスカレーターで移動する。エスカレーターを降り、服の売り場に向かおうとした瞬間、「お客様、まことに失礼ではございますが、そのバッグの中を拝見してもよろしいでしょうか？」と、呼び止められる。女性は手に提げたマイバッグに、口紅が転がりこんだことを知る。数時間後、その女性は最寄りの警察署にいる。

たとえば、朝起きたばかりの耳に、ドアをノックする音が聞こえる。賃貸マンションに住む、その社員がドアホールから外を覗くと、数人の黒っぽい色のスーツを着た男たちが立っている。ドアホン越しにやり取りをする。「〇〇さんですね、〇〇署の者です」。「な、何ですか？」念のためにチェーンをかけたまま、ドアを開けると、外にいる男たちの1人が警察手帳を示したあと、裁判所からの捜索令状を差し出す。ん？ 何だ、これ？ 心当たりは、まったくない。

*

もし、上の3つの例のうち、どれかの事態が自分の身に降りかかったとしたら、

あなたなら、どうしますか？

ところで、すべての人が絶対に逃れられないもの、免れないものって、何でしょう？このブログでは、これまでに言語や貨幣=お金などについて、書いてきました。誰もが、言語とお金から逃れることはできません。無縁であるわけにはまいりません。ある特殊な境遇に置かれた人は別ですけどー。微妙な問題です。ここでは、疾患、障害、地位、監禁、幽閉、拘束、服役.....と、つぶやくだけにしておきます。

きょう、書きたいと思っていることは、言語でも貨幣でもなく、「法」です。このブログでは、「法」を、掟、法律、風習、習慣、ルール、マナーなどを含む、広い意味のものとして解釈しています。きょうは、特に「法律」に的を絞ります。的を絞ったとはいえ、これだけでも、非常に大きな問題です。法律を専門に勉強したことのない自分が、このテーマで何を書けるのか、心もとなさを覚えます。

これまで、専門家でもないのに、やれ言語だの貨幣だのと、くだらないオヤジギャグを飛ばしながら自分なりにやってきたのですから、きょうもその調子でやってみます。

「どうしてこいつは、いつもブログで、こんなことばかり、ぐじゃぐじゃやってるんだ？」

とお思いの方もいらっしゃるかと思います。というよりも、ほとんどの方が、そうお思いでしょう。どうしてなのかと申しますと、言語も貨幣も、きょう、これからテーマにしようとする法律も、他人事ではないからです。ヒトとして生まれた以上、誰も避けたり無視したりできるものでは、決してない、からです。

諸般の事情があって、自分は暇です。無為徒食の身です。

そうならば、手持ちの頭と体を使って、ああでもない、こうでもないと考え、そうやって考えたことを、ブログの記事として書いても、罰（ばち）は当たらないのではないかと、考えが甘かった。身にしみて分かったことがあります。言語や貨幣などの仕組みとからくり、言い換えると「表象の働き」（=Aの代わりに「Aではないもの」を用いること）について考えると、

罰が当たる

のです。嘘ではありません。このブログを書いている「一匹の狂ったサル=ヒト」が、生きた証人です。罰については、いつか書きます。

*

話を、戻しましょう。

六法全書というものがあります。かつて、小型のものを持っていたことがありますが、今は手元にありません。憲法を除き、法律はどんどん変わりますから、古いものを大切に持っていたても、使い道は限定されます。とにかく、ヒトにまつわるありとあらゆることについて書いてあります。百科事典並み、いや、それ以上かもしれません。

ヒトが生まれて死ぬまで、そして、死んだ後のことについてまで、詳細に記述されているさまは、「そうか、狂ったサルはここまで来たのか？ = (ここまで、頭に来たのか?)」(※「頭に来る」とは、ここでは go crazy = go mad の意味のほうです、念のため)と、思わざるを得ない。壮観です。

この国に限ったことではないでしょう。大陸法系であれ、コモン・ロー系であれ、イスラム法であれ——素人なのであとは続きませんが——人同士の関係をめぐる、ありとあらゆる事象が、言葉という形態で体系化され集成されているのです。

*

かなり前のことですが、小説家を目指したことがあります。

最初は、「純文学」。これは、ちまたで口にされる意味での「死語」に当たるかもしれませんが(※現在もなお、一生懸命に「純文学」されている方、ごめんなさい)。とある新入文学賞の最終候補5作の中に残ったこともありましたが、とある大都市の現知事(※当時の選考委員)に、けちよんけちよんにけなされ、落とされました。今はご高齢なが

らも、出家者兼現役作家として、活躍されている、別の選考委員の方からは、励ましのお言葉を頂戴しましたが.....。

【※「とある大都市の現知事」とありますが、この記事は2009年1月16日に書かれたものです。「現知事」は「前知事」あるいは「元知事」に訂正します。】

で、掌編と呼ばれる、ごく短い小説を対象とした賞の月間優秀作になったのが、ピークでしょうか。あとは、二次落ち、一次落ち、下読み落ち。悪あがきに、大衆小説（※この言葉も、もう死語（※死後）ですか？ いや、死んでなんかいませんよね。出世魚のごとく、現在はエンターテインメント小説と名を変えたようです）とか、ミステリーを書いて、また二次落ち、一次落ち、下読み落ち。いつの間にか書かなく（※いや、書けなく）になりました。いやはや、悔しさを思い起こし、つい要らぬことを、ねちねちと書いてしまいました。自己嫌悪。

*

話を、戻しましょう（※またか！ 何度戻すんだ！）。

で、ミステリーを書こうとして、困ったことがありました。人の殺し方は素人でも何とか、想像できるのですが（※実際、殺人事件の加害者はたいてい殺しのアマです）、その殺した後のことが、書けないのです（※殺しの後は、殺してしまったアマはうろたえるか逃げ、殺しや殺した人について調べるのはプロです）。

もっとも、クライム・ノベル、犯罪小説、サスペンスを含む、「広義のミステリー」という、賞の募集要項の言葉に素直に従うことで、そうした面倒くさいことを避ける方法があります。殺すまでの経緯や、殺す課程だけに集中すればいいのですから。

でも、苦手です。人を殺（あや）めるだけでは、良心がとがめる。なんて、格好を付けるわけではありませんが、後味が悪い。夢見が悪い。というわけで、警察、警察組織、警察官の日常生活、捜査法、法律、法医学（※検屍（けんし）や検死（けんし）や検視（けんし）も含みます）、検察、裁判所.....について、お勉強をしました。当時は、インターネットの黎明期（れいめいき）で、日本語で読めるウェブサイトは貧弱そのものでした。つまり、

使えない。

だから、図書館をおおいに利用しました。で、分かったことがありました。大発見でした。

*

すべては、ハンコのためにある

です。

図書館のしーんとした閲覧室の席で、ひっくりかえりそうになるほど驚きました。

何しろ、警察官にしろ、検察官にしろ、裁判官にしろ、ペーパーワークが半端じゃないのです。

何かがあったら、書類にする。つまり、文字にする。そして、然るべき上の人から、ハンコをもらう。こればっかし、なのです。

いつ、捜査するの？ テレビドラマみたいに、警察官は、歩き回って、暇じゃなくて、靴一足をつぶすことなんて、本当にあるの？

と、疑問の念を抱きました。もちろん、実際には靴を履きつぶすほどのご苦労があることは、薄々知っております（おまわりさん、刑事さん、職業とはいえ、いつもご苦労さまです）。それにしても、です。書類作りが多い。並みの多さではない（※ところで、キャリアさん、最終的には、あなたたちが、ハンコをポンポン押すのですか？ そうでしたら、あなたがたの、おててにだけ、ご苦労さま）。

*

<司法の目的は、人を逮捕することではない。まして、処罰することでもない。書類を作成することだ。>

思い出しました。懐かしーい、です。例の、ながーいセンテンスを書く、身長180センチ強の、文芸批評家兼映画批評家が、かつて何かに、そういう意味のことを書いていました（※万が一、この人について、気になる方がいらっしゃいましたら、当ブログのバックナンバー「あえて、その名は挙げない」2008-12-24、「遠い所、遠い国」2008-12-25、「読めないけど分かる言葉」2009-01-09をお読みください）。詳しいことは覚えていませんが、大筋はそういう趣旨だったと記憶しております。

*

大切なのは、身柄の拘束や刑の執行ではなく、書類作り。=大切なのは、ヒトじゃなくて、紙。

言えてます、よね。慧眼（けいがん）に感服いたします。さすが、元・総長（※暴走族の頭ではありませんよ、ウカジ氏ではありません、念のため、ちなみにウカジ氏の身長は190センチだそうです、ハウ・トール・ヒー・イズ！ =ケル・グロン！ =でっけえー！）。

やっぱり、自分はその長身の人の呪縛が解けていない。マインドコントロールを解かなければ――。いや、解く必要はない。

だって、気持ちいいんだもん。言葉の持つ官能性に、ひたすら寄り添う。すりすり、しちゃう――。

失礼いたしました。第三者の視点に立てば、まことに気持ちの悪い、本音を書いてしまいました（※オエーっと、不快な気分陥られた方にお詫び申し上げます）。とはいえ、こうした言葉に対する接し方も、当ブログのスタンスなのです。本気です。

この辺で、ここまで書いたことを整理して、まとめます。

(1) すべては、ハンコのためにある

(2) <司法の目的は、(中略)書類を作成することだ。> by 元・総長

以上に、尽きます。

*

ん？

ですか？ じゃあ、もう少し詳しく述べますと、公務員＝役人・官僚にとって、なによりも大切なことは、国民への奉仕（※シビル・サーバント＝公僕（※これも死語？）としての義務）などでは毛頭なく、

自分に与えられた書類作りと、作成した書類に上司からのハンコをもらうこと、

なのです。極論を言えば、大部分の警察官にとって（※一部、例外はいます）、重要なのは、現場ではなく、デスクワークなのです。

*

話は変わりますが、ハンコ注射ってありましたよね？ スタンプ注射とも言うらしいです。予防接種ですよ。何の予防かは、忘れまして。とにかく、跡＝痕跡（こんせき）が残ります。

種痘（しゅとう）というのも、ありましたよね。何の予防か分からないままに、幼い

ころに、

ん？ ギャー！！

と泣いて、打たれたことだけは、覚えています。虎馬というやつになって、今も残っています。夜中に、タイガーとホースに襲われる夢を見て、飛び起きることが何度あるとか！ おふざけが、すぎました。ごめんなさい。トラウマに苦しんでいる方、ごめんなさい。あっ、自分も、だ。

ハンコ注射や種痘については、きっとグーグルなどで調べれば、詳しいことは分かるので、無精者で無気力な自分としては、とりあえず、手持ちの知識と記憶で間に合わせながら書き進めます。で、肝心なことだけを以下に述べます。

*

ミステリーを書くために、法医学に関する本を吐き気をこらえながら、読んでいたとき、こんなことを知りました。身元不明の遺体を検死ないし解剖する場合には、腕にある痕跡、つまりハンコ注射や種痘の跡で、その遺体の年齢が推定できる。もっと詳しく言うと、注射や種痘の痕跡の有無や形が、ある一定の期間ごとに異なっていた。そう言えば、そうですね。心当たりがあります。

あるとき、年下の方と、一緒にお風呂に入る機会がありまして（※深読みなさらないでください）、ある肉体労働（※これも、深読みなさらないでください）をした後のことです。左上腕の肩に近い部分にある傷跡を見比べて、その形の違いが話題になりました。結局は、「年齢（とし）が違うね（笑）」で、話が落ち着きました。

で、さきほどの図書館での驚愕（きょうがく）事件のことですが、感心すると同時に、ぞーっとしました。今になって思うのは、次のようなことです。

国家は、国民に「烙印（らくいん）」＝ハンコを押している。国民総背番号制、犯罪履歴、叙勲・褒章（※こちらには複数のランクがありますね）、基礎年金番号制度、運転免許証、パスポート、住基ネット（＝住民票コード）、納税の際の書類に打たれた番号.....

これらは、記号であったり、数字であったりする。つまり、コンピューターにとって、使い勝手が極めてよろしい。その情報処理のしやすさが、よく考えると恐ろしい。ただ、数字や記号は言語に似て「比喩＝たとえ」だという感じが、まだある。つまり、抽象的で、つかみどころがない。実感がわからない。だからこそ、怖いのです。

でも、上腕の傷跡は、比喩ではない。烙印、文字通り、烙印＝ハンコである。一部の家畜に押される、痛々しい傷跡を思い浮かべてください。アウシュビッツやダッハウを連想する人がいても、責めることはできないと思います。

医学上の理由。健康福祉のためという大義。エンデミックやパンデミックを防ぐという、自治体レベル・国家レベルでの危機管理。国家の安全保障としての当然の措置、あるいは義務。そうした大義名分は、十分に承知したうえで、あえて、言いたいです。

ありがとうございます。ご苦労さま。でも、やっぱり、気味が悪い、

と。そう言わずには、いられません。

ハンコは怖い。

ハンコについては、もっと書きたいことがあります。「消えてしまいたい指数」が低ければ、あすにでも書きたいと思います。

*

で、冒頭に挙げた3つの恐ろしい、カフカ的狀況に戻ります。あれって、怖いですね。ある日、突然、自分が司直の手にゆだねられる事態に遭遇する。気持ちが、暗くなります。じゃあ、

カフカ、可もなく不可もなく、可不可、っていう、手垢の付いた、使い古しのダジャレを拝借して、景気付けしましょうか？

駄目ですか？ 元気が出ない？ ダジャレのせいで、よけいに落ちこみましたか？ ごめんなさい。いずれにせよ、あのような災難（※身に覚えがないなら立派な災難であり人災です、要するに冤罪です、警察も検察も裁判所も常に正しいわけではありません）が自分の身に降りかかったとしたら、

あなたなら、どうしますか？

あくまでも、反抗しますか？

いずれにせよ、

あなたは、ハンコに身をゆだねるしか、ありません。

なぜなら、

（「こういう深刻な話の最中に、ふざけるな！」という抗議の声が、既に頭の中で、ごんごん鳴っていますが、あえて書きます。大切なことなので――。）

引き算をしてみると、

反抗（はんこう）－ はんこ ＝ う ＝ u ＝ 有

だからです。

「有」＝「う」＝「ゆう」＝「あり」

ですよ。つまり、

「無」

の反対です。

「またかよ！ このバカタレ！」

いえ、本気です。とは言いながら、へこみやすい自分は、泣きそうになります。「う = u = 有」なんですよー（※もう、本泣き状態になりかけました）。なぜかは、きのうの記事をご覧ください。長いですから、最後のほうの「m から u が生じる」どうたらこうたら（※「う」「ん」「ぬ」「ん」、とも言います）と書いてある部分だけでも、よろしければ、お読み願います。とにかく、

反抗しちゃ、駄目

です。

ひとつ間違うと

「有」罪（※さきほどの引き算の結果です、念のため）

になってしまうんですよ。

あくまでも、「ハンコ」ポンポン = ペーパーワーク、に身をゆだねるしか、ないんです。誰も、逃れられないのです。罪を犯せば、判事も、ですよ（※この間、破廉恥な判事が裁かれましたね）。でも、大丈夫。「法曹界（ほうそうかい）」には、弁護士という味方（※強い味方という見方もありますが、本当かどうかは知りません、今のところ、お世話になったことがないので、これからも、ありませんように）もいますから。「ほう、そ

うかい」なんて駄洒落など言ってませんよー（※書いてはいますけど……）。

法廷という場で、正々堂々と「反抗」すればいいのです。そこへ行かないうちに「反抗」したんじゃ、別の罪で

「有」罪

にされてしまいます。公務執行妨害。そうなれば、向こうの思うつぼです。

*

で、話をさっきのことに戻します（※何度戻せば気が済むんだー！）。今、思い出したんですよー。うろ覚えですけど、ハンコ注射はBCG、傷跡が残る種痘や注射は痘瘡（ほうそう）＝痘瘡（とうそう）＝天然痘（てんねんとう）と関係があったらしい。「ほう、そう」かい、なんて、言ってませんよー。書いては、いますけど……（※何度もズルして、ごめんなさい）。とにかく、

ヒトは天然痘＝痘瘡との闘争（とうそう）に勝利し、撲滅した。

ですから、これは、

痘瘡－闘争＝とうそう－とうそう＝0（※引き算です）

つまり、差し引きゼロ＝ちゃら＝根絶。WHO万歳！で、誠にめでたいことだと思っております。

*

ここまで、辛抱強くお付き合いくださった方、心よりお礼申し上げます。

なお、文中で、さまざまな疾患や、その他微妙な問題に関する、言葉・用語を用いたことで、当方が思いもよらない不快な思いをされた方々に対し、深くお詫び申し上げます。

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

◆やっぱり、ハンコは偉い

2009-01-17 12:04:24 | Weblog

単純化すれば、

反抗＝犯行なので、ハンコに身をゆだねるしかない。

以上が、きのうの要約です。きょうは、きのうの続きです。

ハンコ。

手強い相手です。そもそも、ハンコは、なぜ存在するのでしょうか？ それは、表象だからです。では、何の表象なのでしょうか？ 法律の表象です。

その法律って、何なのでしょう？ 分かりません。素人の自分には、分かりません。手持ちの頭と体で考えるという、当ブログのスタンスで言葉をもてあそぶ。その過程で、ぽろりと何かがこぼれ落ちるかもしれない。さいころを振れば、何かの目が出る。それに期待するしかない。采（さい）は投げられた――というやつです。要するに、ばくちですね。賭ける、しかない。

昔々、マルメロに似た名のフランスの詩人が、さいころを振るという身ぶりをめぐって、ものすごい実験的な詩を書きました。若き日の自分は、うちのめされました。言語を始めとする、表象にかかわることは、ある種のばくち、または偶然に挑むことである。こんなギャンブルを、マジにやろうとすれば、身の破滅に至ります。罰（ばち）があたります。罰（ばつ）を受けることもあります。

万が一、この「ばくち」に興味のある方は、グーグルなどで、「マルメロ」じゃなくて「マラルメ」を検索してみてください。

ただし、マラルメには深入りなさらないように、くれぐれもご注意ください。かなり「あやうい」ことになります。今、その名を出してしまったことを後悔しています。マルメロをペロペロするか、マシュマロをメロメロするか、パタリロをヨミヨミするくらいで、とどめておいてください。

*

話を戻します。法律とは何でしょう？ 他人事ではありません。ヒトは、生まれてから死ぬまで、いや生まれる前から死んだ後も、法律と無縁ではられないのです。婚姻、結婚、（中略）、死亡、埋葬、相続――すべてに届けが必要です。どこに？ イヤーな言葉ですが、「お上（かみ）」にです。

お上（※かみ）に紙（※かみ）を届けなければ、へたをすると、罰（※「ばち」ではなく「ばつ」です、念のため）を受けます。お上に紙を届けるさいには、神様が相手ではありませんから、罰（※ばち）は当たらないと思います。

「何と罰あたりな、オヤジギャグ！」と、お怒りの方、エクスキューズ・ミー、フォギブ・ミー、パードン・ミー。自分は、神仏を信じてはおりません。そのことについては、いつか書きます。ですので、きょうはご勘弁ください。

ただ、罰（※ばち）と罰（※ばつ）の違いだけは、考えておきたいです。罰（※ばち）は、神仏がヒトに対して与えるものです。一方、罰（※ばつ）は、原則として、ヒトが

ヒトに与えるものです。そのよりどころになるのが、法律という途方もない「表象の働き＝メカニズム」なのです。

簡単に言えば、「△△△してはならない。さもないと、CECECEするぞ」

と脅すのが、ヒト以外の存在か、それともヒトかの違いです。法律はヒトが作ったものです（※そうではないと主張する、法律＝経典だとする宗教もありますが、ここでは扱いません、というか扱えません）。

それなのに、ヒトは、どこかで、何か、なぜか、どういうふうにか、勘違いをしてしまった節があります。

法律はヒトが作ったものだという前提に立つと、この国以外の多数の国々で法廷に宣誓用のバイブルがあるのが不思議に思えてきます。個人的な感想かもしれませんが。

また、この国でもそうですが、法廷で判事がお坊さんのような、いかめしい格好をし、ひな壇の上みたいな位置から、他の人たちを見下しているのも、不可思議に感じます。開廷前の映像などをテレビで見ていると、いかにも芝居じみていて、笑いがこみ上げそうになる時もあります。

あそこまでやらなくてもいいのに――。そんなふうに思います。この愚見をお読みになり、不快な気持ち、または怒りを覚えになった方、ごめんなさい。

*

どうやら、「ばち」と「ばつ」は、混同されているらしい。それとも、やはりつながっていると考えるべきなのでしょうか？ ここで、このブログ恒例の引き算をしてみます。

ばち - ばつ = ちつ？「ちっ」とも、分からない。

駄目でした。駄目だと分かっただけでも、ま、いっか。

ところで、ヒトが自分で勝手に築きあげたものによって、振りまわされる災難＝人災を、罰（※ばち）などと呼んで、

「ヒトに代わるもの」に責任を転嫁する

ヒトたちが、たくさんいます。卑怯です。仏教の言葉ですが、「自業自得」と心得るべきだと思います。もちろん、自分自身も含めてです。お説教をするつもりで、こんな大切なことは書けません。「自業自得」と悟るべきだ。心から、そう思います。

いずれにせよ、紙（＝届け＝書類）とハンコから逃れられない人生って、窮屈ですね。でも、くだらなく思えることに意地を張って反抗し、その結果として罰（※ばつ）を受けるなんて、ばつが悪いから、やっぱり仕方ないですね。少なくとも、この国を始めとする、いわゆる「法治国家」に住む以上は。

法治国家で、思い出しましたが、「無」国籍という、とても悲惨な目にあっている人たちが、この国にも少なからずいます。「m = む = 無」という否定を表す、意味の素（もと）は、残酷な面を持っています。無職、無教養、無報酬労働、無知、無縁仏、無医村、無念、無差別殺人、無差別攻撃、無一文、無慈悲……切りがありません。

全部、消してしまえ！ 全部、殺（あや）めてしまえ！ という、おたけびが「無」なのです。

で、「無国籍」という問題ですが、理由はさまざまで、ここでは深入りはしませんが、「無国籍である」ということさえ、法律の「牙（きば）」から逃れるわけにはいかない。相当地に気張（きば）らないと、「国外追放 = 退去強制 = 出国命令」（※この辺の知識はあいまいで、イコールで結ぶべきかどうかは、よく分かりません、ごめんなさい）という、恐ろしい目にあう。それだけは何となく分かります。残酷です。

無国籍を持ちだせば、「難民」に触れないわけにはまいりません。これも事情はさまざまです。ただ、この国でも、ほんの数十年前に「難民であること」を体験した大勢の人

たちがいました。みなさんの身の回りにも、いらっしゃるはずですよ。

第二次世界大戦直後には、中国大陸や、朝鮮半島や、旧ソ連や、東南アジア各国や南太平洋の島々などに取り残された、数多くの「難民＝棄民」が、必死でこの国に帰ろうとしていた。という動かすことのできない事実があります。決して、他人事ではないのです。

*

話を戻します（※たびたび戻してすみません）。

法律とは何でしょうか？「法律」については、いろいろな定義が可能でしょうが、とりあえず早く言えば、「権威」だと理解しております。「国家の権威」と言い換えても、それほど的外れではないのではないかと、とも思います。そうだとすれば、

やっぱり、ハンコは偉い（※もちろん、ここで問題にしているのは、「お上＝役人＝官僚＝権限を委譲されたはずの者＝実際には自分が偉いと思い込んでいる者」の押すハンコです）。

無力な市民は、そうつぶやくしかない。なぜなら、ハンコは「国家の権威」の「表象」だからです。

それが、ハンコが「偉そう」にしている理由です。「偉そう」は伝染します。まず、ボンボンとハンコを押すだけが仕事の役人や官僚に伝染します。要するに、

伝染るんです（＝うつるんです、と読みましょう、念のため）。

恐ろしい言葉が出てしまいました。

タミフル（or 民フル）なんかじゃ、太刀打ちできませんよ。吉田シゲルの孫も、役に

は立ちそうにありません。いくらマンガ好きであっても、です。戦車で踏みつぶすほかありません。いや、それでも無理でしょう。ただでさえ恐ろしい「表象の働き」（＝表象作用）が、うつるんです。

これ以上、ヒトにとって恐ろしいことがあるでしょうか？

*

ここで、脱線します。

役人・官僚の横柄さと怠惰ぶりは、昔も今も変わりません。毎日、新聞を読んでも、よく分かります。ウェーバー（あるいは、ヴェーバー）が、ちょっとだけ予言した通りです。悪しき官僚制、あるいは官僚制の弊害。

虎の威＝衣を借りる狐。国家の権威の威＝衣を借りる、やくにん。

だから、汚職が起こる。民間人は、やくにんからハンコを、ぺたんとしてもらいたい。民間人には、お金の威力くらいしか、借りる威＝衣はない。あるいは国会議員やその秘書に対し、やはりお金の威＝衣を借りて、頼みこみ、その威＝衣を借りるほかしかない。

衣。そうか、だから、法廷では、判事らがお坊さんの着る法衣（ほうえ）みたいな、おべべをまとっているのか。あれは、単なるコスプレじゃなかったんだ。謎が解けた。

法律。そういえば、「法」も「律」も、仏教と関係ありそうだ。あとで、広辞苑で調べてみよう。「ばち」と「ばつ」の謎も、解けるかもしれない。

*

で、やくにんへの悪態、に戻ります。書類作りの名手。法律をもてあそぶ、超テクニ

シャン。辻褃合わせの職人。オヤジギャグや駄洒落も真っ青な牽強附会（けんきょうふかい）のオーソリティー＝権威。

小役人もずる賢いが、キャリアと呼ばれる役人のすることは、実にえげつない。一言で言えば「省益命」、あるいは「自分と自分たちだけが良ければいい」。

この間、新聞で読んだのですが、馬鹿大臣や阿呆副大臣をごまかして、公文書の文言を捏造（ねつぞう）・改ざんする奴までいる。これって犯罪にならないんですか？ 見逃されて、いったんハンコが押されれば、効力を持ってしまふんですよ。発覚したところで、犯罪を犯罪にならなくする言葉いじりのテクニックくらい、もう自家薬籠中（じかやくろうちゅう）のものって言うわけですか？ おとがめなし、ですか？（※それとも、あの人って、ちゃんと処分されたの??）

「国民？ 納税者？ 市民？ ああ、そんなのもいたね」

国民など、まるで眼中にない、と考えているとしか思えない言動が、あの人たちには多すぎる。そう、思いませんか？ 新聞、テレビ、インターネットで報道される、国家や地方自治体のレベルで働く各種の公務員たち、そして、その関連組織（※天下りや渡り先の法人・団体など）で働く元・公務員たちの言動を見聞きしていると、あの人たちは、どうやら、自分たちを、国民とも、納税者とも、市民とも、みなしていない節がある。自分たちは、雲の上にいるとか、特権階級だと勘違いをしている節がある。

そう、お思いになりませんか？

何ごとにも例外があるわけですから、今、上で挙げた悪態に当てはまらない、公務員もいるでしょう。でも、そういう人たちの姿が見えない。言葉が聞けない。それらしきものを見聞きしても、陰では何をやっているのか分かったものではない。という気持ちが先に立ちます。たとえば、裏金。あの仕組みにあえて加わらない公務員がいたら、潰されるでしょう。必ず。

あの人たちにとって恐ろしいものって、何でしょう？ 自分あるいは部下の「不祥事」くらいでしょうか？ メディアや司法は、どうでしょう？ 人である以上、怖いでしょうね。たぶん。

ヒトが共食いするように（※当ブログのバックナンバーである「ん？」2009-01-14で少し触れました）、「表象」同士も共食いします。警察官が警察官を逮捕する。検察官が検察官を起訴する。判事が判事を裁く（※この辺の権限に関する記述は不正確かもしれませんが、事実誤認がありましたら、ご教示願います）。市町村役場の職員が市町村役場の職員の死亡届を受理する。公立校の教師が公立校の教師を処分する。財務省のキャリアが財務省のキャリアを刺す（※比喩的にも、実際にも）。

今挙げた人たちが、自分は国民でも納税者でも市民でもない、と感じているとすれば、やはり大きな錯覚です。「威=衣」を脱いで、素っ裸になれば、ただのヒト。ヒトは共食いをする。

衣=権「威」=表象

「表象」はひとり歩きをします。名のない例のモンスター（※当ブログの「名のないモンスター、あるいは外部の思考」2009-01-07に書きました）と同じです。ひとり歩きすることが、実に恐ろしい。普段は感じ取れないだけに、なお恐ろしい。

*

話を戻します（※またです、話が飛びまくって申し訳ありません）。

伝染るんです。

さきほど、この言葉が恐ろしいと書いたのは、以上のような意味です。もっと詳しく説明するために、繰り返します。

すべては、ハンコのためにあるのです。

国家=権威 → 法律=文書 → ハンコ → やくにん（=役人=厄人=疫人=益人）。

表象の連鎖です。表象の自己増殖です。表象の表象の表象の表象の表象……。表象は、模倣し合う。ぶっちゃけた話が、「伝染るんです」。だから、恐ろしい。だから、

ハンコは偉そうにしているし、ハンコの使用をゆだねられたヒトも偉そうにしている

のです。社会科でならった「金印」を思い出してください。立派ですよ。あんなの、1ヶ、欲しいと思いませんか？

ところで、馬鹿高いハンコを売りつけられそうになったこと、ありませんか？ ハンコで人生や運勢が変わると、脅されたことはありませんか？ 買わされこと、ありませんか？ 偉そうなハンコを、ひょっとしてお持ちではありませんか？

それです。

表象の、恐ろしさというのは。リアル（＝身近）に、感じていただけましたでしょうか？

ところで、もしも、ナンシー関が生きていたら、ぜひ消しゴムでハンコを作ってほしかった。そして、心から「ありがとう」と一言、言いたかった。あの人のハンコ（※版画じゃなくて、あえてハンコと言いたい）は、権威とは程遠かった。

ナンシー関と飯島愛にささげた、このブログのバックナンバーである「その点、ナンシー関は偉かった」2008-12-31 を読んでくだされば幸いです。

*

それにしても、どうして、ハンコはこんなに偉くなったのでしょうか？

昔、社会科で勉強したことが役に立ちそうです。確か、次のような話でした。明治維新のころ、この国は必死で、外国、特に欧米からいろいろな制度を持ち込もうとしました。法律は、確かドイツからでしたよね。警察組織を含む行政機構は、フランスからでしたよね。この2つの柱が、どうやら、ハンコの「偉さ」を解くカギのようです。

フランス共和国は、ものすごい中央集権国家です。国民一人ひとりについて徹底的に調査し書類を作る。そして、それを保管する。こういうことにかけては、ヨーロッパで他国の追随を許さない仕組みを作り上げた国らしい。

一方、ドイツ連邦共和国は、連邦という名が示す通り、複数の国が集まってできた国ですから、中央集権はそぐわない。割とゆったりした結合で成り立っているらしい。でも、法律の体系は、ドイツの中でも最も力のあったプロイセン（＝プロシア）のものが、日本がお手本にするにはいちばん都合がよかった。なぜなら、皇帝＝エンペラー＝天皇という、つながりがあったからです（※単純化しすぎたことを、お詫び申し上げます）。

で、政治的に微妙なところは、ご想像、あるいはお勉強していただくとして、結論を言うと、フランスとドイツの「いいところ」を取り入れた結果、

紙いじり＝書類作り＝ペーパーワークが増殖し、それに伴ってハンコが力を得た。

と、いうことらしいのです。

*

ハンコは、これからどういう運命をたどるのでしょうか？ シャチハタの株を持っている人だけの問題ではありません。この国に住む、みんなの問題です。

電子、チップ、ナノテク——このあたりが、今後はからみそうです。ハンコ、スタンプ、サインの代わりに、「電子化された情報 or デジタル化された情報」という形で、国家は国民に烙印を押し、国民の個人情報を集めて、それを処理し保管し利用する。国民の体内に、極小のチップが埋め込められる。ハンコ注射の痕はないけど、見えない刻印

が体内に宿る。そこから、超微量の電波が発信され、また超微量の電波を受信する。

妄想（※もうそう）でしょうか？

「そうだよ、もう、そうだ。時間の問題だね」

やっばし。もう、そうでしたか。と、なると、貨幣＝お金も、似たような運命を今後たどりますよね？ もう、既にポイント、マイレージ、電子マネーなどが、お金の行く手を指しているんですよ？

すべての表象が、電子という「モンスター」に集約されていく。そうすると、電子って究極の表象ではないでしょうか？ 情報を処理するための究極の素（もと）は、「1か0」の二進法だと、思っていました、それとかぶりますか？ つながりますか？

理系では、まったくない自分としては、マラルメを見習って、言葉に賭けて、采（さい）（＝さいころ）を振るしかありません。じゃ、いきます。

えいっや、と一振り、采を振る。

ころり、ころころ、べたっ。

出ました。「さい（＝差異）」と出ました。

「さい（＝七）ですか？（＝そうですか？）むむっつ、おぬし、ずる、をしたな！ それとも、またもや、とちくるったか？」

【解説：ちなみに、采（さい）の目は1から6まで。拳（けん）（※広辞苑でも引いてください）では7があって、それを、七（さい）と呼ぶそうです。今、振ったのは、采であって拳ではない。だから、采を振って、さい（＝七）が出るわけではない。ややこしいですが、そういうわけです。はい。】

再度（＝さいど）挑戦させてくだ「さい」ませ。

えいっや、

出ました。やっぱり「さい（＝差異）」と出ました。

シリアスな話をいたします。「差異」、つまり「ちがう」や「ことなる」――、これが、情報の究極の素（もと）であると、文系出身の自分は、今のところ考えております。これから先、考えが変わる可能性は高いです。

*

それはさておき、「差異」とは、さきほど触れた「1か0」の二進法、ひいては「存在と無」あるいは「有無」とも、大きくかかわっているのではないか？「差異」の究極的な形態は、電子辺りにあるのではないか？身の程もわきまえず、そんなことを考えております。

加速度的なペーパーレス化に伴い、ハンコレス化にも、拍車がかかっています。キャリアから市町村役場の公務員までが、1人1台のパソコンを与えられている時代です。既に紙とハンコなしで、多くの事務は処理されているのに違いありません。

電子政府って、やつです。いいこともあれば、悪いこともあるでしょう。いつの世も、そうです。ヒトがいる限り、そういうことなのです。かつても、現在も、これからも。いいこともあれば、悪いこともある。

現在、自分の体内には、ハンコ注射という烙印を「ひいじいちゃん」に持つ、電子チップ（※マイクロチップでしたっけ？）は埋め込まれていないもようです。どこかの役所の秘密の部屋に、自分の個人情報が詰め込まれたチップが、保管されているかどうかは知りません。知るよしもありません。

*

ハンコの未来、そしてハンコそのものについて考えるのは、またいつかということに
します。とりあえずは、哲学的に大問題である「差異」のほうが気になります。「差異」
について、近々書いてみたいです。哲学してみたいです。

今、こうして埋め埋めチップなしに、膝の上にいるネコの重みを楽しんでいる。それ
だけでも、幸せだと思えるべきなのでしょう。

きょうも、長いものを書いてしまいました。この行までお読みいただいた方に、心よ
り感謝いたします。

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

◆架空書評：何もかもが輝いて見える日

2009-01-18 10:23:11 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、画家名、出版社名、
定価は、すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご
注意願います。)

書名：『何もかもが輝いて見える日』関直美著、えなり ヘレン画、もぐら舎刊、1,300 円＋
税

泣いた。泣いた。大いに泣けた。

演歌の出だしのようになったが、事実だから仕方がない。私は、本を読んで泣くことはない。自分が涙もろいのは認める。映画を見ていて泣くことは、しょっちゅうある。だから、映画館に行くときには、ハンカチとポケットティッシュが欠かせない。子供と犬が出てくると、もう駄目だ。ストーリーが佳境に入る前から何回も涙をぬぐう。

とはいうものの、私は猫が嫌いだ。映画で猫と子供が出てきても、涙腺がゆるむことは、まずない。実は、猫アレルギーなのである。別の意味で、涙が出そうになる。くしゃみが伴うことは、言うまでもない。鼻水も出そうになる。だが、我慢して見る。そして、大抵は満足する。やはり、動物はいい。

本日、ご紹介する本は児童書である。残念ながら、犬も猫も出てこない。登場人物は、多くはない。カルロスという8歳の少年、妹のマルシア、おとうさん、おかあさん、おじさんたち、おばさんたち、そして、曾（ひい）じいちゃん（※カルロスのおとうさんにとっては、おじいちゃん）。場所は、日本の東海地方らしい。自動車を組み立てたり、自動車の部品を作ったりする工場がたくさん出てくることから、その土地がどの辺りかは、およその見当はつく。

ただし、固有名詞はほとんど出てこない。カルロス少年の視点から、三人称で物語がつづられるからであろう。日本語が片言しか話せない、聞いても分からない、まして読むこともできない。当然、書けない。カルロスは、たまにしか学校に行けない。妹の世話をしなければならないからだ。年齢は明記されていないが、マルシアは5、6歳だと思われる。面白いのは、マルシアのほうが、日本語がよくできることだ。とにかく、よくしゃべる女の子である。近所に住む、同じ国から来た人たちだけでなく、周囲の日本人からもかわいがられる。

そんなマルシアは、日本人のおばさんたちやおじさんたちの家に頻りに招かれ、食事やおやつをもらう。ちゃっかりしていて、「おにいちゃんも、一緒じゃなきゃいや」の一言を、決して忘れない。そのため、少し離れた所で、妹を見守っているカルロスも、ご相伴（しょうばん）にあずかることになる。

ある日、おとうさんが工場で大怪我をする。工場は、大きな工場の下請けの下請けをしているらしい。おかあさんは、別の工場で働いている。カルロスとマルシアが、病院でおとうさんの世話をするようになる。おとうさんは、少しは日本語が分かるが、何しろ怪我がひどい。さらに内臓にも重篤な疾患が認められ、医師は長期の入院が必要だと

告知する。

おとうさんは高熱にうなされる。薬の入った点滴を受け、症状が収まると、母国の言葉で子供時代の話をする。カルロスがおとうさんの聞き役になる。この物語が仮に映画だとすれば、一家の母国の言葉と日本語が併用されるために字幕が入り、いささか面倒なことになるに違いない。著者は、徹底してカルロスの目と耳に付き添う。カルロスの視点から、あるコミュニティーを描写することで、2つの言語の相違をうまく処理しているので違和感はない。関氏の筆力に感心した。

おとうさんは、かつて自分のおじいちゃん、カルロスにとっては曾じいさんに当たる人がよく語ってくれた話をする。

生きてると、苦しいことや、悲しいことがたくさんある。痛い目にも何度かあう。しかし、それが生きていくという証しなのだから、受け入れるほかない。毎日働けるだけで、人は感謝しなければならない。働ける土地があり、土地にまく種があり、土地に雨が降り、種から芽が出る。それだけでも奇跡なのだ。畑に水を運び、手入れをし、その日のご褒美（ほうび）として食べ物を口にし、飲み物で渴きをいやす。それだけでも奇跡なのだ。

時には、歌をうたって天と神をたたえ、生き物たちの声に耳を澄まし、作物が育つことを祈る。そうすれば、やがて実りの季節がやってくる。もちろん、嵐もあれば、天から氷のかけらが降るときもある。育てている作物が病で枯れることもある。すべては、天と神が何かを知らせるために、していることだ。

だから、人はその何かを知る努力をしなければならない。その何かは、分からない。神父様はその何かに分かると言うが、わし（※父親は、カルロスにとっての曾じいちゃんが乗り移ったかのように語る）は、その何かは分からないのだと説くカテ様のほうが偉いと思う。大切なのは、分かることではない。分かろうと努力することなのだ。そう説くカテ様のほうが偉い――。

カルロスは、いつの間にか、おとうさんが、その「おじいちゃん」（※カルロスにとっては曾じいちゃん）になって、自分に語りかけているような気持ちになる。カテ様とは何だろう。神父様に分かって、カテ様には分からないこととは、何なのだろう。カルロスは、何度か、おとうさんに尋ねようとするが、おとうさんの病状がよくないことを思

うと、声が出ない。おとうさんの声は、小さく弱々しい。

毎日、点滴を打ってもらい、少し元気が出ると、おとうさんはカルロスに一家の言葉で同じ話を繰り返す。マルシアは、おとうさんの話には関心を示さない。看護師や医師や、その他病院で働いている人たち、そして患者たちのアイドル的存在になっている。

おとうさんの話は30分くらいで終わる。あとは、眠るだけ。5人部屋の病室にいる他の患者は、言葉の通じない日本人ばかり。カルロスは、同じ病室にいる、退院間近の若者から小型のラジオをもらう。その地方には、カルロスの一家と同じ国の人たちがたくさん働いている。ラジオのつまみのある目盛りに合わせると、懐かしい歌や一家と同じ言葉のトーク番組が聞ける。

カルロスにとっては、それだけが楽しみになる。病院にいる限り、マルシアを見守る必要もない。

数週間たった、ある日。おとうさんは、いつもとは違った話をする。このころには、おとうさんの病状はかなり悪化している。今では、おかあさんも、そばに付き添っている。おとうさんは、すっかり痩せこけ、入院時とは比べものにならないほど、衰弱している。内臓の疾患が悪い方向にむかっているらしい。

そんな、ある日――。おとうさんが、急に生き生きとした声を出し、これまで聞いたことのない話をし始める。カルロスとおかあさんが、それに聞き入る。

朝、目を覚ますと、周りのものすべてが黄金（こがね）色に光り輝く日が来る。まばゆさに目を細めるほどの、光が全身を包む。

「わしら人間は、その日のために、つらさや悲しみに耐えながら生きるんだ。神父様は、わしらはいつか、天に昇り、そこで光に包まれると言うが、あれは嘘だ。カテ様がおっしゃるには、わしらは生きていうちに一度だけ、何もかもが光り輝く日を迎える。そのあとは誰にも分からない。カテ様は、そうおっしゃった。誰にも分からない」おとうさんは、曾じいちゃんの声で言う。

そして、ほほ笑む。カルロスとおかあさんは驚く。入院して以来、おとうさんが笑顔を見せたのは、これが初めてのことだからだ。カルロスは、おとうさんの顔に目を近づける。しわの寄った老人のような顔。その目だけが、きらきら黄金色に輝いている。おかあさんが、ナースコールボタンを押す。

以上は、あくまでも、拙文による要約である。本書は、もっとやわらかく、それでいて輪郭のしっかりとした筆致で書かれている。子供たちに、挿絵（さしえ）を見せながら、読み聞かせるのにも適した、リズムのある言葉遣いが心地よい。

カテ様とは何だろう、という疑問がわいた。カルロス一家の母国が南米だとすると、どうやらキリスト教が入りこむ以前から、その土地にあった信仰の対象らしい。そうした二重、あるいはそれ以上の複数の文化が混在する地域が中南米に多数存在することを、何かで読んだ記憶がある。

あとがきを読むと、この小説が書かれたのは、3年前だとのこと。出版されるまでに、かなりの期間がかかるのは、児童書では珍しいことではないらしい。現在の経済状況を考えると、カルロスの家族と同じ境遇にいる人たちのことが気づかれる。

関直美さんの無駄のない文章に、敬意を表したい。随所に挿入される、えなりヘレンさんの絵が、またいい。私が、不覚にも涙を流した謎が解けた。えなりさんの絵の力だ。映画を見ているような錯覚に陥ったに違いない。黄金色ではなく、黄色を用いた最後のページの絵を、私は直視できなかった。

<評者：孟宗竹 真（もうそうだけ まこと）・詩人>

*

昨晚、孟宗竹真氏から、上の原稿をワード文書で添付したメールをいただきました。孟宗竹氏は、当ブログで「不定期」に書評を寄稿していただいている方です。きょうが、第2回目になります。第1回目の原稿である「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13も、お読みいただければ幸いです。

で、昨夜のメールの中で、孟宗竹氏から当ブログ開設者に対し、有り難いご忠告をいただきました。

ちょっと、このところ、ブログの記事が長いが、大丈夫か？ 頑張りすぎているのではないかと心配している。うつと共生するために、のんびりと頑張らずに書くという、本来の目的から逸脱してはいないか？ 内容が、少々「あやうい」のも、非常に気になっている。

以上のような内容のメールでした。凶星です。さっそく孟宗竹氏には、お心遣いに対する感謝の返信メールを送りました。

実は、きのうの朝、ちょっとした、いや自分にとっては驚くべきアクシデントがありました。うちは親が高齢なために、朝は非常に早く起きます。そのためブログは、朝食後の時間を利用して書いています。日ごろ書き溜めているメモを頼りに、思いつくままに一気に書くのですが、このところ少々長くなってきたようだ、とは薄々感じていました。

で、きのう、午前 11 時ちょっと過ぎくらいに記事を書き終え、goo ブログの編集画面にログインし、新規投稿を済ませ、指定のボタンをクリックしたところ、「10,000 文字以上は投稿できません」という表示が出てきました。びっくりしました。ブログの使い方についての、説明文のどこかに書いてあったのでしょうか、想定外でした。

慌てて、記事を読み直し、削除するやら、改行を少なくするやら、辻褄を合わせるのに苦労するやら（※破綻（はたん）だらけの支離滅裂な文章を書いているとは承知しておりますが、一応自分なりに辻褄は合わせているつもりなのです）、パニックりました。何度クリックしても、10,000 文字超となるので、ある段落をばっさり削って、ようやく OK となりました。おかげで、「KO され状態」＝グロッギー（※この言葉、最近見聞きしませんが、死語ですか？）に陥りましたが。

10,000 字？ そんなに、たくさんは書いていないはずだが――。

どうやら「10,000 文字」というのは、文字通りの文字数だけでなく、読みやすくするために、自分が工夫している、改行や、行空け、段落割りも含んでのものらしい。また、

最近、調子に乗って使っている goo ブログ専用の「絵文字」も容量を食うようだ、ということが何となく分かりました。

今後は、気を付けようと思います。

ところで、明日 19 日で、このブログを開設して 1 カ月目になります。ということは、約 30 もの記事を書いたことになるわけで、自分でも信じられません。何しろ、ブログは初めての経験です。

ですので、明日はこれまでの記事に目を通し、自分がこの 1 カ月に、このブログで書いたことを、振り返ろうと思っています。何を書いてきたのか、自分でも不明になってきたので、古い順に記事を並べ、概要をメモしたリストでも作って、記事として掲載し、頭の整理をするつもりです。

きのうのことがありますので、そのリスト作りも長くなりすぎないように注意しようと思っています。

いずれにせよ、

孟宗竹さん、きょう掲載の書評をお送りくださり、ありがとうございました。自分は、あなたが他人とはどうてい思えません。(パ)

09.01.19 こんなことを書きました (その 1)

◆こんなことを書きました (その 1)

2009-01-19 10:07:43 | Weblog

きょうは、このブログを開設して1カ月目になりますので、頭の整理を兼ねて、これまでこのブログに書いてきた記事のリストを作りたいと思います。正直言って。ここまで続くとは期待していませんでした。誕生日をきっかけに、何か新しいことをしてみよう。インターネットに入って遊んでいると、ブログというものがかなり流行っている。ダメモトで、やってみるか——くらいの軽い気持ちで始めました。

何かをやりかけると熱中し、律儀に毎日やってしまうという、うつで苦しんでいる人たちに、よく見られる性格も手伝ってか、きょうまで続いています。ネガティブとポジティブは、決して反意語ではない。日ごろからそう思っていますが、何だかそれを地で行っている気分です。さて、当ブログでは、こんなことを書きました。

*「今日は誕生日」2008-12-19：ブログ開設のいきさつです。キーワードは「うつ」「ブログ」「ネガティブ」「頑張らない」「ネコ」です。

*「地図は現地ではない」2008-12-20：まだ、書く内容と文体とが定まっていなくて、おろおろしています。キーワードは、「文学」「哲学」「言葉遣い」「卒業論文」「ロラン・バルト」「活字のデザイン」です。直接書かなかったキーワードは、「一般意味論」「コージブスキー」「サミュエル・I・ハヤカワ」です。

*「消えてしまいたい指数」2008-12-21：うつに対する自分なりの、対処法について書きました。暗いです。キーワードは、「社会復帰」「自己啓発書」「癒やし」「一般意味論」「コーチング」「セラピー」です。

*「言葉に振りまわされる毎日」2008-12-22：世の中の動きに、興味を持ち始めています。この日あたりで、ブログで書く文体が、定まってきたようです。書きたいテーマも、見えてきたと感じられます。キーワードは、「新聞」「景気」「お金」「言葉」「無」「表象」「表象文化論」です。

*「狂ったサル」2008-12-23：またもや、文体で、おろおろしています。大学に進学した当手を回想しています。気合が入っていて、今読むと恥ずかしいです。キーワードは、「狂ったサル」「哲学」「哲学者」「文学」「大学」です。直接書かなかったキーワードは、「セント・ジェルジ」「國弘正雄」です。

*「あえて、その名は挙げない」2008-12-24：力んでいます。自分が長期にわたり大きな影響を受けてきた人物について、語っているからでしょう。思わず、マジで再読してしまいました。再読し、自分はへそ曲がりだと、つくづく思いました。キーワードは、「文芸批評」「文体」「固有名詞」「読む」「表象」「官能性」です。直接書かなかったキーワードは、「ロラン・バルト」です。

*「遠い所、遠い国」2008-12-25：抑うつ状態が悪いために弱気になり、前日の決意が腰だけになっています。とうとう、あることを白状してしまいました。キーワードは、「夏目漱石」「文学作品」「読む」「固有名詞」「イチロー」「蓮實重彦」「蓮実重彦」です。書かなかったキーワードは、『道草』です。

*「横たわる漱石」2008-12-26：かなり真面目に文学作品を「読む」ということについて考えています。キーワードは、「批評」「夏目漱石」「蓮實重彦」「蓮実重彦」「宮部みゆき」「スティーヴン・キング」です。直接書かなかったキーワードは、『夏目漱石論』「テーマ批評」です。

*「信じてはいけない言葉」2008-12-27：ブログにのめり込みそうになっている自分を、案じています。ブログが公開を前提としているという当たり前のことに、ようやく気づき始めています。つまり、読者の存在を意識して分かりやすく書くように努力しています。それに伴い、文体が定まったようです。キーワードは、「実用文」「固有名詞」「名称」「政治」「宗教」「自己啓発書」です。

*「そして、話はお金に行き着く」2008-12-28：年末となり、感傷的になっています。世の中のことが、気になっている様子がうかがわれます。言語に加えて、お金＝貨幣を表象として扱おうとしています。自分の「あやうさ」に、気づき始めたようです。キーワードは、「お金＝貨幣」「言語＝言葉」「表象」です。

*「匿名性の恐ろしさ」2008-12-29：新聞を読み始めました。経済について、考えようとしています。居直りも見られます。記事が長くなりました。社会の中での自分について、考えようとしています。キーワードは、「経済」「経済学」「貨幣＝通貨」「表象」「マネー・ローンダリング」「金融」「コア」です。直接書かなかったキーワードは、『Eゲイト英和辞典』「コアイメージ」です。

* 「再び「消えてしまいたい指数」について」2008-12-30：プロフィールに下に載せているメールを送る機能を通じて、初めてコメントをもらい、喜んでいます。自分のうつについて、必死で他人に分かってもらおうとしています。キーワードは、「うつ」「指数」「死」「無」です。

* 「その点、ナンシー関は偉かった」2008-12-31：大晦日だというのに、へこんでいます。ほとんど、泣きそう状態で書いています。「哲学がしたい！」と叫んでいます。キーワードは、「哲学」「ナンシー関」「飯島愛」です。

* 「私家版『存在と無』一序文」2009-01-01：元旦。自分なりに、新年の抱負を述べています。へこんではいるが、それでも書くべきことを書かなければならない——と自分に言い聞かせている感じがします。他人事のように、この日の記事を読み返していて、ふと「私家版『存在と無』」の「本文」を書かなければならないことを思い出しました。いつか書かなければ、と考えています。キーワードは、「哲学」「本」「固有名詞」「存在と無」です。直接書かなかったキーワードは、いうまでもなく「サルトル」です。

* 「論理の鬼」2009-01-02：長いです。自分の苦手な理系の言葉を使いながら、哲学の道具である論理と思考について考えています。かなり、シリアスです。めちゃくちゃに、こじつけをやっていきます。恥ずかしいです。でも、愛着を感じる記事です。長かったので、最後に謝っています。キーワードは、「哲学」「論理」「コンピューター」「二進法」「熱」「運動」「物理」「蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』」です。

* 「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03：長く書くことが習慣化してきたようです。自分のやろうとしていることが、一番よく表れている記事です。そうとうヤバい、「あやうい」と思われても仕方ない文章です。キーワードは、「だじゃれ」「オヤジギャグ」「哲学」「うつ」「うつせみ」「坂部恵』『仮面の解釈学』『ジャック・デリダ』『ジャック・ラカン』」です。直接書かなかったキーワードは、「赤塚不二夫」「ステファヌ・マラルメ」です。

* 「haiku と俳句、ベースボールと野球」2009-01-04：グローバルとは何か、について書いています。「haiku」ではなく、「俳句」のすごさを訴えようとしています。キーワードは、「haiku」「俳句」「ベースボール」「野球」「野茂英雄」「サッカー」「相撲」「柔道」です。直接書かなかったキーワードは、「正岡子規」です。

*「翻訳の可能性＝不可能性」2009-01-05：かなり長いです。テーマは、タイトルそのものです。キーワードは、「翻訳」「概念」「フランス語」「ドイツ語」「翻訳通信」「山岡洋一」「学魔」です。直接書かなかったキーワードは、「高山宏」「柳瀬尚紀」「ジェイムズ・ジョイス」「フィネガンズ・ウェイク」「ジョージ・スタイナー」「ホルヘ・ルイス・ボルヘス」です。

*「ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない」2009-01-06：表象がひとり歩きするという、大問題を扱っています。問題が大きすぎて手をこまねき、おろおろしています。必死で、悪態をついています。あげくには、自分でボケとツッコミを演じて泣きそうになっています。キーワードは、「表象」「表象作用」「狂ったサル」「ヒト」です。直接書かなかったキーワードは、『構造と力』「浅田彰」です。

*「名のないモンスター、あるいは外部の思考」2009-01-07：前日に取り上げた大問題を、分かりやすく説明しようと努力しています。とはいえ、ややこしいことを書いています。まだ、言葉が思考に付いて行っていない感じがします。相変わらず長いです。前半と後半に分けるとすれば、前半のほうが、比較的読みやすいのではないかと思います。後半は、書かれている言葉の「内容」ではなく「無い様」に目を配り、その動きを真似る行為を要求しています。キーワードは、「美醜」「フランケンシュタイン」「名前」「整形手術（＝形成外科学）」「美容整形」「お墓」「あなた」「空」「ジャック・ラカン」「ジャック・デリダ」「翻訳」です。直接書かなかったキーワードは、「モーリス・ブランショ」「豊崎光一」です。

*「見えないものを見る」2009-01-08：高校生時代の思い出を冒頭にもってきて、かなり「エッセイ」しながら書いています。テーマは、言語の構造です。年が明けて初めての診察日なので、時間に間に合うように焦って書いています。キーワードは、「英和辞典」「言語の二重構造」です。直接書かなかったキーワードは、「宮川淳」です。

*「読めないけど分かる言葉」2009-01-09：エッセイという形式を意識して書いています。テーマはあって、ないようなものです。でも、よく考えれば、不思議な話です。その不思議な感動を言葉にするのを放棄しています。キーワードは、「日本語」「活字」「字面」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「蓮実重彦」「蓮實シャンタル」「蓮実シャンタル」です。

*「聞こえるけど聞けない言葉」2009-01-10：中途難聴という、自分の持つ障害について、書いています。hear と listen の違いがテーマです。キーワードは、「難聴」「中途難

聴」「聴覚障害」「失聴」「ろう」「内部障害」「内臓障害」「視線」「視覚」「補聴器」「ヘッドホン」「健聴者」「健常者」です。

* 「目は差別する」2009-01-11：障害と障害者について書いています。虫眼鏡を使った「遊び」を紹介し、そこから出発して、「見る」という大きなテーマを扱おうとしています。差別という行為の残酷さだけでなく、「意味の成立」にまで話を拡大しようとしています。尻切れトンボの印象がぬぐえませんが、キーワードは、「虫眼鏡」「活字」「新聞の写真」「書道」「差別」「差異」「意味の発生」です。

* 「投資って何だろう？ お金って何だろう？」2009-01-12：不況という現実を前にして、大の苦手である経済・金融について、自分なりの考えを書こうとしています。その分野に疎いので、専門家に疑問をぶつけるという書き方をしています。酔っ払いがからんでいるような調子の文章になりました。しつこく、からんでいます。今、読むと赤面します。キーワードは、「不況」「経済」「経済学」「実体経済」「金融」「貨幣＝通貨」「電子マネー」「サブプライムローン」「価値」「利子」「投資」「投機」「カジノ資本主義」「金融工学」「資本主義」「ケインズ」「オバマ」「FDR」「JFK」「TIME」「バブル」「ノーベル経済学賞」「ビジネス書」「表象」です。

* 「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビュー。SF小説。「時間のゆがみ」が、世界で同時的に起こるという現象がテーマ。世界の科学者や宗教家たちは、この現象にどう立ち向かうか？ 危機に直面した人類のてんでこ舞いぶりが、風刺的に描かれる。

* 「ん？」2009-01-14：辞書的定義を離れた俗語的表現である、「新語」と「死語」の違いから出発し、「表象の働き」の仕組みについて考えています。徹底的に言葉の表層にこだわるという、当ブログの手法を実践しました。誤解と嘲笑を招きやすい「あやうい」方法を、あえて採用しています。キーワードは、「新語」「流行語」「死語」「否定」「無」「有」「ん」「ん」「U」です。直接書かなかったキーワードは、「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・ラカン」「ジャック・デリダ」です。

* 「「ん」の不思議」2009-01-15：これも非常に長い記事になりました。前日のテーマを、非専門家の立場で具体的・実証的に扱おうとしています。「ん」「む」「う」という意味の素（もと）に、徹底的にこだわることにより、「無」から「有」が生じる瞬間＝意味が成立する瞬間を、言葉にしようとする、ある意味で、絶望的な実践を試みています。キーワードは、「否定」「否定語」「印欧祖語」「インドヨーロッパ語族」「サンスクリット語」

「比較言語学」「フェルディナン・ド・ソシュール」「エミール・バンヴェニスト」「大野晋」「意味」「無意味」です。直接書かなかったキーワードは、「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」です。

*「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16：長いです。誰にでも降りかかる可能性のある、身近なカフカの体験を例にとり、法律とは何かを考えます。作家を志していたころに気づいた驚くべき事実から、司法の根源にある「ハンコ」の存在を浮き彫りにします。誰もが逃れられないハンコの威力についての、恐ろしい話です。キーワードは、「法律」「司法」「ハンコ」「反抗」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「蓮實重彦」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」です。

*「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17：長いです。前日の続編。なぜ、ハンコが偉いのかを、分かりやすく書こうと努力しています。それまで、前面に出さなかったマラルメの名を挙げ、「賭ける」ことによって「書ける」という、現実的な言葉の運動を実践しています。その実践を通して、法律という表象に迫ります。法律のプロフェッショナルである、公務員に対する批判と罵倒も行っています。悪夢ともいえる、ハンコの未来像も描いています。キーワードは、「ハンコ」「ステファヌ・マラルメ」「賭け」「罰（＝ばち）」「罰（＝ばつ）」「無国籍」「無」「官僚制」「公務員」「表象」「伝染」「電子」「チップ」「マイクロチップ」「差異」です。直接書かなかったキーワードは、「吉田戦車」です。

*「架空書評：何もかもが輝いて見える日」2009-01-18：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビューの第2回目。児童書。在日の外国人労働者一家の物語を、長男であるカルロス少年の視点から、描いたもの。入院した父親の口から話される、カルロスの曾祖父にあたる人物の語る話が胸を打つ。

以上です。

*

自分の書いたブログ日記を読み直してみて、思ったことを以下に書きます。

(1) 文字が細かくて読む人は大変だろうな。

(2) だんだん長くなってきたが大丈夫だろうか？

(3) だじゃれとオヤジギャグがひどい。

(4) 本気で書いているつもりだが正気だろうか？

(5) これからも書き続けたい。

そう、思いました。特に、(1)と(2)については、このブログ日記を読んでもらっている方々に、感謝するとともに、お詫び申し上げます。

うれしいことも、あります。抑うつ状態がひどい時にも、書くことで気が紛れるようになった。処方されたお薬を飲む量が減ってきた。この2つについては、素直に「よかった」と思っています。

ただ、文章が長くなってきたことは、心配です。以前、「一種の売文業」をしていたころには、朝から晩まで、文章を書くという請負仕事を続けていたのですが(※もっとも、不定期にしか仕事はありませんでしたけど)、当時の勘というか習い性が戻ってきたようで、少し複雑な気持ちです。苦しいが、楽しい。時間が経つのを忘れる。なぜか苦しみが快感にまで達する。マラソンのランニング・ハイというのは、長距離走の苦手な自分には分かりませんが、長時間書いているうちに心地よい高揚感を覚えることがあります。

でも、気を付けます。うつのだん底を経験した身としては、用心をするに越したことはありません。頑張らない。肩の力を抜く。ネガティブに生きる。やっぱり、のんびりやっていこうと思います。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係なーい。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」——「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬ世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

09.04.29 あう (3)

09.04.30 あう (4)

09.05.01 あう (5)

09.05.02 あう (6)

09.05.03 あう (7)

09.05.04 こんなことを書きました (その6)

09.05.05 スポーツの信号学 (1)

09.05.06 ドラマ信号論 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (2)

09.05.08 信号学的視線論 (1)

09.05.09 信号学的視線論 (2)

09.05.10 信号論 (1)

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論 (2)

09.05.12 信号論 (3)

09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました (その8)

09.05.24 と、いうわけです (1)

09.05.24 と、いうわけです (2)

09.05.25 あられる・あらず (1)

09.05.26 あられる・あらず (2)

09.05.27 あられる・あらず (3)

09.05.28 あられる・あらず (4)

09.05.29 あられる・あらず (5)

09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12.07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第1巻

<https://puboo.jp/book/13134>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/13134>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13134>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第1巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
